東方瑜伽焔

山査子椿希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方瑜伽焔

【Ｎコード】
Ｎ３５０７Ｖ

【作者名】
山査子椿希

【あらすじ】
幻想郷にヨーギーが乱入！神秘のヨーガ・パワーで様々ないざこざを解決する喧々囂々の新感覚ヨーガストーリー！腕を伸ばしたり火を吹いたり浮いたりしますが日本人のオリジナル主人公でお届けします。おまけにほとんど戦いません。

序章　ヨーガとは（前書き）

お話というよりは前口上です。
読み飛ばしていただいても特に問題はありません。

序章　ヨーガとは

ヨーガ。
古代インド発祥の、呼吸法や精神統一など様々な修行法の総称。
解脱や悟りを目指し、日々ヨーギーたちは己のチャクラを活性化させようと過酷な苦行や修練を積む。
厳しい修行に耐え、ヨーガを極めたものだけが解脱を行うことが出来る。
腕を伸ばし火を吹くヨーガのイメージは間違いではない。
肉体を超越した結果腕が伸び、チャクラを自在に操れてこそ火が吹けるのである。
瑜伽（ヨーガ）。
それは肉体と精神を超越した境地を目指す旅。神秘の力。
そして自己の魂を神と一体化させるための術。
この物語は、ヨーガを極めんとする一人の男が、遠く幻想郷を舞台に繰り広げる浪漫譚である。

湖上にて（前書き）

サブタイ通り。

湖上にて

目が覚めると、そこは湖だった。
体を強く打ち付けていた滝は存在しない。代わりに透き通るような蒼天が広がっている。
座っていた岩も存在しないが、それはあまり問題にはならない。座れないのならば浮けばいいだけの話だ。
湖面には細波が踊っている。そよそよと吹きぬける風が心地よい。

私は考える。己の身に何があったのだろうか。
激しい苦行を行っていたはずだ。解脱と悟りを夢見、私は日々修練に励んでいた。
昨日は炎天下の荒野で一人瞑想をし、今日は結跏趺坐で滝に五時間ほど打たれた。
記憶に曖昧なところは無い。二週間前の断食まで鮮明に思い出すことが出来る。
可能性を消去していくことで、私は答えを絞り込んだ。答えは一つ。
つまり、この身はようやく涅槃の境地にたどり着いた、というもの。
自己の存在を超越し、私は体内のクンダリニーを覚醒させることに成功した。
開いた目は全てを見通す。
穏やかな湖も、風も、日差しも、そして湖の周りに生い茂る緑も。
悟った私の前に、あらゆるものが真の姿を現した。結果、今まで見ていた世界とは別のものが目に映るようになったに違いない。
いや、これこそが真実なのだ。今まで見ていた世界こそ、その上辺だけを感じていたに過ぎない。
気づいた瞬間、私の体を喜びが包み込んだ。
ヨーガの修行を始めて早幾年。
ああ、ああ素晴らしきかな。盲目にして矮小な存在であった私は、

ついに開眼したのだ。
そこまで考えて、私は師の言葉を思い出した。

『ヨーガを極めることは悟りを目指すこと。クンダリニーを制御した時、お主の世界は一変するであろう。
だが、誤ってはならぬ。悟りとクンダリニーの覚醒は別物であることをな』
「では、私はその時どうすればよいのでしょうか？」
私はそう訊ねた。すると、師は柔らかに笑いながら、
『案ずることは無い。その時がくれば自ずと分かる。世界が一変する時、既にお主はそれに相応しい人格を備えておるはずだ。
何を行い、何を行ってはならぬか。自分がどうあるべきなのか正しく判断することもできよう』

私は愚かであった。師の言葉を忘れ、喜び浮かれていた己の未熟さをただひたすらに恥じた。
「師よ、私はまだ悟ることは出来ません。しかし、今なさねばならぬことは分かります」
誰にとも無く独白し、私は再び結跏趺坐の姿勢を取り、湖の上に座った。
――まずは、己の未熟さを戒めるため。ここで瞑想を行おう。

湖上にて（後書き）

一人称は苦手です。

湖上にて　B（前書き）

視点を変えました。

湖上にて　B

霧の湖は名の如く、今日も霧に包まれていた。
幻想郷に住む人間の多くは、人間の里と呼ばれる集落に暮らしている。
里は妖怪の賢者によって保護されているため、人間はおろか妖怪達にとっても安全な場所だった。
人は妖怪を退治し、妖怪は人を襲うという幻想郷のルールから切り離された人間の里は、ある種の無法地帯として存在している。
通常、人間が里から外に出ることはそう多くない。
まして里から遠く離れた霧の湖には、幻想郷の人間が足を運ぶことなどほとんど無かった。
霧の湖には悪魔の住館があり、また見通しもあまり良くないため、特殊な事情を持った人間以外は近づくことすら考えない。
何より、霧の湖は妖怪や妖精が集まりやすい。
人間が水のある土地に文明を築いたように、妖怪達もまた水を求めて湖に集うのかだろうか。
理由は定かではないが、ここはそういう土地で、無論それなりに危険であることは広く知られている。

しかし、妖精や妖怪達ならば話は別だ。
彼らは、幻想郷中を好き勝手歩き回るために必要な強さや好奇心を持ち合わせていた。
そんな妖精の中の一人、名も無き妖精は湖へ遊びに来ていた。
妖精の外見は幼く、また力も弱いため、幻想郷の人間にとっては比較的安全な存在だと言われる。
人間にいたずらするのが大好きという迷惑な妖精が多い一方、人里に行って子供達と遊ぶ者も居る。
名も無き妖精も七日に一度ほど、里へ子供達と遊びに出かけるが、

今日はその日ではないらしい。
霧の立ち込める中、名も無き妖精はほとりに茂る草を弄ったり、また水に手を浸したりして湖を満喫した。

うろちょろと遊んでいるうちに、なにやら湖の様子がいつもとは違うことに気がついた。
徐々にではあるが、それまで湖を包んでいた霧が薄くなってゆく。
――昼なのに霧が晴れるなんて、珍しいこともあるものだ。
名も無き妖精は驚きながらも、滅多に見ることの出来ない昼の湖の姿が見られることを喜んだ。
と、穏やかに揺らぐ湖面の上に、なにやら得体の知れぬものが浮かんでいるのが見えた。
よく目を凝らすと、それが人型をしていることが分かる。
湖上の人影は微動だにせず、静かに佇んでいた。
羽は生えていない。なるほど、どうやらそれは妖精ではないらしい。
こんな場所に一人で、しかも宙に浮く人間は居ない。
――妖怪だ。それも、かなりの力を持っているに違いない。
それが、名も無き妖精が出した結論だった。
妖精の多くは妖怪よりも力が劣る。加えて、名も無き妖精は好戦的では無い。
触らぬ神に祟り無し。名も無き妖精は静かに、そして早急に湖を後にした。

湖上にて　B（後書き）

この妖精の性別は女です。

上白沢慧音の憂い（前書き）

ここに来てようやく原作キャラの登場です。

上白沢慧音の憂い

所変わって人間の里。
今は農繁期と言うこともあり、里は活気に満ち溢れていた。
里の中心部、目抜き通りに当たる一画には色々な店や施設が立ち並んでいる。
道具屋や花屋と言った商店から、酒場やカフェなどの飲食店まで、その種類は多岐にわたる。
そんな中心街から少し離れた閑静な区画に、里の子供達が通う寺子屋があった。
教師は上白沢慧音。半人半獣の人妖だが、人間が大好きで、里の人々を大切に思っている。
子供達からの人気も高く、いざと言う時は頼りになるため、大人たちからの評判も中々の人格者だ。
彼女自身の人気はともかく、授業の内容はつまらないと専らの評判だが。

授業を終え、子供達を見送ると、誰も居なくなった教室で慧音はため息を一つ。
彼女は今、一つの大きな悩み事を抱えている。
数日前から里に広がる噂。一人の妖精が霧の湖で見慣れぬ妖怪を目撃したという、他愛も無いもの。
だが、だからこそ慧音は頭を痛めていた。
目撃した妖精は里の子供と仲が良く、寺子屋の子供達にも件の妖精と交友を持つ者が居る。
いくら大人が危険だと戒めたところで、子供の好奇心を押さえつけることは難しい。
この問題を放置しておけば、噂の真偽を確かめようと、子供が湖へ冒険しに行くことも懸念される。

理由はもう一つあった。
妖怪の山に住む天狗、そのうちの一人が発行している「文々。新聞」。
その号外が、今朝方慧音の元に届けられた。これだけならば日常茶飯事だが、問題はその内容である。
紙面を飾っていたのは、霧の湖に現れた謎の妖怪。
取材に赴いたという前置きの後、妖怪に関しての情報が事細かに載っていた。
曰く、全身が浅黒く、湖に平然と浮き、微塵も動かず、目を閉じている。三日もそうしているとのことで、人間ならばおよそ衰弱してしまう。ゆえに、件の彼（どうやら男のように見えるらしい）は妖怪である。それも、天狗の私も見たことのない種類の、と締められている。
幸か不幸か、天狗も直接話をすることは無かったらしいが、本当に妖怪であれば面倒なことになる。
霧の湖に流れ込むいくつかの川、そのうちの何本かは人間の里の貴重な水源となっていた。
言い換えれば、湖と里は川によって繋がっている。
天狗も知らぬとなると、彼が外来の妖怪である可能性も出てくる。
その妖怪が、幻想郷のルールを知らないとしたら。
今は動く気配が無くとも、いずれ川を遡上し、里の人間を襲うかもしれない。
無論、襲撃者はその場で打ち倒されるに違いない。しかし、里の側にも犠牲者が出るだろう。
痛みわけは彼女の望むところではない。
と、ネガティブな未来ばかりだが、それらはあくまで最悪の場合を想定したに過ぎない。
危険な妖怪ではないかもしれないし、そもそも天狗の情報を鵜呑みにするのは馬鹿げている。
――やはり、自分で調べに行くしかないか……。

慧音の考えた対策は、湖に赴いて件の妖怪と対話することだった。
もしくは、排除を試みること。
幸い、自分はそれなりに力のある人妖だ。一人で行っても問題は無い。だが、里を空けるのには抵抗があった。
慧音は再び深いため息をついた。
――どうしたものかな。
速めに手を打つべきなのは分かっているが、妙案が浮かばない。
「……よし」
慧音は立ち上がり、授業で使った道具をまとめて帰路についた。
とりあえず一晩寝かせる。彼女の出した答えだ。

上白沢慧音の憂い（後書き）

なんだか里は大変なことになってます。

代打（前書き）

二人目です。

代打

翌日。
一晩寝かせてみたものの、特にこれといったアイデアも浮かばず、慧音はいよいよ困り果てていた。
時間を置けば状況は好転するかもしれない。そんな淡い希望は砕かれ、事態はさらに悪化してしまったのだ。
それは朝、慧音が目を覚ましてすぐのことだった。
顔を洗おうと井戸に向かった時、慧音は家の前に一枚の紙が落ちていることに気がついた。
奇妙に思いつつ拾い上げてみると、それは新聞だった。「文々。新聞」は号外が多いことで有名だが、昨日の今日で号外が出されることなど初めてだ。
――昨日の版の訂正か？
さらりと内容に目を通すと、寝起き特有の無気力な心地よさは朝霧に霧散した。思わず目を見開く。
「な……」
天狗が襲われた。襲撃者の正体は不明で、現場となった大蝦蟇の池付近では、見慣れない人影を目撃したとの情報がある。我々天狗一同は犯人を許さず、敵と断定するものである。おおよその内容はこの通りだった。
天狗は一族の結びつきを大切にしている、妖怪の中でも珍しい種族だ。仲間がやられれば一族全員が敵対姿勢を取る。今回の急な号外も、恐らくそのためだろう。
このような天狗の特徴は幻想郷では有名なため、好き好んで天狗にちょっかいをかける者は居ない。
だが。
――幻想郷には、な。
湖に現れた妖怪。そして、今回の事件。大蝦蟇の池は、川で湖と繋

がっている。
妖怪と事件が繋がっているとすれば、次は里が襲われるやもしれない。
「よし」
決意を瞳に宿し、慧音はひとまず家に戻った。
村の守護を頼む相手は決まった。速やかに依頼して出発するためにも、まずは寝巻きから着替えなければならない。

「で、私に頼むってわけ？」
「ああ、そうだ」
上白沢家の茶の間にて、慧音の対面（トイメン）に座る緑髪の女性は、心底呆れたようにため息をついた。
その髪の色もさることながら、白と赤で統一した服装が、彼女の爽やかな印象を形作っている。
「私にそんなことを頼むなんて、生まれて初めてよ？」
「実力の無い者に里は任せられないからな……。その点、頼む。この通りだ」
慧音が深々と頭を下げると、緑髪の女性は目を丸くした。
「あら、そんなに本気？」
「本気も何も、そんなつまらない冗談を言ってる暇すら惜しいんだ」
その真摯さが伝わったのか、あるいは何か思惑があるのか、緑髪の女性は二度頷いた後、にっこりと微笑んだ。
「いいわ。そのお話受けてあげる」
「本当か！？　すまん、恩に着る」
嬉しさのあまり、慧音は下げた頭を跳ね上げた。
その頭を再び下げようとしたが、緑髪の女性がそれを手で止めて続ける。
「その代わり……一つ条件があるんだけど」
「私にできることなら何でもやろう」
「湖に行くんでしょ？　あそこは花が沢山咲いて良い場所よね」

「花か！？　摘めばいいのか！？」
まるで自生している花全てを摘み滅ぼさんとするかの如く、慧音は意気天を衝く勢いで答えた。
「落ち着きなさい。この季節だとそろそろ杜若が咲くはずだから……それを一輪お願いするわ」
「一輪でいいのか？　それくらいならこの私にも出来る。大船に乗ったつもりで待っているといい。したらな！」
言うが早いか、小脇にまとめていた荷物を抱えて慧音は茶の間から出て行った。
無用心にもほどがある、と緑髪の女性は苦笑する。
「……したらな？」
残ったお茶をすすり、彼女も慧音邸を後にした。
大人たちは皆農作業に出かけているのか、里の中には子供達の姿しか見えない。
里の外を囲うようにして広がる水田、そこでは稲がその花を一面に咲かせていた。

代打（後書き）

いざ湖

湖での出会い（前書き）

タイトル詐欺です

湖での出会い

霧の湖は今日も霧に包まれていた。
その男もまた、今日も湖面のやや上空に浮いている。
彼を目撃した者は数名居たが、妖精や妖怪も、誰もその邪魔をしようとはしなかった。
恐れをなしているのか、それとも単に近づきたくないだけなのか。
どちらなのかはわからないが、湖上の男はそもそも自分が人外なる存在の闊歩する地に在ることに気づいていない。
ゆえに、彼はこの地に現れてから今日までずっと、途切れることなく瞑想を続けていた。

里から湖までは、歩けば黙って半日はかかる。
距離自体はそれほどでもないが、問題はそこへ至るまでの道のりにあった。
里の人間は滅多に近づかないため、道には雑草が生い茂っており、湖を目指す者の歩みを妨げる。
また、道中で妖怪や妖精と出くわすことも考えられるため、非常に面倒な旅路となるのだ。
――まあ、歩かない者には関係の無い話だけどな。
幻想郷で最も一般的な移動法は徒歩だが、それはあくまで人間に限ってのことである。
即ち、人ならざる妖怪妖精の類、あるいは魔女や魔法使いなどは含まれていない。
彼らも歩くには歩くが、長距離を移動する場合は主に空を飛ぶことが多い。
空を飛べば地上の障害物に左右されることもなく、徒歩よりも早く目的地にたどり着くことが出来る。
半妖である慧音は空が飛べるため、歩くよりもはるかに速いスピー

ドで湖まで到着した。
相変わらず湖は霧に覆われている。目的の彼を探すのは一苦労か、と慧音は嘆息した。
「大体、そんな怪しい奴が本当に居る……ん？」
湖には先客が居た。ほとりに立っていた名も無き妖精は、突然の来訪者に驚いているようだった。
「お前は確か、里で良く子供達と遊んでいる……。ここで何をしている？」
「よ、妖怪を探して……」
妖精はおずおずと答える。
「妖怪？　例の湖に現れたという奴か？」
「は、はい……」
子供達と付き合いがあり、湖に足を伸ばす妖精。慧音は直感的に理解する。
――なるほど。噂を広めたのはこの妖精だったのか。
「その妖怪は今どこに居るか知らないか？」
「……え？」
「私は彼に会いに来たんだが、如何せんこの霧でね。探すのがちょっと大変そうなんだ」
「え、えっと……多分、もうちょっと北のほうに……」
「なるほど。ありがとう。じゃ、私はこれで失礼するが――」
慧音は妖精に背を向けると、
「里の子供達と仲良くするのはいいが、あまり危険なことは教えないでやってくれ」
そう妖精に言い残し、空高く舞い上がった。

遐逅　前編（前書き）

長くなるので区切りました。

邂逅　前編

迫り来る。何かが接近してくるような、そんな気配を感じた。
視線を感じたことは今までも何度かあったが、ここまで明確な気配の接近を感じたことは無かった。
気配を隠さないということは、隠す理由が無い、あるいは隠さないことで有利になるような目的を持った者だ。
つまり。
――この気配の主は……私に用があるのだろう。
ここがどこの世界かも分からぬまま、気の向くままに瞑想を続けてきた。
しかし、そうもいかなくなったらしい。これもまた運命に違いない。殺気は感じない。そもそも、殺しても何の利益も生まぬ私を殺す者も居ないだろう。
「おい。そこのお前」
不意に声が耳に入った。若い女の声のようだが、油断は出来ない。真上はあまり得意ではないからだ。
声は上空から聞こえた。普通、人間は空を飛ばない。ならば、声の主は普通ではない者に違いない。
「何用かな」
来訪者には目もくれず、結跏趺坐を組んだまま訊ねる。
「警戒しないで欲しい。私はお前と話をしに来ただけだ」
凛と通った声からは、声の主の誠実さが伝わってくる。恐らく彼女は嘘を述べていない。
「なるほど。しかし、お主は人の頭上に立って居る。用心されても仕方ないと思わないか？」
「……それはそうだな。どうだ、私のところまで飛べるか？　飛べないなら私がそっちへ――」
「心配は無用。ヨーガの力をもってすれば、それくらい容易きこと」

声を遮り、一瞬にして彼女の元へ移動してみせる。
彼女は目を丸くしていたが、すぐに先ほどのような毅然とした態度となって話を続けた。
「私の名は上白沢慧音と言う。先にも言ったとおり、話し合うつもりでここに来た。お前に危害を加えるつもりは無いから安心してくれ」
先ほど、私は彼女を人間だと思った。しかしどうやら、よく見てみれば彼女は人間ではないらしい。
名前こそ日本人名だが、外見は私の知る日本人像とは程遠い。
姿かたちは全く人間のそれと同じだ。しかし、なにやら本質の部分が違っている。
恐らくこの地は日本でもなければ、ひょっとすると地球でもないのかもしれない。
「私の名は垂石無（たるいしなし）。ここではヨーガの修行を行っている」
無礼のないよう、こちらも出来る限り紳士的に返答する。
「ヨーガ？　いや、それはまあいい。早速だが質問させてもらうぞ。悪いが急ぎの用なんだ。質問があれば後で聞く」
「そういうことなら仕方あるまい。何でもお答えしよう」
「ではまず……お前はどこから来た？　いや、お前は一体何者なんだ？」
その真剣な顔つきに、私は違和感を覚えた。彼女はどうも冗談で聞いているわけではないらしい。
見て分からないのだろうか。純然な人間たる私が、彼女の目には化け物として映っているのだろうか。
「これは異なことを。私は人間、何の力も持たぬちっぽけな存在だ」
目標を忘れ、手段を目的と履き違えていた愚かな人間。それが私だ。
「何の力も？　馬鹿言え、人間は浮いたり瞬間移動したりしないと決まっているんだ」
「確かに一理ある……。だが、全てはヨーガの力によるもの。それにお主も浮いているではないか」

「ああ、私は純粋な人間じゃあないからな」
「純粋な人間？　それは一体どういう意味だ？」
先ほどから妙だと思っていたが、ここに来てさらに理解しえぬ話題が登場した。
「えーと……すまん、ちょっと時間をくれ」
そう告げるなり、慧音と名乗った女性は一方的に会話を打ち切って黙りこくってしまった。
やることもなくなってしまったので、私は一人瞑想を再開した。

邂逅　後編

しばしの沈黙の後、考えがまとまったのか、彼女は再び口を開いた。
「お前、もしかして外から来たのか？」
「外？　すまぬ、話が見えてこないのだが」
やはり、と呟き、慧音はこの地について語り始めた。
どうやらここは幻想郷といい、私は元居た世界からこちらへ迷い込んでしまったらしい。
「なるほど、道理で景色が一変したわけだ」
「……いや、その時点でおかしいとは思わなかったのか？」
「これもヨーガの導きにすぎぬ」
「……そうか。それはまあいい。問題はここからだ」
彼女が言うには、この幻想郷とやらには人間の他に、妖怪や妖精、幽霊などといった者達が暮らしているらしい。
その種族の一つ、半人半妖。彼女はそれに当たる。
それ相応の力を持っているため、自分は空を飛ぶことが出来るのだ、と慧音は続けた。
今挙げたような様々な力を持つ人外とは違い、人間は脆弱な存在である。
定められたルールにより、幻想郷の妖怪たちは中に住む人間を襲うことを禁じられている。
しかし、稀に現れる外から来た人間、外来人と呼ばれる者たちはその限りではないらしい。
外の世界で重罪を犯した、あるいは自殺を試みた者のみが、妖怪たちのために幻想郷へと連れ込まれる。
私のように外から来たものは、上記の理由からその多くが人里にたどり着く前に食われてしまうという。
私が今日まで生き延びられたのも、ひとえに僥倖、ヨーガの神の導きによるものに違いない。

「じゃあ、お前は本当に人間なのか？」
「先ほどからそう言っているではないか。私が人間以外の何に見えると言うのだ」
「いや、浮ける上に瞬間移動が出来る。おまけにその風体だ。流石に説得力に欠けるな……」
上半身はほぼむき出し、ぼろぼろになった布を纏い、全体的に浅黒い肌の中で、スキンヘッドには朱色で円が描かれている。
――言われてみればそうかもしれんな……。
今までの私は修行に夢中になるあまり、外見のことなど気にしていなかった。
だが、やはり他者の目には奇妙な格好として映るのだろう。気をつけねばなるまい。
「気を悪くしないで欲しいんだが、恐らくお前は幻想郷の妖怪たちから、妖怪として認識されたんだ。それもかなり力のある妖怪だとな」
「ま、まさか……この格好がそれほどの誤解を生み出すとは……」
打ちのめされた気分だった。
あらゆる苦行を積んできたが、かつてこれほどまで精神を動揺させたことは無い。
「落ち込むことは無いぞ。奴らから狙われなかったのは好都合と考えるんだ」
結果としては良かったのだろう。だが、腑に落ちなかった。
「私がここに来た理由はさっき言ったな」
「……うむ」
「この辺で妖怪が襲われる事件があったんだ。里じゃお前は外から来た妖怪ってことになってるから、もしかしたらその犯人やもしれないと思ってな。確かめに来たんだが……その様子じゃあどうも私の見当違いだったようだ」
「私はずっとここで瞑想をしていた。証明する手立ては無いが……」
私の表情が深刻そうに見えたのか、慧音は慌てて両手を振った。

「ああ、いい。わかってる。地理に明るくないものが、わざわざあんなところまで行って妖怪を襲う理由が無い。お前さんは無実だよ」
「ありがたい。私も疑われるのは本意ではない」
「さて、と。少々話し込んでしまったな。日が傾いてきた。もう少し話を聞きたいところだが……どうだ、里へ来てみないか？」
「里？」
「人間が暮らしてる集落さ。さっき言ったろう？　そこに私の家もある。茶くらいは――と、そうだ。頼まれ事をされていたんだった」
「頼まれ事？」
「花を探してきてくれとな。参った、今から探すのは中々に手間だぞ……」
「任せたまえ」
目の前に助けを必要としている者があれば、それを助けるのはヨーガ（ヨーギー）の修練者として当然の務めだ。
「言い忘れていたが、この腕は伸びるのだよ。我が手は困っている者に差し伸べるために存在する。たとえその者が遠くにあっても、それが可能なようにと」
両腕を伸ばして見せると、慧音はたちまち訝しげな目つきとなって私を眺めた。
「……お前、本当は妖怪なんじゃないのか？」
「私は人間だと言っている！」

遐逅　後編（後書き）

とりあえず里へ。

里での出会い（前書き）

三人です。

里での出会い

私達が里に着いた時、既に空は茜色に差し掛かっていた。
私は導かれるまま、幻想郷に住まう人間の大半が暮らすという里へと足を踏み入れる。
こういうのは第一印象が肝心だ。特に浮くなんてのはもってのほかだ。
彼女にそう釘を刺されていたので、私は言われた通りに徒歩で里の中を進んだ。
目指すは寺子屋、そしてその隣にあるという上白沢邸である。
夕暮れと言うこともあり、里の通りは家路に着くものたちでにぎわっていた。
道中慧音が村人たちからちらほらと挨拶をされている所を見るに、どうやら彼女の知名度は高いらしい。
大人も子供も皆決まって「慧音先生」と彼女を呼ぶ。彼女が里で教鞭をとっていること、そして皆に慕われていることは、声をかける村人が皆笑顔なことから容易に察することが出来る。
怪訝そうな視線を投げかけられることもあったが、己の風体がいかに珍妙かを痛感している私は、それらを甘んじて受け入れた。これもまた修行だ。

「さて、ここだ」
落ち着いた佇まいの家の前に着くと、彼女に先導されて門をくぐる。
玄関の戸を開け、慧音は先に家に入って私を招き入れる。
飾り気の無い内装とは裏腹に、その実手入れの行き届いた良い家であることが見て取れた。
「久しぶりに己の足で歩くと中々に疲れるな……」
「そう言うな。里の人間を驚かせてもいいことなんてないぞ」
案内された茶の間には先客が居た。緑の髪をした、穏やかそうな雰

囲気の女性である。
「ん？　……何故お前がここに居る？」
「あなた鍵を閉めていかなかったでしょうに。物騒だから留守番してやってたのよ」
緑髪の女性もまた客人らしい。どうやら二人は顔見知りのようだ。
「ああ、紹介しよう。彼女は風見幽香と言ってな、花好きな妖怪だ。私が留守にする間、里の安全を預けた相手だよ」
「よろしく。……で？　そっちの化け物みたいなのが新しい妖怪ってわけかしら？」
私に座布団を勧めながら、慧音が答える。
「おや、お前ほど強大な妖怪でも分からないか」
「……何ですって？」
幽香は眉をひそめた。
「化け物とは失敬な……。私はただの人間だ」
「人間？　……本当に？」
人がそう言っているにも関わらず、疑わしげな顔をする幽香に、慧音は湖での一部始終を話した。
「ふぅん……。宙に浮ける上に瞬間移動が出来て、おまけに腕が伸びる人間ねえ……」
「これらは全てヨーガによるもの。あなたもヨーガを始められてはいかがかな？」
合掌した状態で体をひねり、ヨーガによって得た柔軟性を見せ付けてみる。
「遠慮しとくわ。私は花以外興味が無いの。……それで、私の頼んだ物はちゃんと持ってきてくれたんでしょうね？」
「杜若だな。勿論、ちゃんと採ってきたぞ」
慧音は胸を張って答えた。
「と言っても、私一人じゃ探しきれなかったかもしれんが……」
彼女の淹れてくれた緑茶をすすりながら、私は摘んできた花をちゃぶ台の上に乗せる。

「あら、中々良い杜若じゃない」
「彼がすぐに見つけてくれてね。本当に助かったよ」
「ヨーガの力をもってすれば、これくらい容易いことだ」
あの後、慧音と私は湖のほとりを捜索した。当初、慧音は何故か私の協力を頑なに拒んだ。
しかし小一時間経っても一向に杜若を探し出すことが出来ず、これを放っておいてはヨーギーの名が泣くと思われたため、勝手ながら私も捜索に加わった。
私が草むらに目をやると、たちどころに杜若の群れが見つかったのである。
これには慧音も驚いていたようだが、日も暮れかけていたので一輪だけ摘み取り、我々は湖を後にした。
「失せ物探しの才能でもあるのかしら？」
幽香は満足げに杜若をもてあそぶ。
「そうかもしれないな。……さて、私達はもう少々話を続けるが、お前はどうする？　今日の礼に晩飯くらいならご馳走出来るが」
「いや、遠慮しておくわ。早く帰ってこの子を花瓶に活けてあげないと」
すっくと立ち上がり、幽香は茶の間から立ち去った。
慧音も彼女を追いかけて部屋を出て行ったが、玄関まで見送りに行ったのだろう。
予想通り慧音は数分も経たぬうちに茶の間へと戻ってきた。
「さて……もういい時間だ。腹は減ってないか？」

「飛べる人間……ねえ」
里を離れ、家へ向かって空を飛びながら、幽香は一人ごちる。
彼女は以前、空を飛ぶ人間と出会ったことがある。幻想郷の存在と深く関わる神社、そこの巫女だ。
幽香が「花を操る程度の能力」を持つように、巫女もまた能力を持つ。

巫女の能力は「空を飛ぶ程度の能力」。あらゆる因果や存在から浮くことの出来る、曰く幻想郷最強の能力。

――まさか、ね。

その能力に似た力を、それも外の人間が持つなんて、考えるだけバカらしい。

彼女は自らの空想を否定し、優雅に空を舞い続ける。

里での出会い（後書き）

三人同時に出すと疲れます。

理由（前書き）

里編その2です。

理由

「腹は減っておらぬ。空腹は当の昔に忘れた身でな」
そう返答したはずなのだが、数分後、私の目の前には白い米や惣菜、香の物が並んでいた。
「忘れることは出来ても、こっちに来てから食ってないんだろ？遠慮することは無い、誤解したお詫びだ」
「う、うむ……。では、ありがたく頂戴しよう」
既に料理は出来上がっている。ここで断るのは道に反するだろう。
私は差し出された箸を手に、まずは香の物をつまんでみる。
「どうだ？　外の人間の口に合うかわからないが」
「うむ、これは旨い……」
当然と言えば当然のことだが、味付けは実に日本人の私好みのものだった。
私の答えに、慧音は相好を崩した。旨いと言われて気を良くしたのか、こちらもつついてみろと勧めてくる。
外の世界で修行していた期間も考えると、かれこれ十日ほど何も口にしていなかった。
いくら空腹を忘れる術を身に着けたとはいえ、流石に限界が来る頃合だったやもしれない。
――そう思えば、慧音はいわば命の恩人か。この一飯の恩はいずれきちんと返さねばならんな。

夕餉の時間はあっという間に過ぎていった。気づけば夜も深まり、家の外から聞こえていた声も今は静まり返っている。
「で、お前は重罪人でもなければ自殺志願者でもない……。まったく、あいつがきちんと確かめないからこういうことになるんだ」
「それについては釈明させていただきますわ」
「む？　この声はどこから……」

私でも慧音でもない、三人目の声が響き渡る。今、この部屋には私と彼女の二人しか居ないはずだ。
思わず声の主を探そうとして室内を見回していると、慧音に落ち着けとたしなめられた。
「……気にすることは無い。お前をこの世界に連れ込んだ張本人のお出ましだ」
空間が割れ、その闇から扇子を手にした腕がぬっと登場する。
「そういうことです。訳あって腕だけで失礼」
「お主は……一体？」
「私は八雲紫。この幻想郷を愛する者ですわ」
気品のある物腰とは裏腹に、妙な胡乱さを感じさせる声色だ。
「こいつが外から人間を連れてくる大妖怪だよ。お前も元はと言えばこいつが幻想郷に連れてきたんだ」
「ええ。なにやら三日三晩も飲まず食わずで体を痛めつけているようでしたし、どこをどう取っても自殺志願者にしか見えなかったんですもの」
「あれは修行だったのだが……」
悟りのためには苦行もまた必要なこと。それを自殺と勘違いされては、修練者たちの立つ瀬が無い。
「私は死ぬ気など毛頭無かった。基準が主観というのはどうかと思うぞ」
「今回ばっかりはそのようですわ。謝らせていただきます」
見えているのは腕だけなので頭を下げたかどうかは分からないが、八雲紫と名乗った腕は非を認めた。
「うむ。……で、話はそれだけか？」
「いいえ。でも、続きはまた今度にいたしましょう」
「おい、ちょっと待て。この際だから私も言っておきたいことが――」
慧音の非難を避けようとしたのか、彼女の言葉を無視して腕は闇へと消え、空間に開けられた隙間は元通り消滅した。

「全く……」
一人ぷりぷりとしていた慧音だったが、私の視線に気づくと慌ててこちらを向きなおし、取り繕うかのように話題を変えた。
「あ、も、もうこんな時間か。お前、今夜の宿は決まってる……訳ないよな」
私は静かに頷いた。
「私は無一文でな。外でも特に気にすることなく眠れるので問題は無い。馳走になったな」
流石に一つ屋根の下、淑女と二人で夜を過ごす訳には行かぬ。
夕飯の礼を言い、家を出ようとする。と、慧音がそれを遮った。
「まあ待て待て」
「ヨガ？」
「お前、どうせ里の外で浮いたまま寝るつもりなんだろ？　里の人間を驚かせるわけにはいかない。とりあえず今晩は泊まっていくといい」
「しかし、仮にも男が若い女性の家に泊まるわけにもいかぬだろう」
「誰も家に泊めるとは言ってないさ。そうだな……寺子屋の教室が空いているから、お前がそっちで寝れば問題無いだろ？　布団は後で出すから持って行け」
結局彼女の提案を断りきれず、私は布団を持たされて寺子屋へと案内された。
出会ったばかりの人間に飯を食わせ、宿を貸すほどの面倒見の良さ。
まさに聖人君子のような女性だ。
彼女が里の皆に慕われる理由が分かったような気がする。
里の夜は静かだった。

理由（後書き）

そういうわけでした。

夜が明けて

夜が明けた。
里の朝は早い。
この地の人間は農業に従事する者が多いため、ほとんどの者が日の出と共に起床するらしい。
日頃の訓練のせいか、四時間眠ったところでパッチリと目が覚めてしまった私は、朝の里の様子をしげしげと眺めていた。
考えてみれば、幻想郷で朝日を見るのは初めてのことだ。
あらゆる常識が違うこちらの太陽は、あちらの世界のそれと何の差異もなく輝きを放っている。
恐らく、人間の営みにも何ら違いは無いことだろう。そう思うと、私は妙な安堵感を覚えた。

――それにしても。
私の中には二つの疑問が渦巻いていた。
一つは、昨夜八雲と名乗る妖怪が仄めかしていた、もう一つの話とやらだ。
私に何か言いたいことがあるのは間違いない。だが、一体何を話そうというのか。
これ以上何を聞く必要があるのか。私には皆目予想出来ぬことだった。
二つ目の謎。それは、慧音の言っていた妖怪襲撃事件の犯人についてである。
この世界では人と人外がお互いに都合の良いバランスで共存しているとの話だった。
襲われた天狗が一族を大切にする妖怪であることは、こちらでは有名な話らしい。
ならば、その天狗の恨みを買う理由が浮かんでこない。ただ住みに

くくなるだけではないか。
――なるほど。
幻想郷内に疑わしい者が居ないのならば、外から来たものを疑うことは道理である。
合点がいった。慧音はここまで考えて私を疑っていたのか。
里の平和のため、と彼女は私にそう言った。彼女が里を愛し、里に愛されていることは十分に理解した。
彼女が里を離れることを良しとしないのも、ひとえに里を守ろうという一心から来ているに違いない。
犯人を捜し出すこと、そして里を守ること。彼女はそれを一人でやってのけようとしている。
無論それが為し得ぬことは、当の彼女も知っている。彼女は一人しか居ない。二つの場に存在することは不可能なのだ。
つまり。
――慧音は困っている。ならば、ヨーギーたる私が取る行動は一つしか無かろう。
一宿一飯の恩は返さねばならない。ヨーギーとして、それ以前に人として、それは至極当然のことである。
慧音はまだ目を覚ましていないようだったが、起こすわけにもいかぬだろう。
私は一人寺子屋を離れ、民家の集まる区域へと足を伸ばすことにした。
まずは情報収集、里の住民達への聞き込みだ。

夜が明けて（後書き）

出てくるのが一人だけだと楽です。

既視感

里の通りには人影がちらついていた。
話を聞こうと声をかけると、皆一様に面食らったような顔をするものの、すぐに笑顔となって質問に応じてくれた。
里の民は心が優しいものだ。胸を打たれた私は、より一層この里を守ろうとする慧音に協力しようという気持ちになる。
自らが化け物と思われても構わぬ。悪を滅するため、これは必要な泥だ。あえて私はそれを被ろう。
しかし、結果はあまり芳しくないものだった。
十数名の村人に話を聞くも、有力そうな情報は得られなかったのである。
――場所を変えてみるか。
私は通りを進み、今居た居住区を取り囲むようにして広がる田畑を目指した。
土の質、気温の上下、日々の天気など、農業には様々な環境の変化が関わってくる。
農作業に勤しむ人々ならば、何かごくわずかな変化をも感じ取っているかもしれない。
後にしてみれば本当にうっかりしていたとしか思えないが、私は宙に浮いて家々を越え、一直線に田畑へと向かった。

浮遊する際、私は常に結跏趺坐の姿勢を取る。
これは精神の集中のためでもあり、また、いくら浮いているとはいえ立ちっぱなしというのは気が引けるからだ。
さて、私は今窮地に立たされている。いや、前述の通り座っているわけだが。
「お、大人しくしやがれ！　この妖怪め！」
農具を手にして身構え、交戦の意思を見せる村人が叫ぶ。

「だから私は妖怪ではない！！」
「どう見たって人間には見えねえじゃねえか！　それに浮いてるし！！」
「ぐぬぬ……」
事の発端は以下の通りである。
農作業中、突如空から現れた私を見て驚いた血気盛んな若者が、噂の妖怪が里を襲いに来たと騒ぎ立てたのが始まりだった。
なんでも噂の新種の妖怪の細かな風体は新聞によって遍く知られていることらしく、それに一致する風貌の私はあらぬ疑いをかけられることとなったのである。
私が人間であることを知っているものは、里では慧音だけなので仕方なかろう。だが、不幸な思い違いは私から弁明の機会を奪った。
何にせよ、このままでは誤解を解くことは出来ない。ここは一つ、無害さをアピールせねばならぬ。暴力では何も変わらぬのだ。
私は掌を開き、両の手を地面にぺたりとくっつけると、出来る限り頭を低くする。
「落ち着きたまえ。お主達は私を大きく誤解をしている」
「な、なんだよその姿勢は！　人を馬鹿にするのもいい加減にしやがれ！！」
馬鹿にする気は毛頭無いのだが、と言いかけて気づいた。
非戦をアピールしてはみたが、そもそも浮いたままなので逆立ち――もとい逆座りしているように見えたのだろう。
――確かに、こんな格好をした奴が何を言っても挑発にしか聞こえないのは道理か。
「ち、畜生……。こうなったら――」
「待て！　待て待て！　待つんだ！！」
手にした農具を振り上げ、あわや暴力による調停の火蓋が切られようとした刹那、それを阻止しようとする叫び声が響き渡った。
その声は私のものではなく、無論村人のものでもない。
目の前の村人はその声で我に返ったらしく、農具をゆっくりと地面

に下ろし、大きなため息をついた。
声のした方へ目を向けると、そこにはゼエゼエと息を切らす慧音の姿があった。
「慧音先生！　聞いて下さいよ！　この妖怪が――」
「ああ、ああ。大体の事情は既に聞いている。すまないがこの場は私に任せてもらえないか？」
村人が開始しようとした状況説明と嘆願に割り込み、慧音は事態に収拾をつけようとする。
「え、ええ……そりゃ慧音先生に任せるのはやぶさかじゃないですが……この妖怪大丈夫なんですか？」
「だから私は妖怪では――」
「お前は少し黙ってろ。後で話がある」
「う、うむ」
慧音の鋭い眼光に気おされ、私は口をつぐむ他なかった。
「さて、里の皆には後ほどちゃんと説明しようと思っていたんだが、このような形になってしまってすまない。この男は垂石無と言ってな、まあなんだ、こんなりをしてはいるが立派な人間だ。新聞の記事は天狗の推測に過ぎない。有り体に言えば大嘘だったのさ」
私について簡潔に、それでいて必要な点をしっかりと押さえた説明を、集まった村人に聞かせる。
その堂に入った様は流石教師と言ったところだろうか。結局誤解は無事解消され、大問題に発展することなく解散となった。
勿論、私はその後慧音にこってりと絞られることとなるのだが。

既視感（後書き）

どこかで見たようなやりとりです。

目撃者（前書き）

そろそろ名前付けてあげないと辛いです。

目撃者

寺子屋を宿にした生活も、気がつけば十日が経っていた。
いまや私を妖怪と思うものは一人も居ない。誤解を解くため、慧音が奔走してくれたのである。
里の生活にも慣れ、また里の民たちとも打ち解けることが出来た。
これもひとえに彼女のおかげだ。
無論、私もただ居座っていただけではない。
妖怪の山から来た射命丸と名乗る天狗の記者の取材を受けたり、瞑想しようと霧の湖に出たら氷の妖精にいたずらをされたり、博麗の神社とやらまで使いに出かけたり、何故かまた風見幽香の依頼を受けて花を探しに行ったりと、日々様々なことをこなした。
全ては慧音への恩を返すため、彼女が一人で抱えようとしている里の平和を守る手助けをするため。
しかし、肝心要の天狗襲撃に関する情報は一切得られなかった。
時間は静かに流れてゆく。私の心に焦りが募り始めた時、ようやく事件は新たな展開を見せた。
里に私の噂をもたらした名も無き妖精、彼女がひょっこりと寺子屋へやってきたのである。

最初は寺子屋に通う子供達と遊びに来たものと思っていたが、なにやら様子がおかしい。
授業が終わった後、私と慧音で話を聞いてみると、数日前に見慣れぬ人間に襲われたのだと言う。
「……それで、お前は何時復活した？」
「今朝です。襲われた本人だから、相手の人相もはっきり分かっています」
「なるほど……中々有力な情報だな」
「そうです。有力ですよ」

今の会話に解せぬ点があったため、話の腰を折る覚悟でその件に関して慧音に聞いてみると、
「妖精は死なないんだ。いや、死んでも生き返ると言った方が正しいかな」
と、そう補足された。不死の存在が跋扈している。なるほど、やはりこの地は常識の外にあるわけだ。
「肝心の人相だが、どうやって我々にそれを伝えようと言うのだ？」
「こういうのは絵が手っ取り早いな。……先に言っておくと、私は絵が苦手だぞ」
「私もあまり得意ではない……」
「あ、私も絵はあんまり……」
三人の間に重い空気が漂った。絵心のあるものが居なければ、似顔絵は完成しない。
私が口をつぐんでいると、名も無き妖精は話を進めようとしておずおずと口を開いた。
「じゃ、じゃあどうするんですか？」
「うむ。里には様々な人が暮らしておる。我々が駄目でも、他に絵の上手い者が居るだろう」
とはいえ、私はそれほどまだ里の住民に詳しくない。
里の人口は多くないとはいえ、少なくもない。その中から絵の得意な者を探すのは時間がかかりすぎる。
またもや黙って考えていると、眉間に人差し指を当てて考え込んでいた慧音が突如手を叩いた――どうやらひらめいた時の癖らしい。
「あー……そうだ。私に心当たりがある。そういえばあいつは自分で絵を描いていたんだった」
こそあど言葉で言われても、私や妖精の彼女には分かりかねる。一人納得する慧音に、私は尋ねる。
「あいつとは？」
「幻想郷の歴史を綴る仕事をしている者が友人に居てね。歴史を教える私と、歴史を記す彼女。まあ、同業者のようなものだ」

「絵は得意なんですか？」
妖精の問いに、慧音は自信満々に答える。
「ああ。歴史書に入れる挿絵も自分で描いている。中々の腕前だよ」
慧音が言うなら間違いないだろう。そう考えたのは私だけではなかったようで、妖精の彼女もまた安堵の表情を浮かべていた。
「よし、決まりだな」
反論は何も出なかった。慧音はすっくと立ち上がり、伸びをした後で私達に、
「彼女には私から話は通しておく。今の時期はきっと暇だろうから、まあ明日には彼女の家に行って絵を描いてもらえるだろう。家の場所は……後で教えるとするか」
後で。目的の家を訪ねるのは明日だ。妖精は夜里の外へ帰るため、今教えておかなければ間に合わない。
これはつまり、彼女は今晩妖精をこの家に泊めるつもりで居るのだ。寺子屋の戸締りをし始めた慧音を、妖精はぽかんとした顔で眺めていた。
どうやら状況が飲み込めずに居るらしい。それに気づいたのか、彼女は優しく語り掛ける。
「外は危険だからな。また襲われでもしたら困るだろ？　ここは里の中でも安全だ。安心していい」
「は、はい。あの、ありがとうございます」
教室の後片付けを終えると、慧音は妖精の手を引いて自宅へと向かった。私もその後をついてゆく。
妖精を家の中に入れたところで慧音は立ち止まり、一呼吸置いてゆっくりと私の方を向いた。
「……無、お前に頼みがある」
何時になく真剣な面持ちで、声のトーンも低い。名前で呼ばれたのは久しぶりのことだった。
「言わずとも見当はつく。寝ずの番は任せたまえ」
あの妖精を守る。襲撃者が再び彼女を襲う可能性がどれほどのもの

かは分からないが、少しでも可能性があるならばそれに備えるべきである。
「いや、それは私も交代で――」
「任せておくがよい。お主は気を休める必要がある。それに、私として婦女子を危険に晒したくはない」
慧音が全てを言い終えるより先に、私は全てを述べ終える。反論の隙を与えぬよう、やや口早に。
口にした言葉は全て本心である。彼女は既に十分里を守っている。これ以上背負わせるわけにはいかぬ。
彼女はしばし黙っていたが、やがてぽつりと呟いた。
「……すまないな」
「これもヨーギーの務め。気に病むことはない。それに――」
――気配が一つ多い。
それが誰であれ、寺子屋での話はその者に聞かれていると考えたほうがいいだろう。
その者は襲撃者か、あるいは――

目撃者（後書き）

波乱の予感。

月夜の戦い　A（前書き）

いよいよ戦いです。

月夜の戦い　A

里の夜は静かである。そして、暗い。
夕飯を食べ終えると、名も無き妖精と慧音は床に就くための作業を始めた。
私は食器を片し、彼女らに別れを告げて慧音の家を出る。そこは月明かりに照らされた庭――暗闇だった。
本来ならば憩いの場所であるはずだ。寺子屋は、子供達の学び舎であり遊び場である。
しかし、ここは戦場になるはずだ――おそらくは。起こるか起こらないか、確率は常に五分だ。
諸行無常、安定した状態などありえない。木々は枯れ、岩は砕け、人は死ぬ。それが唯一の理。
ヨーガの思想は仏教と通ずるところがある。現に私も今まで諸行無常を信じてきた。悟りのためなら死ぬ気でいた。その意味では、八雲紫が私をここへ連れてきたことは間違いではない。
――だが、今は違う。
ヨーガの力。人間を悟りへと導き、そして解脱へと至らしむる奇跡の力。
この力を、今から私は暴力として利用する。守るためという理由は、禁を破るには必要なものだ。
かつて非暴力を説き、それでいて非服従を貫いた聖者ほど、今の私は強くない。
結跏趺坐に足を組み、宙を漂いながら静かに精神を集中させる。
――居る。それも、近くに。
近づいては来ない。様子を見ているのだろう。どうやら私の風貌は、相手を威嚇するのに長けているようだ。
来ないのならば待ち続けよう。せめて、家の中に居る二人が夢の中へと旅立つまでは。

静寂が音を支配し、月光が空間を支配し始めた頃、その気配はようやく動き出した。

「斯様な時刻、淑女の住まう家に何用だ？」

目の前の人影は、明らかに驚いていた。しかし、ここで引くつもりは無いらしい。

侵入者はその手に何かを構えた。月光を浴びてきらりと輝いたことから、恐らくは金属の何か――短刀だろう。

「返事も無しとは感心せぬ。だが、今すぐ帰れば私はお主に何も言うまい」

人影――男はあたりを一瞥し、低い声色で呟いた。

「……妖精はどこだ」

「今のお主には教えられん。武器を持ち、寝込みを襲わんとするお主には」

男は急に下卑た笑いを浮かべる。何を考えているのか分からないが、恐らく考えたくも無いようなことだろう。

「お前……妖怪だろ？　いいのか？　ここじゃ人間は妖怪を退治するのが決まりなんだろ？」

その話は慧音から聞いたことがあった。もっとも、今の幻想郷ではそれは既に形骸化しているらしい。

平和的決闘（スペルカードルール）の誕生により、妖怪と人は本気で殺しあうことなく争うことができるようになったためだと慧音は言った。

だが、問題はそこではない。私が気になったのは、男の言葉から漂う違和感である。

私の沈黙を勝利と解釈したのか、男はナイフをもてあそびながら続ける。

「聞いたぜ。幻想郷の妖怪は幻想郷の人間を襲えないってな。でも、人間はお前らを退治する。その家に居るのも妖怪だろ？　だったら退治しても罰はあたらねえよなぁ」

――なるほど。

違和感の正体が徐々に輪郭を現し始めた。この男は知らないのだ。スペルカードルールのことを。
それは通常ありえることではない。里のものならば、否幻想郷のものならば誰もが知っているはずだ。
勝ち誇るかのように、男はさらににやついた。静かに、そして尊大な態度で私の元へと近づいてくる。
「ほら、分かったならとっとと退けよ。俺にはてめえを退治してる暇なんかねえんだ。見逃してやるから――」
「愚かな……」
「……んだと？」
私の一言がそれほど気になったのか、男は立ち止まり、ぎらついた目で私を睨みつけてきた。
「まず誤解を一つ解こう。私は人間だ」
「人間だあ？　馬鹿も休み休み……」
呆れたように男は笑う。
もし男が里の人間ならば、私が妖怪ではないことを知らぬはずが無い。
もし男が幻想郷の住人ならば、この地の掟を知らぬはずが無い。
違和感の正体。それは。
「お主は外から来たのであろう。誰に聞いたか知らぬが、ずいぶんと都合の良すぎる解釈だな」
そもそもあのナイフがおかしかったのだ。
スペルカードは相手の命を奪うためのルールではない。なのにこの男は、人の命を奪う道具を携えていた。
「そんなことがお前に関係あるのか？　俺がどこの誰だろうと……」
「妖怪は人間を襲えぬ。だが、外の人間は例外だ。保護の対象外なのだよ」
男の表情が変わった。苦々しく顔をゆがめ、がつがつと地面を何度もつま先で蹴り穿つ。
勘違いか、あるいはそこまで知らされていなかったのか。どちらに

せよ、男の論法は全て崩れ去った。
「人と人が争うのだ。それも外の人間同士が。ならば……そのような手加減など必要なかろう」
結跏趺坐の姿勢を解き、ふわりと大地に足をつける。土がひんやりと心地よい。
「わがヨーガ、お主に破れるとは思わぬが……それでも良いならかかってくるがいい」
「チッ……。クソが……。仕方ねえ、てめーを殺しちまえば何の問題も無くなるか！」
男はナイフを構え、勢い良く接近してきた。

月夜の戦い　A（後書き）

続きます。

月夜の戦い　B（前書き）

一人称視点での戦闘描写は大変です。

月夜の戦い　B

人の身にあっては中々の速度だったが、ヨーギーには到底通じるものではない。
走りざまに切りつけてきた男の一撃を、ふわりと飛んで難なく避ける。重力から解き放たれたかの如く、私の動作は非常に緩やかだ。
空を飛べるというアドバンテージは大きい。そのまま空中を移動して距離を取り、少し離れたところへ着地する。男は一瞬呆気に取られていたが、すぐに持ち直した。
「て、てめえ……本当に人間かよ！？」
「お主らよりは人の心を持ち合わせておるつもりだ」
「舐め腐りやがって……うざってえんだよぉ！！」
ひたすらにナイフを振り回してはくるが、闇雲な攻撃に当たるほど私は愚かではない。
刃の軌道は全く読めないが、所詮は素人の芸当。後ろに下がるだけで容易に避けることが出来る。
「無駄な争いは好まぬのだが……」
「クソッ！　クソ！　ちょこまかとしやがって！！」
ヨーガの修行はいわば自然との調和だ。自然に逆らうことなく、ただ自然の力を身に受ける。
その修行成果を応用すれば、生半可な攻撃から身をかわすことなどわけもない。
だが。
「む？」
不意に衝撃を感じた。背中に何かがぶつかったようだ。
それが庭にあった木の幹であると分かるまでは、若干の時間を要した。
「もう逃げ場はねえぜ……」
後ろに逃げ場は無い。偶然にも私の退路を断ったことが分かった瞬

間、男の顔に希望が宿った。
「覚悟しやがれ！」
男はナイフを両手でしっかと握り、小脇に構えて突進する。標的は無論私だ。
「ヨガー……」
結跏趺坐のまま宙に浮き、精神を集中する。必要なのは力ではなく、心だ。
「死ねええェッ！！」
「転移ッ！」
次に私が見たものは、顔面を木へ打ち据えた男の後姿だった。既に私はそこから存在を移動させている。刃が体を貫く直前のことだったので、男は止まるに止まれずそのままぶつかったのだ。
転移――空間転移とはその名の通り、空間と同化しこれを自在に移動するヨーガの奥義の一つである。浮遊からさらに進んだところに位置し、これを会得するには相応の努力が必要だった。我が師はこれを連続で行うことが出来るが、私はそこまで高みに上り詰めていない。距離的にもそれほど遠くまでは飛べないが、あの攻撃を避けるくらいならば十分だ。
「な、て、てめえぇえ！！　何しやがったあああ！！！？」
「ただ動いただけに過ぎぬ。お主の驕りが跳ね返っただけのことだ」
鼻から血を流した男が涙目で凶器を構える姿は、傍から見れば滑稽な光景だ。しかし、彼の形相はそれが笑い事ではないことを如実にあらわしている。
「もう許さねえ……許さねえぞ！！！」
自棄を起こしたのか、男は立ち上がってナイフを思い切り投げ飛ばしてきた。私の背後には慧音の家がある。避けてしまえば壁に傷がついてしまう。ならば。大きく息を吸う。
「ふあっ！」
吸った息もろとも、口から小さな火の玉を吐き出す。火の玉はそのままっすぐ飛び、男の投げたナイフに激突。ナイフの速度を相殺

し、そこで消滅した。
魔法や幻術の類ではない。食物を体内で燃焼させる炎、己のそれを自在に操ることもまたヨーガの極意である。クンダリニーの制御と関係しているため、これもまたある程度熟練したヨーギーでなければ行えぬ技だ。
「な……」
「これはヨーガの火だ。勝てぬと分かったなら身を引くがよい。お前の刃は私に届かぬ」
自分を奮い立たせるかのように、男は大声で、
「あ、あんなもんが無くたってこっちにゃ拳がある！　こいつでてめーを殴らねーと気が済まねえ！！！」
暴力を使うことなく、可能な限り防戦に回ってきた私だが、ここまでの執念を見せるからにはそれに応えねばヨーギーとして許されないのではないか。そんな考えが浮かんでくる。
ならば早々に退散してもらおう。向かい来る男にそっと手を伸ばす。文字通り、手を伸ばすのだ。
「があっ！？」
伸びた腕が、その先にある拳が、男のみぞおちに突き刺さった。男はその場に倒れ、うめき声を上げる。
「お主の腕も私には届かぬ……。さあ、諦めて降参するがいい」
男がここから逆転することはありえない。私はそう感じながらも、己の油断や慢心を戒める。最後の最後まで何があるか分からぬものだ。男がこの場から去るまで、気を抜くことは許されない。
「おい、さっきから騒がしいけど賊が入ったのか？」
慧音の声だ。想定外のことに驚きながらも、私は声のした方角――寺子屋へと目を向ける。
彼女は寝巻きのまま、無用心にも玄関の戸を開けて外へと様子を見に来てしまったのだ。慧音から十歩のところには男が居る。不味い。
「危ない！　早く家に戻るのだ！！」
「もらったぁあああ！！」

男が喚起の声を上げ、いつの間にか手にしていた何かを慧音目掛けて投げつける。彼女の反応が遅れるであろうと踏んだ私は咄嗟に腕を伸ばし、投擲されたものから彼女を守ろうとした。

「うわっ！？」

「でいッ！」

叩き落す。地に落ちたそれはただの小石だった。当たっていれば傷くらいは出来ていたに違いない。

「す、すまない……」

「ぬ……逃げたか」

男は消えていた。慧音に石を投げたのは、この隙を作るためだったのか。半端者だと思っていたが、中々頭の切れるところもある。知恵のある愚か者。厄介な相手だ。

侵入者を捕らえることは出来なかったが、被害を出すことは阻止できた。目的はあくまで妖精と慧音の護衛である。深追いすることもあるまい。逃げた男は捨て置いておいだろう。

慧音を家に戻し、私は引き続き警戒を続ける。

その晩の出来事はそれだけだった。迷惑な来訪者は以降訪れることなく、やがて里は朝日によって目覚めの時を迎える。

月夜の戦い　B（後書き）

退けました。

屋敷（前書き）

ちょっと調子が悪くて遅れました。ごめんなしい。

屋敷

東の山から太陽が昇る。光は徐々に地平線を満たし、やがて里の外に広がる広大な田畑を鮮やかに照らし出す。
今朝の日差しはいつもより眩しいと感じなかった。いつもは明るくなってから太陽に気づくが、今日に限っては日が昇る前からじっくりとその輝きを観察していたからだろう。
今日も快晴、農家の多い里にとって、晴れという天候の持つ意味は大きい。
朝日と共に里は動き出す。それは川が石を投げ込まれても変わらず流れ続けるように、里の時間も昨晩の一件などお構い無しに流れる。
そして、一日が始まった。

「あ、お、おはようございます……」
名も無き妖精が私に気づいて声をかけてくれた。眠たそうな顔つきを見るに、どうやら彼女は井戸で顔を洗いにきたようだ。寝不足は昨日の騒動のせいだろうか。私は少々罪悪感を覚える。
「あの、昨日はありがとうございました……。私を狙う人を退治してくれて……」
「気にすることは無い。ヨーギーとして当然のことをしたまでだ。……それより、今日は頼んだぞ」
「はい！　頼んで下さい！　僭越ながらこの私、ばっちり犯人の顔を伝えてみせます！」
先ほどまでの寝ぼけ眼はどこへやら、名も無き妖精は背筋をピンと伸ばして元気よく宣言する。背丈は小さいながらも自信に満ち溢れたその姿は、大の大人にも劣らぬ頼もしさである。
彼女が井戸へ行くのを見届けると、続いて玄関からもう一人――慧音が現れた。ふらふらとおぼつかない足取りで、ゆっくり時間をかけて私のそばへと寄ってくる。挨拶の言葉を投げかけると、

「あー……？」
という生気のこもっていない反応が返ってきた。ややもすると、私が何を言ったのか理解できていないどころか、自分が起きていることすら分かってないかもしれない。普段は気丈夫な才女だが、こと朝には弱いのである。

太陽もやや高い位置へと移り、早朝特有の瑞々しい爽やかさからからっとした爽やかさへと空気が変化する。穏やかな陽光が程よく肌を焼き付ける。初夏、あるいはもう夏なのだろうか。
ようやく目を覚ました慧音に見送られ、私と名も無き妖精は一路件の屋敷を目指して里中をぶらついていた。もらった地図は大雑把なものだったが、迷うことなどありえない、万が一道に迷ったら人に聞けば必ず分かると慧音が豪語していたため、それを信じて歩く。浮くのは最近控え気味だ。
「地図ではこの辺だが……」
「どんな家だって言ってました？」
「見れば分かる、とだけしか慧音は言っておらなんだ」
見ても分からない場合はどうなるのか。そんなことを考えようとする間も無く、それどころか辺りを見回す必要も無く、お目当ての家は見つかった。本当に見れば分かる家だったのだ。
「……これか」
「……これですね」
立派な門構え。高く築かれた塀は漆喰で塗り固められており、招かれざる者を阻んでいる。その上からはみ出すようにして見える松の木の枝葉がまるで饅頭のような楕円に切りそろえられていることから、よほど庭にこだわる者か、あるいは庭を整えることの意味を理解している者が住まう屋敷であることが分かる。
大きな門を潜り抜けると、静かな色の和服を着た女性が立っていた。来訪の目的を伝え、そのことは慧音から話がいっていると告げると、こちらへどうぞと彼女は我々を奥へ案内してくれた。

やや緊張しながら屋敷へあがり、案内役の女性に連れられるまま廊下を進む。彼女も緊張しているのだろう、名も無き妖精は先ほどから口を閉ざし、時折不安げに私の顔を覗く。

「こちらで当主がお待ちです」

歩みを止め、案内役の女性は静々とこちらを向きなおして告げる。先導されて我々がやってきたのは、屋敷の最奥に位置する、正面からしか見ていないので推論になるが、恐らく三方を壁に囲まれた部屋だった。ふすまを隔てたその先に、我々が会うべき人は居る。不意に右腕に軽く締め付けられ、私はふと右手に目を落とす。名も無き妖精がその小さな手で私の腕を掴んでいだ。

「失礼する」

これだけの邸宅を里に構える者とは、一体どのような人物なのか。私は意を決し、そっとふすまを開ける。

「お待ちしておりました」

若い声だった。当主というからにはてっきり老齢の男性でも出てくるのかと思っていただけに、目の前の光景は私を驚かせるには十分すぎるものだった。

部屋の真ん中に据えられた文机に向かい、声の主はそこに座していた。年端もいかぬような外見と、それに見合わぬような貫禄を持った少女。当主とは、この少女のことであるらしい。

屋敷（後書き）

念のため。
この妖精はオリジナルです。大妖精ではありません。
念のため。

無意味な依頼（前書き）

何故か少々長くなってしまいました。

無意味な依頼

「そんなに緊張なさらないで下さい。あ、まずは座布団へどうぞ」
開口一番、当主らしき少女は我々に促した。見れば、文机をはさんで当主に向かい合う位置に座布団が二枚敷いてある。座り心地のよさそうな、ふっくらと分厚い座布団だ。来客――私と妖精に備えてのことだろう。
とまれ、話す相手が座っている状況で、こちらは立ちん坊というのも礼儀に欠ける。未だ緊張しっぱなしの妖精を座らせてから、私も腰を下ろす。
「話は慧音さんから聞いています。初めまして、私は稗田阿求。幻想郷縁起の執筆を手がけております」
ぺこりと頭を下げる阿求に続き、我々も自己紹介を行う。
「私は垂石無と申す者。故あって幻想郷へと迷い込んだ、いわゆる外来人だ」
「あの、その、名前も特に無いので、はい」
「前から聞こうと思っていたのだが、お主は名前が無くとも大丈夫なのか？」
そう訊ねると、妖精はぽかんと口を開けて、阿求は興味無さそうに黙っていた。見た感じ、この質問はあまり意味を成さないものだったのかもしれない。何故当人がきょとんとしているのかは気になるが。
「私は妖精なので今までそれほど困ったことはありませんけど？」
「まあ、妖精ですからね。それもそうでしょう」
「いや、お主が良いならそれでいいのだが……」
何故か責められるような口調で逆に聞き返されたため、不本意ではあるがひとまずここは納得した振りをしておく。
「それで、本日私に依頼したいという用件とは？」
私が納得したことでその話はもう終わりになったのだろう。阿求は

話を切り替え、強引に本題へと持っていった。
「幻想郷についての講義ですか？　それならば慧音さんのほうがお詳しいはずですし、ここに来ることも無いような気がしますけど」
「それは間に合っておるのでな。今日はもっと別のことを頼みに来たのだ」
「そうですか……それは残念です」
何故か不服そうにする阿求を励ますように、妖精は急に立ち上がると、拳を握りながら言い放った。
「残念がることもありませんよ！」
「……と言うと？」
「残念、念(おも)いが残るわけです。でもこの依頼は違います。完遂した暁には、きっと思い残すことはないでしょう！」
「それで、一体私は何をすればいいんですか？」
不穏なことを口走る妖精を半眼で睨みつけ、内容をきっぱりと無視して阿求は私に依頼内容を尋ねた。
「先日、かの天狗が襲撃された事件はご存知だろうか」
「ええ。一応当家でも新聞は購読しておりますから。それと関係が？」
軽く頷き、話を続ける。人払いをしてあるのか、部屋の周りに人の気配は無い。
「うむ。そして今度は数日前のことになるが、またも犠牲者が出たのだ」
「犠牲者……ですか？　それは初耳ですね」
興味深そうに、あるいはやや疑わしげに、阿求は相槌を打つ。
「ここな妖精、彼女こそその被害者なのだよ」
「あー……。なるほど、そういうわけですか。分かりました」
眼を閉じ、全て理解したと言わんばかりのしたり顔でうんうんと大きく頭を縦に振る阿求。
しばしの沈黙の後、口を開いて呟いた。
「それで？　私に何を頼もうというのです？」

「……分かってないではないか！」
「分かってますよ。分かってますがそれとこれとは話が別です。分かりますか？」
「何がなにやら分からなくなってきた……」
「でしょう？」
「す、すいません！　私が、私が分からなくしてるんです！」
「ひゃあ！？」
いきなり大声を出され、阿求が悲鳴のような声を上げた。
私は声は上げなかったが、驚きの度合いで言えば彼女とどっこいどっこいだろう。
声の主である妖精は、何故か今度は額を地べたに――畳にこすり付けている。
「私の能力なんです！　その、緊張すると私、『無意味にする程度の能力』が暴走しちゃうんです」
突拍子も無い話だが、この手合いには既に耐性がついている。幻想郷に紛れ込んで早幾日、これくらいのことならば別段面食らうことも無くなった。
「……なるほど」
「だから無意味な会話になってしまったんですね……」
どちらが先にともなく、私と阿求は合点がいったとばかりに手を叩いた。
「はい。ですから会話の内容には構わず、とにかく話を進めちゃって下さい」
「……今の発言、何か構造に大変な欠陥を抱えている気がするのだが」
「それで、私はその犯人を見つける手助けをすればいいのですか？」
彼女は私以上に非常識な事態には慣れているらしい。それもそうか、と思いながら、私もまた彼女に続いて平静を保つ努力をする。
「妖精の証言を元に、犯人の人相を絵にして欲しいのだ」
「ふむふむ」

「……ということを昨日話したところ、昨晩謎の人物に襲撃を受けてな」
「ふむふむ」
「この妖精が見た犯人と、天狗を襲った犯人。これらが同一人物であるとすれば、目撃者を消そうとするのも納得できる」
「なるほど……」
毎度律儀に相槌を入れるものの、何故か上の空な様子の阿求に、若干の不安を覚えながらも説明を続ける。
「昨日私を襲った人間に関して言えば、どうやら外来人のようだったな」
「ふむふむ」
「立ち居振る舞いはそうでもなかったが、幻想郷のルールを履き違えている節があった。おまけに、私を妖怪だと勘違いしておった。里の者ではあるまい」
「ふむふむ」
「……」
さっきから同じような返事を機械的に繰り返され、小さかった不安はここに来て大きな不安へと進化を遂げた。
本当に人の話を聞いているのか、話題を変えて試してみることにする。
「ところで、私の外の世界での知り合いに蝦蟇の油売りが居てな」
「ふむふむ」
「何故かその油でてんぷらを作ろうと目論み、しかもそれを天下の往来でやってのけたせいで二度と戻れない病院へと連れて行かれてしまったのだ」
「関係ない話はやめて下さい」
「聞いているならもうちょっとまともな反応をしたまえ！！」
いかなヨーギーと言えども、怒るときは怒る。私の剣幕に気おされたのか、やや怯んでいる。
「き、聞いてますよ！　無意味になる会話は捨て置けって言ってた

じゃないですか！」

ヨーギーとなって早幾年。病気はおろか腹痛になったこともないこの私だが、その日は実に久々に頭が痛むのを感じていた。

無意味な依頼（後書き）

その上続きます。

犯人像（前書き）

見えてきました。

その後も無意味な会話は続き、結局終わったのは昼過ぎになってからだった。不毛にも、その間我々は『襲撃者』について延々と無駄口を叩く羽目になったのである。もっとも、話が全て終わったわけではなかったが。

時間も時間ということで、続きは昼食の後で再開することを阿求が提案した。彼女はいつの間にか我々の分の昼餉も用意してくれたらしい。

運ばれてきた三つの膳には、来客用にこしらえたものなのか、それともいつもの食事なのかは分からないが、豪勢とまではいかないながらも手の込んだ料理の数々が並んでいた。外の世界で言う、一汁三菜の形式に当たる。

「外から来た方のお口に合えばいいのですが」

「私も生まれは日本でな、源を同じくするこの地の食は実に馴染み深いものだ」

「そうですか。それならばよかったです」

かぼちゃの煮つけ、ふわふわと口当たりの良いしんじょ、さっぱりとした後味の吸い物など、古き良き日本を感じさせる品々に、しばし舌鼓を打つ。

「この漬物美味しい」

既に自分の分を平らげてしまった妖精に、手付かずだった私の漬物の皿を交換してやる。見ているほうが楽しくなるほどの食べっぷりだ。

いつも食べている慧音の手料理とも違う、上品な味付け。どちらの方が旨いかと問われれば、私には答えが出せるとは思えない。

昼食を馳走になり、食後の緑茶などをすすっていると、空になった器の乗った膳を使用人と思しき女性が運んでいった。

ことり、と湯飲み茶碗を置く音と共に、阿求が口を開いた。

「さて、どこまで話は進んだのだったでしょう」
「人相を描くことをお主が了承したところまでだな」
あれほど時間をかけたにも関わらず、決まったのはただのそれだけだった。
「そうでしたね。で、あなたが推測した犯人像をこれから伺おう、と」
「うむ。では始めるが……よろしいかな？」
構いませんよ、と阿求は促した。妖精はお腹が膨れて眠くなったのか、座布団に座ったまま舟をこいでいる。寝ている間ならば能力も暴走しないだろう。これからの話はスムーズに進むはずだ。
「では、これは私の臆説だが……」
昼食の前にも話したとおり、私を昨夜襲った人間は外来人である可能性が高い。人間が妖怪を退治すると言う不文律、それを本気で退治するものと履き違えていた襲撃者。そして、狙われた天狗と妖精。
「恐らく、先の襲撃事件。その犯人も外来人だと思うのだよ。同一の者か、はたまた別の者かは分からぬが……」
「つまり犯人は、胡乱な知識で妖怪を退治しようとしている、外の人間だと？」
肯定し、私は説明を続けた。
「ああ。少なくとも私を襲撃した者に関してはそうだろう。無論この地の理を知らぬ者たちだ、放っておけば里にも被害が及ぶやもしれん」
里の場所は既に知られている。切羽詰った彼らが無関係な人間を襲わないとも限らない。
「妖怪の数を減らされても困りますしね。幻想郷のバランスが崩れてしまいます」
「ともあれ、昨夜の者は里では見かけぬ顔だった。妖精の見た奴の顔と、私の見た顔……できれば早急に照らし合わせ、その後里の皆に手配書を出したい」
「わかりました……。では、まずは無さん、あなたの見た顔をお聞

かせ下さいな」
硯と紙を取り出し、筆を洗い、阿求は絵を描く支度を始めた。妖精は寝ているため、起きている私の方からやっつけようというのだろう。
こうして、無意味な会話を一度も展開することなく、万事順調に事が運んだ。慧音が言うだけあって、阿求の画才は中々のものだった。特徴を良く捉えており、記憶の中の顔を如実に再現している。
私の絵が描きあがる頃には妖精もとうに目を覚ましていたので、間を空けずに彼女の見た顔が絵に仕上がっていった。
二つの絵が完成したのは、実に夕方になってからのことだ。筆を置く阿求の顔には濃い疲労の色が見られる。私は心から彼女に感謝した。
阿求の手元には二枚の絵が並んでいる。向かって左が私の依頼したもの、右が妖精の見た顔である。見比べながら、彼女は私達に確認を取った。
「それで……お二方の見た顔と言うのは絵の通りでよろしいのですね？」
「うむ」
「よろしいです」
私と妖精はほぼ同時に返事をした。肯定を示す声を聞いた途端、阿求の目つきがやや険しくなるのを感じた。
「似てませんね……」
「と言うと？」
「どこからどう見ても別人、ということになります」
つまるところ、犯人は少なくとも二人居る。目撃者を別の側が消しに来たことから、二人は協力関係にあるらしい。少なくとも――ということはつまり、それは下限に過ぎないということだ。
「面倒な……ことになりましたね」
「そのようだ……」
阿求に釣られ、私も深いため息をついた。複数犯。潜伏地不明。行

動範囲不明。分からぬことだらけだが、それでも里を危険から守るためには何らかの手を講じなければならない。
「とりあえず、この事は私の方から里の皆に知らせておきましょう。あなたは慧音さんと協力して、犯人の動きについてもう少し探ってみてください」
「承知した」
「あ、て、手伝います！　私もそれ手伝いますよ！」
右手をピンとまっすぐ天に伸ばし、身を乗り出すようにして名も無き妖精が主張する。――何故か阿求は渋い顔をしていたが。
「それは良い。心強い仲間が増えたものだ」
「では、よろしくお願いします。……私は少々疲れましたので、今日はこれにてお引取り下さい」
二枚も絵を描いたのだから、阿求の言うことも道理である。我々は彼女に改めて礼を言い、屋敷をあとにした。

「……あの妖精は……」
誰も居なくなった和室に、阿求の漏らした呟きがしばし漂い、やがて虚空へと散っていった。

犯人像（後書き）

寝かせました。

帰路（前書き）

ほとんど進んでません。

帰路

「これで一歩前進しましたね」
「そうだな……」
帰り道。夕暮れ時の里は、今日の仕事を終えた人々によって賑わいを見せていた。商店の立ち並ぶ通りは、朝や昼の里からは想像できないほどに混雑している。売り歩く者、呼び込む者、買い求める者。活気に満ち溢れたこの光景は、外の世界のそれと何ら変わらぬものだった。
人ごみにまぎれながら、私と名も無き妖精は居候先である慧音の家を目指して歩く。とはいえ、この混みようである。歩幅は流れにあわせるほか無い。必然的にゆったりと歩くことになるが、それもまたいいだろう。
「私達妖精は」
喧騒の中ではうっかり聞き逃してしまいかねないほどの声量で、名も無き妖精が呟いた。
「あまり人里では歓迎されないんですよね。いたずら好きなのが多くて、里の人に迷惑をかけてばかりなので」
私は黙ったまま、砂のようにこぼれてしまいそうな言葉を聞く。
「でも、里は好きなんです。平和で、楽しそうで」
「それは私にも分かる。……ここにはまだ少ししか居らぬが、争いが少ない。良い所だ」
「だから、私はこの里の力になりたいんです。妖精の力はそんなに強くないけれど、それでも」
終わりになるにつれ、彼女の語勢は強まっていった。本心からの叫び。里に居を構えているわけではないが、彼女もまた里の住人なのだ。私はなだめるように、穏やかな声色で妖精に告げた。
「お主は立派だ。阿求殿に伝えたあの人相、あれはきっと里のための大きな手がかりとなる」

「そうですね……」
会話はそこで途切れた。まだ慧音の家までは距離がある。沈黙も心地よかったが、私は話題を探した。何故か名も無き妖精の姿が儚く見え、取り分け根拠も無いが、彼女がこのまま消えてしまうのではないかという錯覚を覚えたからである。
「今日の夕飯はなんだろうな」
特に何か面白い話も思いつかず、私の口から出たのは他愛も無いこのような世間話だった。
「うーん……なんでしょうね。夏ですし、にんにくとかですかね」
「にんにくは主菜になるのか……？」
「あとはそうですね。えーと、野蒜とか」
「お主の好みは偏っていないか？」
毒にも薬にもならぬような会話を繰り広げていると、何時の間にやら慧音の家の前に到着していた。人と話していると、時間が経つのは早いものだ。
今日は寺子屋で授業のある日だったが、既に寺子屋には人の気配が無い。子供達は各々の家に戻ったのだろう。
「帰ってきました！」
元気よく声を張りながら、名も無き妖精は扉を開けて家の中へ入っていった。その光景を見届けた後、私も玄関へと向かう。私の立っている位置から玄関まではそれほど離れていない。しかし、少し考え事をするには十分な距離だ。
――誰なのか。
阿求の家で推論を話した後、少しでも時間が空けばそのことばかり考えようとしてしまう。即ち、襲撃者達に知識を与えた人物。
ふと、一つの言葉が脳裏をよぎった。里に呼ばれた直後、八雲紫と名乗る大妖怪の言っていた一言。いや、言いかけた一言というべきだろうか。
あの時、彼女は私に何を言おうとしたのだろうか。もしや、彼女が彼奴らに教えたのだろうか。

いや、それはありえない。八雲紫は幻想郷の側の存在だ。その内部を乱すような、誤解を招くような教え方はしないはずである。

――では、一体誰があんなことを？

八雲紫はあの時既にこうなることを知っていて、あえて何も言わず黙っていたのだろうか。外来人が騒動を起こすから、同じく外来人である私に、それを止めろと。

そこまで思考をめぐらせたところで、歩いていた地面の質感に変化を感じた。見れば、前に出した左足が丁度玄関へ踏み込んでいる。土ではなく、石の床。それは思索のタイムリミット、即ち慧音の家の屋敷内へ到達したことを意味していた。

台所からはいいにおいがしていた。夕飯を作っている最中なのだろう。まとまらぬ考えを切り上げながら家に入り、玄関の戸を閉める。里には夜の帳が下りようとしていた。

帰路（後書き）

すっかり居ついてしまってます。

嵐の予感（前書き）

ストーリーを練るのにやや時間がかかってしまいました。

嵐の予感

物事の進展は、いつも唐突である。何気ない日常に、嵐は突然やってくるものだと相場を決めたのは一体誰なのだろうか。
世に存在するルールは、おおよそ二つに分けることが出来る。誰かの決めたルールと、いつの間にか定められていたルール。前者を無力化するのは簡単だ。決めた人間を倒せばいい。厄介なのは後者である。
誰が言ったともなく始まったルールなど、最早どうすることも出来ない。この相場についても同じことが言える。ゆえに、私は何も反論しない。
「それで、なんて書いてあるんだ？」
人相絵を里中にばら撒き、天狗の協力を取り付けて幻想郷中にばら撒こうとしたのが昨日のことだった。そして今、私の手元には出来上がった新聞が広げられている。一面は無論襲撃者に注意と題された、例の件に関する注意喚起の記事だった。
問題はそこではない。新聞を二つ折りにすれば、上半分は襲撃者の記事一色となる。これほどの面積を一つの事件が占めることは、「文々。新聞」でも珍しい。だが、下半分は別の――あるいは襲撃者よりも重大な情報で埋め尽くされている。
「『悪夢再び！　新たな犠牲者は河童』……どうやら我々の知らぬところで、彼奴らは行動を起こしていたようだな」
何時にもまして険しい表情の慧音は、ちゃぶ台の向こうから新聞に目を落としている。私に内容を訊ねたところからして、これは単に落としているだけのようだ。彼女の側から見れば、新聞は文字が逆さになるため、読みにくいのだろう。私が見出しを読み上げると、顎に手を当てながら聞いてきた。
「河童か……襲われた場所はどこだ？」
「霧の湖周辺とある。今も私があそこに居たのなら、危なかったや

もしれんな」
「生死については書いてあるか？　妖怪が死ぬことなどそうあったものじゃないが……」
「いや、そこまでは書かれて――」
「それは当然ですわ」
声が響いた。口調こそ慇懃だが、なにやらどこかが胡散臭い声。かつて聞いたことがある。あれはそう、この里へ来た初日――
「……紫」
「ええ。私ですけれど、どうかしまして？」
やれやれといった風に力なく呟く慧音に対し、紫と呼ばれた女性――八雲紫はうっすらと笑みを浮かべる。
「……たまには玄関から来たらどうだ？」
「あら、それは心外ですわ」
「何がどう心外なのだ？」
別段気になったわけでもないが、成り行き上訊ねないわけにもいくまい。
「神出鬼没、鬼神は化け物。私にぴったりの言葉だとは思いません？」
「……それで、何がどう当然なのかお聞かせ願いたい。紫殿」
どう反応してよいか分からなかったので、私は思い切って本題をぶつけた。前回の印象からして、どうもこの大妖怪は意味の無い会話が好きらしい。名も無き妖精が子供達のところへ遊びに出ているのが悔やまれる。
「妖怪を無視なんて、最近は人間もやるようになったじゃない」
まあいいでしょう、と彼女は続ける。気づけば慧音の姿が無くなって――と、お盆に急須と湯飲み茶碗を乗せて部屋に戻ってきた。
「襲われた河童ですが、残念ながら彼は死んでしまわれました」
「死んだ……？　おい、それは本当だろうな！？」
盆を荒々しく畳の上に置き、狼狽した様子で慧音は紫に聞き返す。妖怪が死んだ。そのことが信じられないといった様子である。

「ええ。勿論ですわ」
「じゃあ何故新聞には書かれていない！？　そんな大事件、ここ最近は聞いたこともないぞ！」
「そうですね……あまりにも大きすぎる事件だから、と言えばいいかしら」
「あまりにも大きすぎる？」
引き寄せた盆から急須と茶碗を取り出し、お茶の準備をしながらだったせいだろう。私は無意識のうちに鸚鵡返しで答えを求めた。
「知ってのとおり、そう簡単には妖怪は死にません。死んでもすぐに生き返る妖精とは違い、そもそも死ぬことが滅多に――本当に滅多にないのです」
私達が頷くのを待ったのか、紫は我々を一瞥し、一呼吸置いて続ける。
「その妖怪が……人間に、それも外来人に殺されたとあれば、事実は私が止めるまでもなく隠蔽されるというものですわ」
「外来人に……？」
「待て、それはもしや――」
言葉は紫の方が先だった。私の推測は遮られ、彼女の口からは正解が飛び出す。
「ええ。お察しの通り、貴方たちの追っている外来人一味の仕業……と見て間違いは無いでしょう」

嵐の予感（後書き）

練り終わったので当分はすらすらいけそうです。

悪魔の取引（前書き）

悪魔は出てきません。

悪魔の取引

事実はいつも突然我々を襲う。それは山の天気よりも読みにくく、降り注ぐ雨よりも避け難い。
八雲紫は我々の沈黙――絶句の意を解したのか、困ったように続けた。口調こそ弱弱しい物だったが、その顔はほくそ笑んでいるようにも見える。
「これはとても厄介なことですわ。幻想郷は広いとは言えませんけど、狭いとも言い切れない。そこから犯人を、それも被害無く捜し出すなんていうのは」
彼女の能力ならば容易く見つけ出せるはずだ。それに処刑も簡単だろう。それでもこのような物言いをするのは、妖怪が殺されているとはいえ、賢者はあくまで傍観を決めるつもりなのだ。
苛立ちを感じているのか、やや不機嫌そうに早口で慧音は訊ねる。
「それで、私達にそれを教えたのは何故なんだ？」
「あら、別にあなたには関係のない話だったのだけど」
「……いいから早く答えろ。私もそう気の長いほうじゃない」
語勢は穏やかだが、声色は酷く低い。
「私が用のあるのは垂石無、あなたよ」
「私に？」
唐突に話を振られ、呆気に取られる。考えても見れば、外来人の話を私にしている時点でなんとなく察せた展開ではあるが。
「犯人達の狙いは分かりませんが、今のところ無差別に襲撃を繰り返している。この里も安全とは言い切れませんわ」
「それはそうだ。里に手を出そうものなら、この私が彼らを許さぬ」
「私も加勢してやろう。里の人間たちには一切手を出させるものか」
「では、よろしくお願いすることにしましょう」
「……何？」
慧音は眉をひそめた。私も声に出さなかったが、おおよそ彼女と同

じ事を考えているに違いない。
「ちょっと待て、それはどういうことだ？　異変なら巫女に頼むのが筋だろう」
「まだこの程度では異変とは呼べませんわ。犯人の目星もついていることですし、博麗の巫女を呼ぶ必要も無いでしょう」
「それはまあ、そうかもしれないが……」
彼女の反論も意に介さず、紫は長広舌を振るう。
「彼らは妖怪を本気で退治してしまっている。しかし、いくらルールに従っていない彼らを倒すためとはいえ、幻想郷の妖怪のうちの誰かがルールを破ることは好ましくありません。たとえ一時的でも、それでは他の妖怪たちにとって不公平と見られかねません」
「……と言うと？」
「私は考えました。外来人の持ち込んだいざこざは、同じ外来人に解決してもらうのが得策だと。そこで、本来ならばルールの外にあるあなたに白羽の矢を立てたのです。私が」
初めからそのつもりだったのだ。私が里に――いや、幻想郷に来た当初から。あの晩言いかけてやめたのは、ただタイミングを見計らっていただけに過ぎない。私に話を確実に飲ませるための。
「どうです？　やっていただけませんか？」
「……やらぬと言えぬのを知っていて、なおこの私にそれを問うか」
「ええ。あなたの口から答えが聞きたいのですわ」
慧音は既に黙っていた。八雲紫の理論は穴だらけだが、だからといって反論できるようなものではない。そのことを分かっているのだろう。彼女の瞳には怒りが宿っている。
「わかった。私に任せたまえ」
大きく息を吸い込み、はっきりと断言する。元より断る道理など無い。私はヨーギーだ。
「これはこれは感謝いたしますわ」
わざとらしい笑みを浮かべ、わざとらしく喜んでみせる紫を見ていると、まるで悪魔と取引してしまったかのような後悔を覚えた。だ

が、これは間違った行動ではない。自分にそう言い聞かせる。
「では、今後について少々話し合いを……あ、私にもお茶をもらえるかしら？」
慧音は露骨に顔をしかめた。

目下の目的

幻想郷の勢力図に関しては、昔慧音から聞いたことがある。
人間の里は言わずもがな、霧の湖にある紅魔館、魔法の森、妖怪の山……等。様々な種族が様々な場所に、付かず離れず暮らしている。
現在のパワーバランスは均衡。だが、この事件がそれにどう響くかは分からない。混乱に乗じて本格的な異変を起こす勢力が出てこないとも限らなかった。その場合は担当者が出てくることになるが、里の勢力に与する者としては、そうなる前に事態を収拾させたい。
「霧の湖だな」
「ああ、私もそれが現状じゃあ一番だと思う」
「では、決まりということで」
私の言葉に続き、各々が自らの意見を述べた。名も無き妖精はまだ戻らない。室内の三人の意見は、おおよそ一致したと言える。
結局のところ、他に選択肢は無かった。手がかりは皆無。ならば、襲撃地点を当たってみるのが一番ではないか。そんな程度の発言が、決定稿となった。
「湖上にある紅魔館ですが、必要ならばそこも調べたほうがいいでしょう。くれぐれも吸血鬼には用心して」
「奴の能力は危険だ。いくらお前が人間離れしているとはいえ、絶対に戦おうなどと考えるなよ」
紫の忠告に続き、慧音も口を開いた。二人の妖怪が危険と言う吸血鬼は、一体どのような人物なのだろうか。
「私は暴力による解決など望んでおらぬ。たとえ出くわしたとしても、挨拶をするだけだ」
「だろうと思ったよ。まあ、念には念をと言うやつだ」
予想通りの返答に、慧音は小さく笑った。
「それから、これは私から無への餞別です」
紫がスキマと呼ぶ空間から取り出したのは、糸で出来た丸い輪だっ

た。やや太めで、同じ太さの麻縄よりも丈夫そうに見える。
「これは……首輪か？」
手渡されたそれを両手で広げながら、彼女に訊ねる。
「ええ。まあ紐なんだけれど、結構丈夫に作ってあります。あなたが襲撃者を倒した際、その首級を吊るすのに便利ですわ」
「私は首狩り族などではない！」
「えー。干し首をぶら下げるというルックスがかもし出す邪悪なオーラが、あなたをさらに人間離れした存在へと導くのに」
「私は人間のままで十分だ！！」
私が怒る様を見て、紫はけらけらと笑っている。その隣で、ため息混じりに慧音が頭を振った。
「……こいつはこういう奴なんだよ。まあ、なんだ。諦めて聞き流すのが利口ってもんだぞ」
「あら、人の話はきちんと聞くのが礼儀というものですわ」
特に気分を害したようでもなく、紫は私をからかったことの延長線上にあるような口ぶりで抗議する。
「ですが、その紐は一応持っておきなさい。何かあった時にはきっと役立つでしょう」
「う、うむ……」
首を干すためだという紐を紐を首にかける。きついでもなく、緩いでもない。まるで首の太さに合わせてあつらえたかのような具合だ。
「さて、私の用件はこれで終わりました。質問が無いようならば帰らせていただきますが」
無言だった。私も慧音も。私達の顔を見回し、頷く。
「……鋸置いていきましょうか？　後でやっぱり首を干したくなったって時に――」
「とっとと帰れ！　お前は最後の最後まで！！」
その日の夕飯は、妙に味付けが塩辛かった。慧音の悪い癖の一つだ。感情的になると冷静に味見が出来なくなるのか、味付けを濃くする

きらいがある。
「うう……しょっぱいです……」
「そ、そうだな。少々失敗してしまった。湯を足そうか？」
塩っ辛い味噌汁をすすりながら呟く名も無き妖精に、慧音は湯の入ったやかんを差し出した。妖精は塩分濃度を調節するため、椀を注ぎ口に近づける。
「いいと言ったら止めるぞ」
「はい……っととと！　いい！　もういいです！！」
意思の疎通に失敗した結果、妖精の椀には必要以上の湯が注がれてしまった。増えすぎた味噌汁は、少しでも動かせば溢れかねないほどの危険な量になっている。
「うう……多すぎです……」
「……すまない」
「うう……しかも今度は味が薄いです……」
ちゃぶ台に椀を置いたまま、顔を近づけて味噌汁をすすった妖精は、力なく嘆息した。

目下の目的（後書き）

日常も前面に出していきたいと思います。

門前の妖精　A（前書き）

初の

門前の妖精　A

湖畔にそびえる館。
やたらと赤の目立つ建物だった。外の世界は西洋の城を思わせるような外観が、この地にあっては違和感を感じる。
外装はところどころ黒ずんでおり、古ぼけたようにも見える。実際かなりの年数を経ているのだろう。だが、逆にそれが見る者へと与える威圧感を増していた。
霧の湖が一日中薄暗いこともあるのだろう。太陽は高くに昇っているが、妙な肌寒さを感じる。静かに、しかし何者をも跳ねつけるように、吸血鬼の住む館は無言の圧力を放っていた。
「ここが紅魔館か……」
危険度は高く、それは周知の事実であるため、この地に暮らす人間ならばまず近づくことは無い。死に急ぐにしても、他にもっといい場所がある。
慧音も、名も無き妖精も、それにあの八雲紫までが口を揃えて危険と言う場所。だが、私はここに入らねばならない。
「悩んでいても始まりはせん……か」
ヨーガの修行の賜物か、動揺や恐怖はとうに忘れた身だ。意を決し、私は館へと進む。

「ちょっと待ったー！！」
――と。館の門に向かって飛ぼうと構えた刹那、背後から聞こえた声に、思わず姿勢を崩しそうになる。
振り返ると、そこには全体的に青っぽい少女が居た。一般に、青とは冷静や内向、平和を意味する色である。
「なんだか知らないけど、あたいを無視するなんて良い度胸じゃないのさ！　そんなの許さないわ！」
だが、その少女は青色の持つ意味よりも、元気印や快活といった印

象が強い。やや上向きに吊り上った眉も、彼女の勝気な性格を象徴しているように見える。
「落ち着きたまえ。何も私はお主を故意に無視したわけではないのだ」
彼女の名はチルノ。非常に好戦的な性格で、己の欲求に素直な氷の妖精だ。幻想郷に来て間もない頃、私は一度彼女に闘いを挑まれたことがあった。その時はなんとか戦わずに済ませたのだが、どうやら今回はそうもいかないようである。
「言い訳なんか聞く耳持たずよ！　とにかくあたいの邪魔をする奴はこうしてやるんだから！」
「ま、待て――」
掌を向けて彼女の行動を制止しつつ、非戦の意思を伝えようとする私の言葉を完全に無視して、氷のおてんば娘は両手を掲げた。そしてそのまま、叩きつけるようにして腕を振り下ろす。標的は目の前の存在――私だ。
「先手必勝！　氷の弾幕は冷たくてヒヤッとして寒い、まさに最強の弾幕ってことを教えてあげる！」
有無を言わさず放たれた弾幕が、私に襲い掛からんとする。私はこの礫を弾幕と認識したが、実際に見たのはこれが初めてなので本物かどうかは分からない。だが、少なくとも避けた方が良さそうなのは確かだった。
「むう！」
彼女の元から弾幕が飛び出すまでの一瞬の隙を使い、私は即座に浮き上がり、彼女の背後へと転移した。目の前の存在が消えたことを驚くかもしれないが、所詮は移動しただけに過ぎぬ。勘のいい者ならばすぐに気づくだろう。稼いだ時間を使って、私は次の手を考えた。
――ここで騒ぎ立てるのは得策ではない。だが、彼女をどうやって止める……？

門前の妖精　A（後書き）

弾幕バトルです。
挑まれただけですが。

門前の妖精　B（前書き）

最近寒くて体調悪いです。

門前の妖精　B

案その一。説得。
「私は敵ではない！　前に一度会ったことがあるだろう！」
何故か首を左右に振っているチルノに、私は呼びかける。
「あたい、あんたみたいなおっかない妖怪なんて知らないよ？」
口調こそ軽いが、瞳は本気である。どうやら本当に覚えていないようだ。こちらに背中を向けたままのチルノに向かって、私はここ最近の口癖を叫んだ。
「私は妖怪ではない！！！」
説得失敗。

案その二。説教。
「そもそも、見知らぬ相手を急に攻撃するのは良くないだろう。いくら先手必勝とはいえ、それは戦いが始まってからの先手を指すわけで……」
「じゃあ聞くけどさ、攻撃する前に攻撃していい？　って聞いたら何て答える？」
私の論に不満があるのか、彼女は強引に割り込んできた。
「それは無論、駄目だと言うに決まっている」
「でしょ？　そしたらあたい、攻撃できなくなっちゃうじゃないのさ」
やはり後ろを向いたまま、こちらには目もくれずに答える。なんとなくこれ以上の話は無意味だと察し、私は次の手段へと移行した。

案その三。話をそらす。
「ところで、お主は私の知っている妖精とは違うな。なんというかその……そう、中々に脅威的だ」
嘘は言っていない。むしろ本心のまま、思うところを告げた。話も

聞かず襲い掛かってくる存在は、何であろうと脅威に違いない。
「な、なにさ！　あたいは確かに強いし、人間達にも恐れられてるけど」
少々得意げに、彼女は両手を腰に当てて軽く仰け反った――胸を張ったのだろう。余裕の表れなのだろうか。先ほどから一貫して、私とは逆の、私の居ない空間を向いたまま。
そういえば――と、私は初めてチルノと顔を合わせた時の事を思い出す。彼女はあの時も、私を倒す気で襲い掛かってきた。外の妖怪である私を倒し、自分が最強であることを証明すると言って。
つまり彼女が好戦的なのは、自分の強さを誇示したいためなのだ。言い包めると言っては聞こえが悪いが、そこを突けばこの戦いを回避することが出来る。
彼女が気を良くしたと見て、私は作戦を変更することにした。この場を切り抜けるため、追い討ちをかける。
「ああ。だから私はお主とは戦いたくないのだ。ここは一つ、私を見逃してはくれまいか？」
「そ、そうね。そこまで言うならあたいも鬼じゃないわ。うんうん。弱い者に慈悲をかけてやるのも強い者の務めだし」
「おお、そうか。それはありがたい」
作戦が功を奏したのか、はたまた彼女の気まぐれかは分からない。だが、どうやら私は彼女と戦わずに済みそうだ。
ほっと胸をなで下ろしていると、今度は彼女の方から話しかけてきた。
「それで、ちょっとあたい聞きたいことがあるんだけど」
何を聞く気かは分からぬが、聞かれたからには答えねばならない。大方、私が紅魔館を目指している理由についてだろう。そう当たりをつけ、彼女に問い返す。
「何だ？　私に分かることならば何でも答えよう」
「あんた、一体今どこに居るの？」
ぽつり、と彼女は虚空に向かったままそう呟いた。

「あれは空間転移だよ」
「くーかんてんい？　なにそれ？」
チルノのあの態度――後ろを向いたまま会話をしていたのは優位の表れでもなんでもなく、ただ私が背後に回ったことに気づいていなかったらしい。私が肩を叩き、ようやく振り向いた彼女の慌てようから察するに、だが。
私は彼女の真正面に座り、正確には宙に浮いているわけだが、何をどうしたのか説明をねだる彼女の質問に答えていた。途中彼女が私を思い出したことでまた戦いを挑まれるも、その頃には彼女の扱いを心得るに至っていたため、未然に防いで事なきを得た。
空間転移、つまりはテレポート。外の世界では一般的な存在だが、どうやらこちらではそうでもないようだ。一般的とはいえ、無論それを実践出来るものなど幾人も居るわけではない。私の知る限りは師と彼の話に出てきた魔人くらいのものだ。
「平たく言えば一瞬にして別の場所へ移動する……瞬間移動のことだな」
簡単に説明してやると、チルノは目を丸くして驚嘆の声を上げた。
「瞬間移動……そんなことが出来るの！？　あ、あたいの次くらいには強いみたいね」
言っていることは強気だが、その言葉尻は弱いものだった。ヨーガとは自己鍛錬のための技、どうやら自信を揺らがせているらしい彼女に、己を磨く一環として勧めるのも悪くないだろう。
「この位、ヨーガを修めれば誰でも可能だ。お主もヨーガを極めてみてはいかがかな？」
「そのよーがってのを覚えると、瞬間移動の他には何が出来るようになるの？」
「そうだな……浮いたり腕を伸ばしたり……」
「浮くのは別に要らないや」
「体内の炎を用いて口から火を吹いたり……」

「そんなんしたらあたい溶けちゃうよ！」
両手を振って抗議された。そういえば彼女は氷の妖精なのだった、と今になって思い出す。
「大丈夫よ！　あたいは今のままでも十分最強だもん！」
「なら無理にとは言わぬが……」
「……い！　おーい！！」
向かって右手、湖の中心のほうから何者かの声が届いた。声は徐々に近づいてくる。チルノにはその声が誰の物なのか分かったのだろう。私とほぼ同時に声のほうを振り向き、声の主の名前を呼んだ。
「あれ？　どうしたのさリグル。そんな大声出して」
声の主はすぐそばに居た。いや、すぐそばまでやってきたと言うべきだろう。リグルと呼ばれた緑髪の少女――同じく緑髪だった幽香とは何か関係があるのだろうか。外見こそ少年と見紛うような格好だったが、声は確かに少女のそれだった。彼女はなにやら慌てた様子で、ぜえぜえと肩で息をしている。およそ全力に近い速度でここまで飛んできたのだろう。
「チルノちゃん！　今日は湖の向こうで遊ぶって話だったでしょ！？　もう皆集まって……って、うわ！　よ、よよ妖怪じゃないか！！」
「落ち着きたまえ。私は妖怪では――」
「あ、危ないよチルノちゃん！　この感じ……きっとこいつは無辜の獣を殺しその血を浴びることで自らの罪が浄化出来ると信じている悪逆の徒に違いないよ！！」
「私はそんな邪悪な存在ではない！！」
本日二度目の叫び。
ヨーガを極めた私にとって、精神の同様は本来あってはならぬことだ。怒りも哀しみも煩悩である。ヨーギーはそれらから解放された存在でなければならない。
幻想郷に来てからというもの、以前よりも感情的になりやすくなった事は自覚している。それを慧音は良いと言うが、あまり納得でき

てはいない。
チルノとリグル、二人の慌てる様を眺めつつ、私は一つため息をついた。
――今日中に紅魔館までたどり着けるだろうか……。

門前の妖精　B（後書き）

妙に長い上終わりませんでした。

紅魔館　A（前書き）

長かった……

紅魔館　A

結論から言って、それは可能だった。
里を出たのが早かったためだろう。まだ太陽は沈んでおらず、それどころか傾いてすらいない。正午に程近い時間であるとはいえ、霧の湖は相変わらず陰鬱な暗さに包まれているが。
その後私が妖怪ではないと理解したリグルは平謝りし、ばつが悪そうにそそくさと退散してしまった。チルノの手を引いて去っていったため、最早この湖上には私しか居ない。視界はそう広くないので、湖上というのは大げさかもしれないが。
静かになってすぐ、目的地――紅魔館の目と鼻の先に居たことを思い出す。仮に、あくまで仮にだが、湖面を歩いたところで数分もかからないだろう。実際は浮遊して進むため、時間はさらに短縮される。
「……行こう」
誰に告げたわけでもない。強いて言うならば、自分に言い聞かせた。
私はひとりごちると、いよいよ紅魔館へと飛び立った。

敷地の内と外を明確に示す手段として、最も普遍的で面倒が無いのは区別することである。例えば稗田邸のように塀で囲っても良いし、柵を立てても良い。垣根も里では一般的だ。目に見える形で区切りを表すことが大事なので、線を引くだけでも効果的だろう。
内と外を分けることは、一種の対外戦争とも言える。自分の領土とそうではない領土を判然たる形で世間に遍く提示し、不可侵領域を取り決め、そこに入ろうとする相手には相応の覚悟を要求する。良く言えば住み分け、悪く言えば外世界の拒絶だ。
紅魔館と霧の湖を隔てているのは、どう好意的に捕らえても後者――それも明白な拒絶だ。囲いと言うにはあまりにも強固すぎるそれは、仮に光を妬む魔女が太陽を拒絶するために築いた砦の防壁だと

仮定すれば、ようやく納得できるほどの敵対的な作りである。そんなくだらない妄想を呼び起こすほどの拒絶が込められていた。
城壁のような堅固さを漂わせている石造りの塀の上には、それを飛び越えようとする者を威嚇するため――あるいは容赦なく排除するためか、槍のような形をした鉄柵が天を突いている。
もっとも、空を飛べる者や、私のように空間転移が可能な者にとっては意味を成さない。飛べない人間はそもそも館に近づかないため、あくまで拒絶を示すためだけの物なのだろう。
塀の一部には切れ目があり、そこには立派な門があった。門の向こうには、紅魔館の正門へと繋がる通路が伸びている。
その隣に、全体的に灰色と紅色を基調とした館にはそぐわぬ色彩――緑色の何かが居た。察するに、門番と考えるのが妥当だろう。
だが、それよりも館の外をぐるりと囲む仕切りの方に先に目がいってしまった。門番の存在に気づいたのは、一通りあたりを眺め回してからのことである。
その間門番が何も言ってこなかった――屋敷を見回す不審者に警告すら発しなかったのは、ひとえに門番が眠っていたためである。
門番の少女は静かに、音も発さずに眠りこけている。遠目には緑一色に見えた門番だが、その髪は燃えるように真っ赤だった。そんな目立つ色に気づかなかったのは、被っている緑の帽子のせいか。
門の番人が仕事を放棄しているのは、好都合とも言える。大きな物音を立てなければ――塀を破壊するなどの強攻策を取らない限り、彼女に気づかれること無く敷地内に潜入することが出来るからだ。
しかし、彼女を無視して突破するのは得策ではない。許可を受けての入場と、許可を受けずしての侵入とは全くの別物だ。ここは悪魔の住む館、無法者は問答無用で殺されてもおかしくないだろう。そもそも黙って人の家に入るのは紳士的ではない。
そうくれば、と私は考えた。選択肢は二つある。無断での突破は論外。門番の彼女が起きるのを待つか、起こすかだ。
待っているほど暇ではない。私は未来を選び取り、門番に声をかけ

た。

紅魔館　A（後書き）

続く。

「起きたまえ」
寝ている彼女に軽く声をかけてみるが、門番の反応は無かった。
一拍ほど間を置いて、今度はもう少しはっきりと話しかけてみる。
「早く目を覚ますのだ。というか門番が寝ているのはおかしいだろう」
声はそれなりに出ていたはずだ。少なくとも、この距離で相手の耳に届いていないわけがないほどに。
しかし、彼女は微動だにしなかった。あまりにも動かないため、やや心配になる。息はしているようなので、死んでいるわけではないはずだが。
「起きるのだ！　聞いておるのか！？　起きたまえ！！！」
「うわあああああ？！　わ、私なら全然大丈夫ですよ！」
耳元でそう叫ばれ、流石にうるさかったのか――門番の彼女は文字通り飛び起きた。顔はこちらを向きながら、その手をなにやら背中に当てている。普段使わないような部位の筋肉まで使ったのか、筋を痛めたのだろう。
「えーと、誰ですか？　あなたは」
「……お主の何が大丈夫なのか気になるところだな」
状況を把握出来ていないのか、彼女は目をぱちくりさせながら引きつったような笑みを浮かべていた。瞳にはありありと困惑の色が浮かんでいる。
「あ、はは……なんというか、こう――大宇宙的な第一級非常事態には失われた楽園で安全宣言を行うほどには？」
「私は垂石無と言う。こんなりをしてはいるが、紛うことなき人間だ」
「あれ？！　聞かれたことに答えたはずなのに無視されてる！」
とはいえ、彼女の答えには特に興味は無かった。夢の世界から抜け

出してすぐの人間の発言など、そもそもが妄言に等しい。それでも彼女に訊ねてみたのは、人となりを推測するためだった――即ち、話の通じる相手かどうか。
「まさかこんな非人道的な仕打ちを受けるなんて……私は何も悪いことなんて……」
「済まぬな。だが、門番が寝ていては館に入れぬだろう。私は急いでいてな」
急にしゃがみこみ、ぶつぶつと呟きながら地面にのの字を書き始めた彼女に陳謝する。どの言葉に反応したのかは分からないが、彼女はしゃがんだままの姿勢でパッと顔を上げた。訝しげにこちらを眺めてくる。
「ええ。まあ……紅魔館の守備を任されているわ。主にあなたみたいな人を排除するのが私の仕事。事と次第によってはね」
値踏みするようにこちらを見ていた目が、挑戦的なそれへと変わった。今までのぽやぽやした人当たりの良い空気とは違い、今の彼女は明らかに仕事の態度である。
世間話をする彼女と、門番として侵入者を退ける彼女。この切り替えについて、公私を混同しないと彼女を評しても良いのだろうか。仕事中に寝ていた事も考慮に入れると、差し引いてプラスマイナスはゼロのような気もするが。
「私はこの屋敷の主人に用がある。通してはもらえぬだろうか？」
「見るからに怪しい奴を館に通すのは門番の仕事じゃないと思わない？」
警戒した様子で、軽く身構えながら彼女は答える。
「その怪しい奴に起こされるまで寝ていた事に関してはどう思う？」
「う……こうなったら、力ずくで追っ払ってやるわ！！　私の弾幕を甘く見ないことね！」
片足立ちになり、両手を開く。右腕をまっすぐに伸ばし、左腕はまげて頭の横に構える。外の世界で言うところの中国拳法――それも八極拳に近い。際立った隙も無く、彼女が結構な使い手であること

が伺えた。
正面から殴り合うならば、ストリートファイトの中に身を置いてきた――置かざるを得なかった師にヨーガを習った者として、私もそれなりに自信はある。防戦を中心に据えて立ち回り、相手の気力を殺いでゆくファイトスタイルは、師の十八番である。無論、私はあまり暴力は好まないので、先の里での戦いのような事態以外でこの力を使うつもりは無かった。
問題はそこではない。この世界で戦いと言えば、スペルカードルールに則った決闘のことを指す。しかし――
「落ち着きたまえ！！　落ち着いて私の話を聞くのだ！！」
「問答――」
直接的な攻撃を繰り出すわけではないのだから、その構えに意味は無い。それでも腕を振り上げ、最初のスペルカードを宣言せんとする彼女の言葉を大声で遮り、なんとか割り込む。
「私はスペルカードを持っておらぬし、弾幕も張れぬ！　お主と同じ土俵に立つことが出来ぬのだ！！」
「無よ……え？」
ピタリ。
彼女の動きが止まる。高く掲げた右手には、スペルカードと思しき紙切れが握られていた。あと少し遅ければ、私は押し寄せる弾幕に流されていたに違いない。
スペルカードルールで戦えない。そんな事態に陥るとは思わなかったのだろう。八極拳の構えを解き、浮かせていた足を地面につけて肩を落とすと、不安げに呟く。
「え、じゃあ私は一体どうすれば……？」
「それは自分で考えたまえ。そもそも私は争うつもりなど毛頭無い上、別に悪さをするつもりも無いのだ。お主の寝ている間に館に侵入しなかったのがその証左だ」
物取りやその類ではなく、あくまで客人として屋敷に入りたいことをアピールする。門番の仕事は侵入者を防ぐことだが、そうでない

者に対してはそれなりの対応をしてくれることを信じて。
「言われてみれば確かに……」
「分かってくれればよいのだ。さあ、私を中に入れてくれたまえ」
「で、でもそれは私の権限だけじゃ……」
頭では納得出来るが、なにやら別の要因がそれを阻んでいる。彼女の歯切れの悪さからは、そんな二律背反への苦悩がありありと伝わってきた。戸惑いを表すかのように、互い違いに組み合わせた指を胸元でもにょもにょと動かしている。
勿論彼女の言うことも分かる。敵意が無いとは言え、招かれていない人間を門番が勝手に客人として扱うことなど出来ないだろう。ただその権限を持つ者に取り次いで欲しかっただけなのだが、どうやら誤解を与えてしまったようだ。
と。
「……一体何をやっているの、美鈴」

紅魔館　B（後書き）

結局戦いませんでした。

紅魔館　C（前書き）

時間かかった上に短くて申し訳ないです。

紅魔館　C

「あ、さ、咲夜さん！」
門の奥、屋敷の敷地内から声が届いた。目を向けると、何時の間にやら困惑したような顔の女性が立っていた。呆れたような声。
途端、頭を抱えて今にも泣き出しそうな表情だった門番――美鈴の顔がパッと明るくなる。彼女にしてみれば、心強い味方の登場なのだろう。現状を打開しようと、身振り手振りを交えながら必死で訴える。
「聞いてくださいよ！　この垂石無って人に館に入れろと頼まれまして……」
「入れてやりなさい」
「ですよね！？　だから駄目だって止めて――え？　咲夜さん今なんて……？」
「入れてやりなさいと言ったの。お嬢様がお会いしたたがってるのよ、彼にね」
「私に？」
急に会話の流れに引きずり込まれ、意表をつかれた私はろくに返答もできなかった。美鈴と同じく、ただ目を丸くして咲夜と呼ばれた女性の次の発言を待つ。
「ええ。なんでも呪われた干し首が……とかなんとかで。詳しい説明はお嬢様がして下さるわ」
干し首と言う単語に違和感を覚えるも、とまれ館に入れてもらえるのを断る理由も無い。ガチャリと金属のぶつかる音が聞こえ、美鈴が門の鍵を開けたのが分かった。
青々とした芝生や花に覆われた庭に通る一本の道。いかにもメイドといった格好の咲夜に先導され、館までの道のりを歩く。
途中、何故か半眼でこちらを見ている彼女の視線をたどると、その先は私の首紐に向かっていた。

「そのための紐を首から下げた男が来る、と聞いてたんだけど……まさか本当に来るとはね」
「私は首から首など下げぬ！」
そういうことまで話がいっていたのか。

館に足を踏み入れての感想は、見かけによらず相当な広さがあることへの驚きだった。精々立派なお屋敷程度にしか取れなかった外見からすれば、違和感を覚えるほどのその空間は破格である。
「ほう……随分と広いものだな」
「狭いと館の主であるお嬢様の名に傷がつくでしょう？」
うんざりしたような口調で咲夜が答える。この世界――妖怪にも世間体は存在するのだろうか。
「いや、そうではなくてだな。見た目よりも広々としていると言う話だ」
廊下の左右にはいくつもの部屋が並んでいる。何人かメイドのような姿をした者とすれ違った事を考えると、使用人だけでも相当数が暮らしているに違いない。
「ああ、それ。私が能力で広くしてるのよ。だから馬鹿なことは考えない方がいいわ。館中私のテリトリーみたいなものだから」
「元より無法を働くつもりは無い」
階段を上り、二階へと進む。メイド達の態度から察するに、どうやらこの咲夜と言う女性は彼女達を束ねる立場にあるらしい。
頑強で重厚な造りの扉の前で咲夜が足を止め、こちらへと向き直る。私も彼女に倣い、扉の前で立ち止まった。
「……ここよ」
咳を一つし、声調を整え、部屋の主への言葉を紡ぐ。
「失礼いたします。垂石無と名乗る人間を連れて参りました」

悪魔との謁見（前書き）

なんかごめんなさい。

悪魔との謁見

例外なく広かった――この館には狭い部屋など存在しないに違いない。館内の空間を造作もなく操ってみせるほどの能力者を従えるのは、紅い悪魔であると言う。

紅魔館の主の部屋。床を覆う絨毯は言うまでもなく緋色、ワインレッドの壁に囲まれたその室内は、天井までも赤で統一されている。部屋の真ん中には椅子だけが一つ据えられており、その場所が日常使われる場所ではないことが伝わってくる。

背もたれが身の丈の倍ほどもあり、肘掛はおろか足にまで装飾の施された大仰な深紅の玉座。そこには一人の少女が座し、我々を待ち構えていた。

「で、この男が？」

値踏みするような目つきで、嘲るように悪魔は呟く。

赤い海の中にあって、一見すると白色のような、ほんのりと薄ら紅い装束に身を包み、その実ところどころに血のような紅を散りばめている。遠目には分かりにくかったが、背中からは黒い羽のような物が生えているらしい。

「はい。お嬢様」

「ふーん……評判通りね」

「評判？」

思わず聞き返すと、館の主は露骨に面倒くさそうに顔をゆがめながら説明してよこした。

「新聞は話半分に読めば良い情報源になるわ。……ところで、ヨーギーとやらはレディに対しても自分から名乗らないのかしら？」

「それは失礼した。私の名は垂石無、幻想郷に来てからは日も浅い若輩者だが、縁あって人間の里は上白沢慧音の家に世話になっている」

名乗り終えると、私は軽く頭を下げた。悪魔は満足げな笑みを浮か

べ、
「これはご丁寧に。私はレミリア。レミリア・スカーレット。そこの十六夜咲夜と館の主で……吸血鬼をやっているわ」
「吸血鬼……」
話には聞いていたが、いざ対面してみると奇妙な感覚に陥る。
それに関する伝承はいくつも存在する。体を霧やコウモリに変化させる、使い魔を使役する、血を吸って下僕を増やす、強大な力を持つ、不死、不老。
一方で、人に招かれなければ家には入れない、流れる水は超えられない、日光に弱い、十字架に弱い、銀に聖水ににんにくに弱い。
人知を超えた強さと、それを補って余りある弱点の多さの調和。吸血鬼とは、まさにそんなガラス細工のような怪物だと言う。
「それで、何が聞きたいのかしら？　知ってる範囲で答えてあげるわ。ここに一人で乗り込む胆力に免じて、ね」
「お嬢様……」
諌めるような口調で咲夜が呟くも、レミリアは彼女を一瞥しただけで気にも留めないようだった。
「大丈夫よ。この男は私たちにとって悪い存在ではない。その首輪とか、中々律儀そうな人間じゃない」
「首輪……これがどうかしたのか？」
何の変哲も無いように見えても、大妖怪のくれた物だ。何か力でもあるのだろうか。
「八雲紫が言ってたのよ。首輪をした妙ちきりんな格好の男が来るだろうから、協力してやってくれってね。でもまさか本当に首輪をぶら下げて来るとは思わなかったわ」
「……そうか」
期待した私が馬鹿だった。念のためとはいえ首輪を着けてきた事が結果として良い方へと転がったのは単純に嬉しい誤算であり、結果として気分はプラスマイナスゼロだが。
「新聞を読んでいるのならば話は早い。妖怪が襲撃された……それ

も立て続けに二件。私はその犯人を追っている。二件とも現場はこの湖、何か目撃情報などありはしないかと思ってな」
「……この紅魔館を疑っているということかしら？　妖怪襲撃の犯人として」
すうっと吸血鬼の目つきが険しくなる。声色も冷たく、先ほどまでが日光の嫌いな吸血鬼だとすれば、今の彼女は人々を蹂躙する吸血鬼の姿だ。そんな印象を受けるほど、鋭い。
ここで答えを誤れば、どうなるか。しかし、ヨーギーは恐れることを良しとしない。
「……その通りだ」
「へえ、認めるの。いい度胸してるじゃない。……無、あなた死が怖くないの？」
「死を恐れていては何も出来なくなる。ヨーギーが恐れるのは死ではない。何も出来ずに死ぬことだ」
しばしの沈黙。私の言葉を吟味しているのか、それとも――
「最初は天狗、次は河童が殺された。私たちに彼らを襲うメリットがあると？」
「それはなんとも言えぬ。お主たちが異変を起こそうとしているにしても、それらはいささか意味の無い所業なのでな」
殺す必要が無い。いや、そもそも相手に怪我を負わせることなど出来ない。スペルカードルールによる戦いは、力によるそれとは全くの別物なのだ。
「そもそも、この地での争いは全てがスペルカードルールに則ってのもの。幻想郷の住人たるお主らがルールを破るとは思えぬのだよ」
軽く頷く。私の弁に筋が通っているかどうか分析しているのだろう。下手な嘘をつけば、恐らく見破られる。
「我々が疑っているのはその点に関してではない。……我々は犯人を捜しているのだ。幻想郷の住民ではなく、外来人の……な」
この情報を出すことについては躊躇いがあった。しかし、カードは切るためにある。切らずに取っておくことは、適切でない場所で切

るよりも無意味だ。一種の賭け――博打だった。
レミリアは黙っている。ピクリともせず、表情も変えずに。永遠のように――あるいは刹那のような沈黙の後に、彼女はようやく声を発する。
「……答えてあげるわ。一連の襲撃事件、紅魔館の者は誰一人関わっていない。これでいいかしら？」
その言葉が正しいかどうかは瑣末な問題にすぎない。嘘ではないだろう。だが、真実でもないことは確信している。
――ここが落としどころか。
外来人を追っているという話に対する返事としては、いささか意味の通らぬものだったが、それはつまりこれ以上の事を話すつもりは無いと言うことだろう。
「十分だ。ありがとう」
多くは無いが収穫はあった。頭を下げて礼を述べ、私は話を打ち切る。レミリアは何も言ってこなかったが、恐らくそれが終了の合図のつもりなのだろう。
悪魔との面会は、互いに得る物を得、出す物を出して決着を迎えた。

悪魔との約束（前書き）

パチュリーは出ません。

悪魔との約束

レミリアと言葉を交わしていたのは、そう長い時間ではなかっただろう。しかし、私は疲れきっていた。常に思考しながらの会話。綱渡り的緊張感は、訓練されたヨーギーの精神すら疲労させるのか。安堵と消耗から、私はため息を一つついた。踵を返し、部屋に入ったときと同じく、咲夜に先導されてレミリアの居る間から出ようとすると、不意に部屋の主に呼び止められる。

「ところで無。あなたこの後時間はあるかしら？」

「あるといえばあるが……何用かな」

レミリアの方へと向き直り、彼女の問いに答える。こちらの疲労などお構い無しと言ったように、彼女はお得意の薄ら笑いを浮かべていた。

「あなた、外の世界の人間なんでしょう？　私の妹にちょっと話を聞かせてあげて欲しいのだけど」

「妹？」

そういえば、と記憶の糸を手繰る。紅魔館の主、レミリア・スカーレット。彼女には妹が居る――それも館に閉じこもりきりの。里で話していた際、慧音はそう言っていた。

確か名を――

「名をフランドールと言うわ。私はフランと、他の皆は妹様なんて呼んでる。まあ、可愛い妹よ」

相槌を打たず、無言で彼女の話を待つ。

間を置いたのはレミリアも同じだった。私が説明を理解したかどうか測っていたのだろう。特に疑問の声を上げなかったので、彼女は話を再開した。

「妹はこの館の一室に閉じこもっている――最近は部屋から出るようになったけれど……姉としては、あいつの無知さが心配なの。無知は美徳でもあり、同時に罪でもある」

「それで、外の世界の知識を？」
ええ、と彼女はすぐに肯定し、疑問を投げてくる。いたずら好きな子供のような表情で、意地の悪い質問を。
「必要無いと思う？　こっちの世界でしか生きることの出来ない私たちにとっては」
「……いや、そうは思わぬ。世に並べて無駄は無し。遍く全ての事象には意味がある。私は師からそう教わり、また自分でもそう考えているよ」
「その模範解答……聖人君子もかくやと言ったところかしらね。今の言葉は承諾と受け取るわ。話を続けても？」
「うむ」
「無があのペテン師からどこまで聞いてるか知らないけど、私たち妖怪は人を食べる。勿論、幻想郷内の人間はご法度。でも、私たちは今もきちんと食事は取ってるわ」
その話は既に聞いたことがあった。慧音と会った日、そして紫と会った日のことだ。こちらに迷い込んだ外の人間は、里にたどり着く前にほぼ例外なく食われる。
それはルールであり、幻想郷の妖怪も人間もそのことを知っている。知らないからこそ、外の人間は食われるのだ。
「外の人間……か」
「あら、知ってるの。紫に連れて来られたんだし、まあ当然かしらね。……それで、どこまで聞いてるの？」
「あやつは外の世界から食べてもいい人間を連れてくる。それを妖怪たちが食す。その程度しか聞いてはおらぬ」
それは妖怪たちへのサービス、あるいは賄賂かもしれない。しかし、紫はそこまで語らなかった。
同じ姿勢で座っているのに疲れたのか、レミリアはもぞもぞと座り方を変える。
「妹は調理された状態でしか人間を知らない。この館には人間なんて滅多に来ない。本泥棒か、巫女か。あるいはここがどこかを知ら

ない外来人か……来るとすればそんなところ。だから、たまには生きてる状態の人間を見せてあげたいの」
「なるほど……事情は理解した。お安い御用だ」
彼女の要望に、二つ返事で応じる。
事前に連絡もせず訪れ、不躾な質問をしたにもかかわらず、彼女は答えてくれた。我々の目的に協力してくれたレミリアに対して、今はいわば貸し一つの状態だ。
借りっぱなしというのは気が引ける。フランドールからも何か話が聞けるかもしれない。私の中にそういう打算があったことは否めないが。
私の返答に愉快そうに目を細め、彼女は咲夜に手で合図する。フランドールの元への案内を命じたのだろううか。指令を受けた咲夜は、私の背後でまだ動かずに立っている。
「決まりね。じゃあ咲夜、後は任せたわ」
「かしこまりました」
「ああ、それと」
踵を返し、部屋を出ようとする私を、再度レミリアは声で制止する。また頼みごとではあるまいな、と私は無言で毒づいた。心配は杞憂に終わる。
「妹の能力を教えておくわ。あいつの能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。扱いにはくれぐれも気をつけなさい」
「そういうことは先に言いたまえ。……いや、むしろ教えてもらえただけでも良かったと考えておこう。感謝する」
何をどう話してやればいいのか。あまりにも危険な存在を相手に、果たして私は生きて里へ戻れるだろうか。
私はうめいた。

地下への階段（前書き）

小悪魔も出ません。

地下への階段

地下室。
その単語の持つ響きは、一般にあまり好ましくない物を連想させる。家を建てる際、大抵は地上に部屋を設ける。何もせずとも自由に使える空間の広がる地上とは違い、地下に部屋を作ろうと思えば、わざわざ穴を掘ってそのための場所を確保しなければならないからだ。手間の問題だけではない。本来ならば存在しない空間に部屋を作ると言うことは、それ相応の理由が求められる。
ワインセラー、貯蔵庫などと言ったやや特殊な収納スペースに使う、あるいは誰にも見せたくない秘密の部屋として用いるなど。もっとも地下室と言うからには、倉庫ではなく居室なのだろう。
フランドールの部屋に向かう間、私はレミリアの言葉を咀嚼する。案内役の咲夜は何も話さないため、他にやることが無かったのだ。
階段は酷く長く感じられた――足取りが重かったわけではない。日当たりが悪く、石造りのため四方上下を灰色に囲まれた下り階段は、歩いているうちに気力が殺がれるような錯覚すら覚える。
恐らくこの空間も咲夜によって拡張されているのだろう。階段など広くしたところで、特に利点も無いようなものだが。
「そうでもありませんよ」
その旨を咲夜に訊ねてみる。と、彼女ははっきりと否定してみせた。私が館の主たるレミリアによって正式に客人として迎えられて以来、彼女の言葉遣いは丁寧なものになっていた。客人に失礼があってはならないとのことだが、変わり身の早さがやや気になる。
「空間は一定に広げなければいけません。少しでも歪みが生じれば、拡張した館全体が歪んでしまう。ですから、まあ、必要悪と言ったところです」
「ううむ……ならば仕方ないな……」
前を行く咲夜の歩みが止まる。何かあったのかと警戒するも、どう

もそういうことではないらしい。
何も言わぬ彼女の立つ位置までたどり着くと、その理由が分かった
――着いたのだ。
「こちらです」
灰色の空気が濃くなったような気がした。地下室と言えばかび臭い物だと想像していたが、不快な匂いは全く無い。
綺麗に揃えられた石材は、階段を造っていたそれと同じはずだ。しかし、目の前の扉を囲む壁からは、妙な清潔感すら感じられる。
「この戸の奥に妹様が居られます。お開けいたしましょうか？
「いや、私が開ける」
腕を伸ばし、咲夜よりも遠い場所からその部屋のドアの取っ手に手をかけた。いざドアを開けようとすると、横から伸びてきた（私のように本当に伸びたわけではない）手によって遮られる。
彼女は私の腕を軽く握ったまま、たしなめるような口調で告げる。
「お待ちください。まずは中の妹様に用件を伝えさせていただきます」
「……それは失礼した」
私の腕から手を放し、咲夜はくるりとドアに向き直ってコンコンとノックした。地下と言うこともあり、小気味良い音が反響する。
「はーい」
ドアの向こうから小さな声が聞こえた。ドアが分厚いのか、それとも中の人物の声が小さいのか。
「お嬢様のご意向で、外の人間を連れてまいりました」
「まだご飯の時間じゃないよ？」
「生きたままの人間です。お部屋にはお入れいたしますが、食べてはいけませんよ」
なにやら物騒な会話が繰り広げられ、やがてかちりと鍵の外れるような音がした。部屋の主が内側から鍵をかけていたのだろう。
「それでは、あとはよろしくお願いします」
「ああ。任せたまえ」

「お嬢様の仰っていた通り、人間にとって妹様は非常に危険です。くれぐれもご注意下さいね」
ドアに手をかける。中に居るのは一体どのような者なのか。声の調子は幼かったが、それだけで断定はできない。
覚悟を決めると言ってはやや語弊があるが、私は意を決し、目の前のドアを開け放った。
妹様――フランドールとの対面だ。

ヨーギーとフランドール　A

ドアを開けると、そこは吸血鬼の部屋だった。階段から続く闇の淵がにわかに赤くなった。
紅魔館の内装から考えると、その部屋は明らかに異質であった。色使いが派手とはいえ、全体的に落ち着いた雰囲気で統一された館とは対照的に、フランドールの部屋は賑やかな印象を受ける。
部屋の中央には、見るものにそう思わせる原因――一人の少女が立っていた。妙な形の羽を生やした、金髪の、姉と同じく白と赤で統一された服を身に纏った少女。
中でも一番目を引くのは、その羽だ。羽と呼べる代物であるかどうかすら怪しいそれは、姉の持つ羽とは全く違い、本来ならば風切羽があるべき位置に、色とりどりの菱形をした何かが数個ぶら下がっている。
彼女が話に聞いたフランドールなのであれば、見る者は姉との血の繋がりを疑うだろう。似ている点といえば緋色の瞳くらいの物だ。
「お主がフランドールか？」
「あなたが人間ね？」
私の問いと彼女の問いはほぼ同時だった。答えるべきか、答えを待つべきかと黙考する間も無く、矢継ぎ早に彼女が告げる。
「あなたは食べても良い人間？」
「……私が人間だとよく一目で分かったな」
こちらに来て以来、初めてのことである。誰も彼もが――こちらに連れてきた紫を除いた誰もが私のことを妖怪だと言ってのけたが、どうやら彼女はそうではないらしい。
「だって、さっき咲夜が言ってたじゃない。人間を連れてきたよって。それならあなたは人間でしょ？」
彼女は見抜いていたわけではいない。咲夜の言葉を聞き、それを信じていたに過ぎなかったのだ。自分の目で見るものよりも、人に聞

いたものを優先する純粋無垢な性格。レミリアが心配なのも頷ける。
「……なるほど。確かに私は人間だが、生憎と食べてはならぬ人間だ」
「食べちゃ駄目なのに、なんで人間がここに来るの？」
「私は垂石無と言う。お主の姉、レミリアに頼まれてな。お主に外の世界の話を聞かせに来たのだよ」
名乗る。
事態が飲み込めていないのだろう。フランドールは目をぱちくりさせ、小首をかしげた。彼女が持つと言う狂気とは程遠い、生まれたての赤子のような愛らしい動作である。
「私にお話を聞かせてくれるの？」
「うむ。そのためにここに呼ばれた――いや、遣わされたのだ」
「そのお話って楽しいの？」
興味を持ったのか、それとも初めから興味など無かったのか。
フランドールの表情は、最初に出会ったときのそれと同じものだった。かすかに瞳に宿る、期待に輝くような光を除いては。
「楽しいかどうかは分からないが、新しいことを知ることは楽しいと思わぬか？」
「それはそうかも」
やけにあっさりと言い放ち、彼女は私に背を向ける。無言のままで部屋の奥へと進む彼女の意図が読めず、ただじっとその姿を眺め続けた。
部屋の最奥、入り口とは対極にある壁の際まで進むと、くるりとこちらを向きなおした。何故か意外そうな顔つきで、私に訊ねる。
「どうしたの？　お話聞かせてくれるんでしょ？」
「う、うむ。そのつもりだが」
本気で分からないといった口調で問われ、私はしどろもどろになりながら答える。皮肉や洒落ではなく、きっと心から疑問に思っているのだろう。
「じゃあ何でお部屋に入らないの？」

フランドールは壁際に、一方の私は先ほどからドアを入ってすぐのところに立っている。いくら事前に咲夜から紹介されたとはいえ、部屋の主の許可なくして入室するのは気が引けた。
「いや、入っても良いと言われてはおらぬからな。ここでこうしているのだが」
「ふーん……人間にしては珍しいね」
いささか奇妙な感想だが、無理も無い。彼女の知る人間とは食糧であり、無言で運ばれてくるだろうそれは、入室の是非など問うたことが無いに違いない。
「それが礼儀と言うものだろう」
彼女の部屋にはおよそ一人分の調度品しか存在しなかった。派手な色でごまかされてはいるが、室内には必要最低限のものしかない。小さな机、ベッド、椅子。それぞれ決まった用途のある物が、閑散と置かれている。無駄な物を置かないのは、あらゆるものを破壊すると言う能力の性質上なのだろうか。
彼女と私の噛み合わない会話はなおも続いた。
「そうなの？　お姉様とか、適当に入って来ちゃうけど」
「彼女はお主の家族だろう。姉は妹を困らせたがるのだよ」
「私はあんまり困らないけど」
「……そうか。それはまあ良いことだな」
フランドールが椅子に座ったので、私は仕方なく宙に腰掛けた――お決まりの結跏趺坐で。
「それで、お外のどんな話を聞かせてくれるの？」
レミリアは外の世界の話を聞かせてやれと私に言った。それはあまりにも漠然としすぎていて、何を話せば良いのか分からない。そんな悩みを知る由も無いフランドールは、私の話が始まるのを今か今かと待ちわびている。人に教えた経験の無い私は、寺子屋で慧音が行っていた授業を見様見真似でどうにか話を開始することにした。

ヨーギーとフランドール　A（後書き）

長くなったので切りました。

ヨーギーとフランドール　B（前書き）

さらに長くなったので斬りました。

ヨーギーとフランドール　B

門前の小僧は自ら経を読んだのか、それとも誰かに読まされたのか。後者であるのならば、私は彼に同情しよう。聞きかじっただけのものを、完璧に読むかもしれぬと期待されたのであれば。

とまれ、フランドールへの綱渡りのような授業は、どうにかこうにか終わりを迎えた。それが成功したか否かは、私の判断するところではない。

幻想郷が隔離された頃から今に至るまでの簡単な外の世界の歴史、ヨーギーとは何か等、お世辞にも実のある話とは言えないような物ばかりだったが、フランドールは不満を漏らさず聞いてくれた。彼女は将来大物になる。

「私の知る限りではこれくらいの物だが……他に何か聞きたいことがあるなら言いたまえ」

「ううん。特に無いよ」

フランドールはふるふると首を振った。彼女の顔にやや疲れの色が見えるのは、気のせいではないだろう。思ったよりも長丁場になってしまったのは、不徳のいたすところである。

スポンジが水を吸うように、彼女はすぐに私の話を吸収してのけた。気が触れていると聞いてはいたが、そうではない。少なくとも私が認識を改めるほどには、彼女は熱心な学徒であった。

「そうか。正直なところ、私もこれ以上教えられる事が無いのだよ」

「うん。私も疲れちゃったから、もうお話はいいよ」

壁にかけられた時計を見やる。まだ里に帰るには早い時間だ。もう少しここで羽を伸ばしていても大丈夫だろう。

堅苦しい話は終わりにして、私は世間話を始める。放課後、友人と益体もない無駄話をするような感覚――何年ぶりだろうか。最新の記憶は、少なくとも日本に居た頃の物だった。あれから幾日が経ったのか。考えるだけ不毛だ。

「しかし……こんなところに閉じこもっていて、お主は満足しているのか？」
聞きたいことは山ほどあったが、最初に選んだのはこの質問だった。外の世界を知らず、人を知らず、彼女はここで何を思うのか。純粋な興味と、薄いガラスの板に触れるような危うい感覚が混在する。
「結構楽しいよ？　お姉様が遊んでくれたら、もっと楽しいんだろうけど」
「やはり、お主はレミリアに遊んでもらいたいのか」
「うん。でも、外は危ないから。あんまり部屋から出たくないの」
それは事実であり、また事実と正逆の嘘だ。
即ち、外がフランドールにとって危ないのではなく、フランドールが外にとって危険なのであり、これはつまり事実となる。
しかし、気の触れた彼女がその驚異的な能力を十分に制御出来ない可能性は、外――幻想郷のルールにおいて憂慮すべき点である。
誰も滅びを望む者など居ない。外が彼女にとって危険であり、彼女が外にとって危険という一種の矛盾。どちらもが相手を恐れているが故の。彼女が満足だと言うのなら、私は何も言うまい。
「でも、たまに館の中は歩くよ。誰かが遊んでくれる時もあるし」
「誰か？」
「うん。お姉様とか、パチュリーとか、小悪魔とか」
お姉様はレミリアだとして、後の二人は聞いたことのない名前だ。
話からするに、紅魔館の住人であることくらいは予想できるが。ここで聞いておくのも悪くないだろう。
「ほう……そやつらとは顔を合わせておらぬな。どういった者たちなのだ？」
人差し指を顎に当てながら、少しばかりうなって考え込むと、彼女は二人の説明を始めた。
「えーとね、パチュリーは魔法使いで、体が弱くて、本ばっかり読んでるの。小悪魔は、えっと、図書館に居ることが多いらしいけどよく分かんない」

頭に浮かんだことをそのまま話しているのだろう。言葉につかえながらの紹介は、必要な情報だけを抜き出したあらすじのようなものだった――端的な表現はかえって有用である。こと他人に何かを説明する際には。

魔法使いと小悪魔。その現実感の無い単語に、私は改めてこの地が異境であることを実感した。

人であるがゆえに、しがらみを断ち切れずにいた私にとって、人ならざる者達はある種の羨望の対象ともなっただろう。ヨーガと出会う前。迷い、悩んでいた頃ならば。

フランドールは小さく身じろぎすると、黙考し言葉を発さぬ私に気を使ってか、ぽつりと呟いた。

「でも、珍しいこともあるのね。生きた人間が、こんなに私のところに来るなんて」

ヨーギーとフランドール　B（後書き）

名前だけ出ました。

ヨーギーとフランドール　C（前書き）

紅魔館編は一応の終わりを迎えます。

ヨーギーとフランドール　C

聞こえてきた声。その内容に、私は驚きのあまり目を見開いた。
この顔が視界に入ったのだろう。フランドールは一度小さく震えると、様子を伺うような目つきで私を見ていた。
「ど、どうしたの？」
「……こんなに？」
「え？」
当の彼女は何の気なしに口にしたに違いない。だが、まさに望んでいた物が――外来人についての情報が手に入るやもしれない。己の中の驚愕と興奮をヨーギーの精神で抑えつけながら、彼女に聞く。
「こんなにとは一体どういうことなのだ？　まさか、私以外にも人間がここに来たと言うのか？」
「あれ？　お姉様から聞いてないの？」
思いがけない点を追求されたことに本当に驚いたのだろう。果たしてフランドールは意外そうな口ぶりで訊ね返してきた。
「あなたが来る四日前くらいだったかな。人間がね、あ、生きてる人間がだけど、私のところに遊びに来たの」
四日前――私と慧音と名も無き妖精が、阿求の協力を得て里に人相絵を配っていた頃だ。
「どうしたのって聞いたら、お姉様に相手をお願いされたんだって。私嬉しくて、ちょっと遊んでもらっちゃった」
「それは一人だけだったか？」
「いや、二人だったよ。ニコニコした人と、つーんとした感じの人」
人相絵を思い出す。が、すぐにそれが無駄だと気づいた――人を襲う際にニコニコする輩など居ないだろう。つーんとした顔ならば可能性もあるが。人相絵を一枚ずつもらっておけばよかった。
「そやつらの名前は？」
「うーん……なんかこう、めんどくさい感じだった。じょうようか

んじじゃ無いような」
フランドールの話は、事態が劇的に進展するような内容では無かった――常用漢字などどこで知ったのかという新たな疑問も出てきたが。
名前も分からず、人相書きと一致するかも分からず。人数ははっきりしているが、そもそも二人というのは我々も掴んでいる情報である。唯一つ、紅魔館が外来人と関わりを持っており、なおかつそれを隠しているという事実を除いて。
予測はあった。レミリアはあの時、河童が死んだと口にした――言い間違いの可能性もあった。上からの圧力で、襲われた河童が死んだことは公表されていない。だが、その発言だけでは疑いは疑いのまま終わっていただろう。
しかし、この事実はそれを否定し、確証ある疑念へと纏め上げる。
「そうか……助かった。フランドールよ、感謝する」
そう言うと、思考から戻ってきた私は深々と頭を下げる。
一方フランドールは、私が何故そのような礼を述べるのかが分からないといった具合にぼんやりとしていた。
「うん？　わかんないけど、良かったならいいや」
こうして、私はフランドールに別れを告げて館の外へと向かった。
彼女との会話は非常に実りのあるものだった。情報を得たことだけでなく、人に何かを説明すると言う行為は自分の知識を再確認する行為でもある。私はまた一つ、ヨーギーとして知恵をつけることが出来たのだ。

帰り際。
空をゆっくりと飛びながら、私は今日一日で得た情報を慧音への報告を前提にまとめなおす。
『紅魔館の者は誰一人関わっていない』
レミリアはこうも言っていた。プライドの高い吸血鬼である彼女は、嘘をつかずに隠し事をするため、このように穴の開いた発言をした

のか。
紅魔館の者はという表現――即ち、それ以外の者が関わっているのを知った上での苦しい言葉遊び。
レミリアたちが外来人を匿っていたのは確実だ。しかし、それを隠す必要はどこにあるというのか。
真実を隠匿した理由。知られてはならぬ理由。それが分かれば、事件はさらに進展を迎えることとなるだろう。
しかし。
――今の私には、それは分からない……。
幻想郷についても深くは知らず、ましてや紅魔館が何を企んでいるかなどは予測もつかない。助力が必要なことは明白だった。
今の私に出来ることとは、無事里までたどり着き、得た物をすべて慧音たちに伝えること。その上で、事件を解決へと導くための糸口を探すこと。
夕暮れも近い幻想郷は、空を茜色に、地を木々の緑と西日の混じった奇妙な絨毯に覆われていた。

漸進と思惑（前書き）

久々に里です。

漸進と思惑

暗闇。
明かりは外からわずかに差し込む月光のみだというのに、その部屋の紅さは厳然とそこにあり続ける。
たとえこの部屋がチェレンコフ光に包まれたとしても、その事実は変わらないことだろう。恐らくは。
窓際にテーブルと椅子を据え、館の主は開け放たれた窓から月明かりに照らされる湖面を眺めていた。
「あの男……咲夜はどう思う？」
趣味か、それとも単に戯れか――内装の紅さとは違い、月夜にあってはただ黒い液体と化す紅茶をすすりながら、吸血鬼は従者に訊ねる。
「非常に厄介な存在かと。このまま放っておけば、いずれお嬢様にすら牙を剥きかねません」
主から一歩下がったところに立つ咲夜は、主の質問に慇懃に答えた。
レミリアは口元を小さく歪めるように笑い、カップで小さく揺れる紅茶をまた一口すする。
「そう……。そうね、手は早めに打っておいたほうが良さそう……」
唐突に、静寂の中でカチャリと小さな音が生まれた。
「静かで……とってもいい月夜ね」
「そうですね、お嬢様」
それが空になったカップとソーサーが触れた音であることを知っているのは、館の中でも二人しか居ない。

果たして、私の報告を受けた慧音は眼前で頭を抱えていた。
「紅魔館か……あそこが絡むと碌なことにならないぞ……。まあ力を持った妖怪ならば誰が関わっても面倒なことになるんだがな」
慧音の屋敷の一室。私にとって既に馴染み深い部屋となった茶の間

で、私と家主、それに名も無き妖精はちゃぶ台を囲んでいた。言うまでも無く、茶請けは紅魔館で見聞きした内容についてである。
「そうですね……」
慧音の呟きに名も無き妖精が賛同する。
力のある妖怪、私はレミリアと紫しか知らないが、確かにいずれも厄介な相手だ。可能ならば、事件に関わって欲しくはないが――
「嘆いたところでどうしようもあるまい。既に関わってしまっているのだ。我々がやるべきことは決まっているし、それは変わらぬ」
私の鼓舞に、慧音は勢いよく顔を上げると、両手でちゃぶ台を叩こうとしたのだろう。手を開いて頭の高さまで振り上げるも一転、脱力してへなへなとちゃぶ台に覆いかぶさるように倒れこんだ。
「もういっそ、異変と同等の騒ぎになるまで待ったほうが早い気がしなくもないが……」
「そんなことありません！　いや、そうかもしれませんけど、そうじゃないです！　まだ大丈夫ですよ！！」
「お前、適当に言ってないか？」
顔の右側をちゃぶ台にぴたりとつけたまま、慧音は半眼で名も無き妖精を見やる。
「……まあいい。こいつの言うとおり、確かに大丈夫だ。まだ、な」
再び頭を上げると、彼女は腕を組んで考え始めた。名も無き妖精は心なしか嬉しそうな目で、うなる慧音を眺めている。
「つまり、だ」
黙考している慧音を緑茶を飲みながらしばしの間待っていると、考えがまとまったのか、彼女は口が開いた。その言葉に反応した私と名も無き妖精の顔を一瞥し、続ける。
「フランドールに人相書きを見せることが出来れば一番良いわけだな」
「しかし、それは出来ぬ相談だ」
「そう。奴らが外来人を匿っていたとすれば、それを暴こうとする私たちを館になど入れないに違いない」

私の相槌に頷き、慧音は忌々しげに言う。
「今回紅魔館にお前が入れたのも、本当に僥倖だったんだ。気まぐれな主の戯れと言ったところだな」
「情報は増えたが……結局は後手後手に回っているというわけか」
「すまないな、折角あんな場所まで行ってもらったのに……」
やや俯いてしゅんとする慧音の姿に、私は罪悪感にも似た痛みを覚える。
「そうしょぼくれるな……明日は少々里の周りを回ってみることにするよ。何か見落としがあるかもしれぬからな」
彼女の失望は、私のことを気遣ってくれている証拠だ。私は世話ばかりかけて何一つ役に立てないで居るというのに。
「あああもう！　これではいかん！　気分転換だ……とりあえず夕飯にしよう！！」
「はい！　夕飯にしましょう！！」
今度こそ両手をちゃぶ台に叩きつけ、慧音は――やや遅れて名も無き妖精が立ち上がる。二人揃って踵を返すと、仲良く台所へ向かった。
――紅魔館……。彼らは一体何を企んでおるのだ……？
夜の帳が里を包む。湯飲みに残った緑茶を口にしながら、私は一人物思いにふけった。

二十七日目　A（前書き）

何か話が進みませんでした。

二十七日目　A

いつもと変わらぬ朝日が昇る。青々とした葉の並ぶ田畑は、日光によって艶やかさを増す。
三人の中で一番目覚めるのが早いのは私だ。太陽が山際から顔をのぞかせる頃には既に起床し、夜が朝になる瞬間を味わいながら一人瞑想にふけっている。
しばらくすると、近隣の住民達が田畑に向かいだす。農業者の朝は早い。最近では、寺子屋の前を通る幾人かと顔見知りになった。
「今日も朝から精が出るな」
「ええ、まあね。これが仕事なもんで」
二、三言葉を交わすと、私は彼に別れを告げて庭にある井戸の前に移動する。
この世界の水道事情がどうなっているのかは分からないが、少なくとも慧音宅の井戸は桶と滑車で汲み上げるような丸井戸ではない。大きなレバーのようなものを地面に向かって押し込むことで水を汲む、外の世界で言うところの手押しポンプ式に近い井戸だが、力が要ることに変わりは無い。
名も無き妖精はこの家で二番目に目覚める存在だ。彼女にとって水を汲み出す作業は骨が折れるだろう。それを見越して私は先に水を汲み、手桶に張っておく。
「あ、おはようございます！」
「うむ、おはよう。朝から元気だな」
名も無き妖精はパタパタと小走りでこちらに向かってくると、ちゃぷちゃぷと音を立てて冷たい水を顔にぶつけた。
慧音が目を覚ますのは里に住む者の平均よりも若干遅い時間である。朝には弱いタイプらしく、寝ぼけ眼をこすりながら気だるそうにして顔を洗いにやってくる。我らの待ちわびる朝食はその後だ。

慧音お手製の朝餉は何時にもまして美味なものだった。食後の緑茶など飲みながら、文々。新聞を読む。外の世界では感じたことの無いような、ゆったりと過ぎ行く朝。
「やはり慧音の作る食事は美味いな」
「最高ですよね！　私もそう思います！」
幻想郷に来てから、ざっと一月が経つ。
毎日三食きちんと食べる生活を続けていると、空腹を忘れる術を会得したことすら忘れてしまいそうになる。粗食小食を心がけてはいるが、心なしか太ったような気がする。
「でも、それは慧音さんの作るご飯が美味しいからってことだし、あんまりやせすぎなのも体に悪いんですよ？」
「しかし……欲を捨て去らねば悟りは得られぬのだが……」
名も無き妖精の言うことはもっともである。しかしそれは一般論だ。ヨーギーに当てはめるのはやや無理があると言いたいところだったが、慧音は名も無き妖精の味方だった。彼女の肩に手を置きながら、慧音はうんうんと頷く。
「いや、こいつの言う通りだ。ただでさえ餓死願望者と思われてこっちに連れてこられたんだからな。悟る前に召されたら目も当てられないぞ」
「それはそうだが……」
慧音は教師だけあって言葉に重みがあるというか、説得力のある話し方をする。見習うべき彼女の長所である。
ヨーギーの中には、我が師のように説法を得意とする者も居る――他者に教えを説くことで悟りへ近づく修行もあるが、私はそれを行ったことが無い。
己を律することも出来ぬ者に、誰かを導くことなど出来ぬ。師が私に遺した言葉だ。
教師として子供達を教え導く慧音を羨ましく思う時もある。そしてその都度私は自身の未熟さを知るのだ。
「……どうした？　何か気がかりな事でもあるのか？」

気がつくと、慧音が心配そうな目線をこちらに投げかけていた。悩んでいるわけではないと答えるが、それでも彼女の気遣わしげな表情は変わらない。
「そうか？　ならいいんだ……。私はそろそろ寺子屋へ行くが、体調が悪いならここで寝ててもいいんだぞ？」
「大丈夫だ。私も外で見回りをしてくるよ」
「じゃあ私は寺子屋に行きます！」
名も無き妖精の発言がよほどお気に召したのだろう。慧音は輝くような笑顔で、名も無き妖精の腕を引いて寺子屋へ向かわんとする。
居ても立っても居られない様子だ。
「おお、お前も勉強したいのか。感心感心。善は急げだ、早速寺子屋で個人授業をしてやろうじゃないか」
「い、いやそっちじゃなくて子供達と……」
名も無き妖精は必死に抵抗していたが、彼女の力では手を振りほどくことが出来ない。名も無き妖精は慧音に引きずられ、強制的に寺子屋へと連れて行かれた。
家主と二人の居候のうち一人を失った慧音の家には、ゆったりと過ぎ行く朝の余韻だけが残る。

二十七日目　A（後書き）

久々に里だったのでつい。

二十七日目　B

里やその周辺をうろつくのも、最早日課となりつつある。見回りとは名ばかりで、ほとんど散歩のようなものだが。
こちらに来たばかりの頃は妖怪だ人外だと私を敬遠していた里の人々とも、いまやすっかり打ち解けた。散歩ついでに何か困ったことがあればそれを助ける。ヨーギーとして、里へ恩を返す日々である。
用水路に流れてくる水の量が昨日に比べて減ったと聞けば、水を引いてくる元の川まで原因を探りに行く。喧嘩があればそれを仲裁し、子供達が暇だといえば遊び相手になる。
雑務と言うには他愛の無い、ちょっとした便利屋のようなものだった。
空間転移やヨーガの火など、あらゆる技術を出し惜しみせずに使う。修練にもなると考えれば、各種雑用は一石二鳥である。
細事はいくつか起こったものの、結局その日は事件に関する有用な情報を得られなかった。日頃の礼にと貰った豆腐を抱えて慧音宅へ戻り、そこで夜を待つ。

夕食も終わり、その片付けも済ませた後の時間。一日中事件のことについて神経を使うのは良くないということで、最近はこの時間に集中して話をすることが多い。
私は何も情報を得られなかったが、どうやら慧音と名も無き妖精は違ったようだ。寺子屋で何かあったのか、と見当をつけながら話に耳を傾ける。
「子供達が言っていたよ……よく遊ぶ妖精が、魔法の森に見慣れぬ小屋が建っているのを見たとな」
「わ、私じゃないですよ！？」
妖精と聞いてふと彼女に視線を向けると、子供達とよく遊ぶ妖精の一人――名も無き妖精は慌てて両手と頭を振った。

「そんなことは知っているから言わなくてもいい」
「は、はい……」
まるで教師が生徒を叱るように――いや、実際に教師が生徒を叱っているのだが、慧音は名も無き妖精を注意する。
「詳しい場所については流石に分からなかった。でも、これはかなり――」
「役立つ情報だな。特に今の我々にしてみれば、喉から手が出るほど欲しかった手がかりだ」
「……こほん。人の話に割って入るのは良くないぞ」
私をたしなめるように小さく咳をつくと、慧音は喉に軽く手で触れながら話を戻した。
「私はまず、本当に小屋があるのかどうかを確かめたいと思う。そこで早速お前に調査に行ってもらいたいんだが……」
「だが？」
歯切れの悪い慧音など珍しい。多少の危険なら、そもそも紅魔館に行く前ですら明朗に語っていた彼女だ。何故急に躊躇ったような顔になるのか、私には理解できなかった。
「危険なのか？　ならばなおさら私が――」
「い、いや！　違う、違うんだ……」
彼女は語尾をにごらせ、思わせぶりな態度で私の質問を否定する。ふうとため息を一つつくと、観念したように口を開いた。
「今の季節、魔法の森はその、あまり立ち寄らない方がいい場所なんだ。花が咲く季節で幽香の奴もうろついてるだろうし、人間を道に迷わす厄介な妖精も活動しているからな」
「道に迷わす妖精……？」
今は夏、鬱蒼と茂る木々のせいで日当たりのあまり良くない森だが、この季節ならば花も咲いているだろう。花好きな風見幽香が、四季折々で花の咲いている場所を巡っていることは聞いたことがある。問題なのは、聞いたことのない妖精についてだった。
「ああ。竹林も人間が迷いやすい場所だが、森の厄介なのはそれが

いたずらとして成り立っている。私達ならスペルカードルールに則ってこってりと絞ってやれるんだが……お前はそうはいかんだろう」
「確かに……」
彼女が私を森へ派遣することを躊躇っていた理由が、ここに来てようやく理解できた。
危険ではない。だが、迷わされては目的地までたどり着けない。それでは調査が出来ず、森へ行ったところで意味が無くなる。
かといって、忙しい身である慧音がその役を担うことは出来ない。
悩みもするというものだ。
「幸いにも、魔法の森には知り合いが居る。腕の立つ魔法使いでな、迷ったり迷わされたりした人間を泊めてやることもある。妖精のいたずらよりも先にあいつに会うことが出来ればいいんだが……」
話によれば、その魔法使いは森で少々変わった一人暮らしをしていると言う。どのような外見の家に住んでいるのか気になったが、慧音は見れば分かるとしか答えなかった。
「飛んで上空から探せば問題なかろう。何、いざとなれば一週間断食でも私は大丈夫だ」
「朝も言っただろう？　ちゃんと飯は食べるんだ」
「……善処しよう」
小さく頭を横に振る慧音に、呆れたようなため息混じりで諭された。
出発は明日だ。

二十七日目　B（後書き）

光の三妖精は森にいる体でお願いします。

魔法の森（前書き）

森は詳しくありません。

魔法の森

魔法の森は、里から十数分ほどの位置にあった。
田園風景を越え、雑草の楽園のような湿地帯をさらに進むと、突如として木々の集団が出現する。見渡す限りとまではいかないが、かなりの広さであることは一目で分かった。
空を飛んできたので、道なりに進めばどれくらいかかったかは分からない。だが、少なくとも湖よりは近い気がする。
私は一通り上空を回遊し、ひとまず森の全景を確かめる。魔法使いの住むという建物――白壁の小洒落た（小粋な、だったかもしれない）洋館ならば、青々とした森にあっては目立つはずだ。
建物を発見し、そのまま向かうことが出来ればよかったのだが、現実はそう甘くない。生い茂った枝葉のせいか、あるいはまた別の理由かは分からない。つまるところ、魔法使いの家は確認できなかった。
これ以上の偵察は無駄だろう。状況からそう判断すると、私は森の入り口――森へ続く道と思しき物がある場所へと降り立った。道はいくつか通じているようだが、私は里に最も近い通りを選ぶ。
――森、か……。
実のところ、森へ入ったことなど人生で数えるほどしか経験が無い。さらに言えば、それらは森ではなく山だった。
現代の世界を生きる者のうち、森を身近に感じるのは何割だろう。欧州には森が今も偏在しているとは聴いたことがある。森のある地に生きる者ならば、そう感じるのもさもありなんと言ったところだ。だが、平地のど真ん中に広がる森などインドで修行をする際に二度入ったことしかない私にとって、目の前に立ちふさがる緑の帳は、いわば異境への扉である。
吸血鬼の館に赴いた時よりもやけに不安になるのは、やはり視覚的な違和感によるものか。

動揺はあってはならない。ヨーギーは常に自制せねばならぬのだが、それは私が未熟と言うことなのだろう。
とにもかくにも、私は深遠なる魔法の森へと足を踏み入れた。

森は意外にも、快く私を受け入れてくれた。少なくとも、そう感じるだけの無害さがそこにはある。
雑多な植物が繁茂している。取り分け茸の類が多いらしく、胞子だけで気分を悪くする者も居るらしいが、幸いなことに私は平気だった。幻覚作用を持つ物も自生しているため、人間はおろか妖怪すらあまり足を運ばぬと言う。
慧音の話どおり、日中でも日当たりは良くなく、陰陰滅滅たる静けさに支配されていた。じめじめと妙に湿度が高く感じられるのは、木々の蒸散が活発なのだろうか。
入ってみればなんとも無い、ただの森だった。油断してかかるのは避けたいところだが、森自体は化け物でも何でも無かったわけである。思っていたよりもすんなりと事が運びそうだ。
念のため、通った道には木炭のかけらを目印として置いておく。里の周りに転がっていた枯れ枝を燃やして作っておいたもので、たとえ道に迷ってもそれを辿れば帰路を見失うことは無い。
いざとなれば飛べばいいのだが、妖精に迷わされた場合のことも想定しておいて損は無い。

特に脅威となるような物とは遭遇せず、森の中を邁進する。
時折蛇やらの小さな生物と出会うくらいで、噂のいたずら妖精はおろか獣の影すら見えない。
数十分も歩いただろうか。手持ちの木炭も三分の一を消費したところで、私はふと違和感を感じた。
「む……」
風になでられた木々がさざめく中、私はピタリと立ち止まる。
気配。敵意でも殺気でもなく、獣でもない。妖怪か人か、あるいは

妖精か。それとも、私の思い過ごしか。
結論を下すにはまだ早い。目指す魔法使いの家は、この先どれほどの距離か分からない。
慧音は目印を教えてくれたが、目印とはそれを用いる者の生活環境によって大きく左右されると言う。砂漠の民は砂丘を、極地に住む者は氷の色で道を見分ける。慧音にとっては道標であるかもしれないが、生憎と私には木々が全て同じに見えた。
思い悩んでいても埒が明かない。この先に目的地があると信じ、私はもう少し歩いてみることにする。

魔法の森（後書き）

ただ夜の森は怖いです。寒いし。

三月精のいたずら　A

さらに数十分後。
ついに私は、先ほどから続く違和感が気のせいではなかったという決定的な確証を得ることとなる。
私は森に入って以来、一度も後戻りをせずひたすら一本道を進んできた。だが、目の前には目印として撒いた木炭が落ちている。
先んじて何者かがばら撒いたとも考えられるが、そんな酔狂な輩は居ないだろう――たとえここが常識の外側に広がる世界だとしてもだ。妖怪炭撒き小僧だの、前歩き歩行妨害魔だの、そんな本当に無意味で奇怪な者達が存在しなければの話だが。
とまれ、木炭が視界に入った時には既に私の思考は一つの結論に達している。
道に迷った。いや、迷わされた。それが私が出した答えである。
いくら森に不慣れで似たような光景が続くとはいえ、自分がこうも極端に方向感覚を失うとは思えない。
木漏れ日の様子から今現在の太陽の位置を大まかに把握し、今自分がどの方角に向かっているのか確かめる。
東側から森へと入り、まっすぐと歩いてきたのだから、概算で今私は西の方角を向いていなければならない。
しかし、違う。照りつける陽光、そしてその影は、私が今まさに東を向いていることを示していた。
突如として私が逆送を開始したとは考えにくい。ならば、どうすればこのような事態が起こるのか。
木炭の様子を観察してみると、答えは存外すぐに明らかとなった。
「円を描かせられたか……」
距離を誤らぬよう、木炭は歩数で五十歩――距離にしておよそ三十五メートルの間隔で均等に配置しておいた。目の前には一つだが、道なりに先を見れば五十歩先に、後ろを見ればまた五十歩先に木炭

が転がっている。私は先刻歩いた道に、丁度横からぶつかったのだ。
極めつけは私の歩いてきた道である。目線だけで背後を振り返って見れば、そこには道などありはしなかった。草を何者かがなぎ倒して分け入ったような、文字通り道なき道――獣道だけが残っているが、恐らくそれは今しがた私自身が作ったものに違いない。
光の三妖精は名の通り光を操ると聞く。光の反射、目の錯覚。そういったものを駆使して私に道を見せ、茂みの中へ誘導したのだろう。そしてぐるりと円を描くよう歩ませ、先刻通った道へと戻してみせた。炭を撒いておかなければ、今頃私は森の外だったに違いない。
まんまと騙されるところだった。己の不注意を呪いつつ、一方で過去の自分の念の入れ具合を褒めてやる。
しかし、これで妖精たちよりも先に魔法使いの家へとたどり着こうという算段は儚くも崩れ去ってしまった。
平穏無事に森を抜けることは出来ず、三妖精の仕組んだいたずらを乗り越える必要が出てきてしまったのである。
――問題はここからだ。
望みを絶たれた私にとって、現状二つ――いや、三つの選択肢が存在する。
一つ、このまま妖精たちを無視して家探しを強行する。
二つ、なんとかして妖精たちのいたずらから逃れる。
そして最後。諦めてとりあえず帰宅する。
三つ目は論外だとして、現実的なのは二つ目の案だろう。一度術中にはまっている以上、もしかすればこのまま永遠に森をさ迷い続けることが無いとは言い切れない。
ここは早々にいたずらを見破り、その上で妖精たちに邪魔をしてはならぬと言い聞かせてから向かった方が良いだろう。妖精もまた森に暮らす者ならば、同じく森に居を構える魔法使いの家の詳しい場所を知っているかもしれぬ。
結論として、二つ目の案は非常に魅力的なものだと言えるだろう。
現状では不可能である点を除けば、まさに文句無しの選択肢だ。

不可能。この選択肢を採るにあたり、最も根本的なこと――妖精のいたずらを暴くことが、今の私には出来ない。
暴くためには、まずどういう仕組みでそのいたずらが成り立っているのかを推測する必要がある。その推測が事実と一致していた時に限り、次の段階――即ち打ち破るための対策へと進むことが出来るのだ。
今はまだ何も思いつかない。だが、ここにずっと立ち止まっているのは避けたい。いたずらに勘付き、対策を練っていることを妖精に気取られてはならない。
私は先ほどと全く変わらぬそぶりで、道に迷ったことをやや困惑しながら再び歩み始める。
歩きながら、ゆっくりと前に進みながら。脳を十二分に回転させ、自分が何故道に迷ったのか、黙考を開始した。

三月精のいたずら　A（後書き）

三月精はまだ出てきませんが。

三月精のいたずら　B（前書き）

ちょっと遅れたので長めです。

三月精のいたずら　B

戦において最も重要なのは、知ることだと言う。
相手を知り、また自らを知ることで、その得手不得手を理解する。
相手の弱点が分かれば、自ずと取るべき戦術も決まる。それに合わせて自分の行動を決めればいい。
――これを言ったのは孫子だったか……。
心中で独りごちながら、定石どおり相手を知るための分析を開始する。相手――ここでは三月精、光の三妖精のことだ。無論のことながら。
妖精。名も無き妖精との生活は、その種族に対する私の知識を拡充させた。妖精はそれほど力を持たず、また頭が切れるわけでもない。有害か無害かの二元論で言えば、無害に入る。
三妖精という呼称は、そのまま人数を示していると取るのが自然だ。三対一という数の問題は、この先私にどう影響するのかわからない。十全の備えで当たるくらいの心構えで行くべきか。
光のと言うからには、能力は全て光に関したものと考えるべきだろう。三人の妖精が、それぞれ個別に光に関係する能力を持ちあわせている。
光を操る、即ち光の反射による錯覚や、あるいは熱光線系の攻撃の類。光の源である太陽と結びついて、熱や影を操る能力という線も否定できない。
光線や熱を操る能力ならば、相手は非常に厄介な存在となる。私が無傷で居る以上相手は明確な敵意を持っていないようだが、やはり若干の用心は必要となるだろう。
――光を操るとすれば、その姿を消すことは容易いはず。
光を捻じ曲げ存在しない道を私に見せたと考えれば、先ほど私が違和感なく道に迷うことが出来た理由もするりと解ける。他の二名の能力は分からないが、少なくとも一人は光の反射に近い能力か。そ

こまで割り出せれば十分と思っておこう。
次は妖精たちをどうおびき出すか、その方法を考えなければならない。
妖精の精神年齢は幼い。ゆえに、彼らの思考回路がいたずら小僧のそれと同じであると仮定し、いたずらをする者の心理から攻めることにする。
小さな子供がいたずらをする時、仕掛けた当人は引っかかる相手をその目で見ようとするものだ。落とし穴を掘ったなら、人が穴に落ちて驚く様を眺めるために近くに潜んで様子を伺う。
これと同じように、妖精たちも私のことをどこかから盗み見ているとすれば。
いたずらの渦中に居る私の姿を、仕掛け人である妖精たちは付かず離れずの距離から覗いているとすれば。
彼らを驚かせる、あるいは彼らの脅威となるような行動をあえて取ってみせることで、妖精たちを目の前に引きずり出せるかもしれない。
やってみる価値はある。

「ねえサニー、大丈夫かなぁ」
金色の髪をくるくると、いわゆる縦ロールにした少女――ルナチャイルドが、隣に居る爛漫たる笑顔の少女に話しかける。後ろ暗そうなその声が震えているのは、怯えのせいか。
「え？　何が？」
サニーと呼ばれた少女――サニーミルクには、隣の少女が何に怯えているのか分からなかった。疑問一色に染まった声で訊聞き返す。
「何がって……あいつおっかない顔してるし、強い妖怪だったらどうするの？」
「大丈夫だって。私たちの能力は今まで破られたことが無いんだから！」
「前に竹林で破られなかったかしら？」

強気で反論すると、三人目の少女が――この中にあって一人だけ黒い髪をした、スターサファイアがにこやかに口を挟んできた。その笑みの意図はなんとなく理解できる。長い付き合いだ。
「ぐ……痛いところをつくわね。でもあれは――」
「あっ！」
話の腰を折られてやや苛立ちを覚えながら、サニーミルクは顔を引きつらせたルナチャイルドに尋ねる。
「何よ。そんな声出して」
「あ、あの人間……居なくなってる！？」
あの人間とは、彼女達のいたずらの標的のことだろう。
「目を放した隙に……でも、それならまだ遠くには行ってないはずよね。スター、気配を探って……って、スター？　聞いてる？」
こうなっては、気配を感知することの出来る能力を持つスターサファイアだけが頼りだ。人間が消えた理由は分からなくとも、場所さえ分かれば何も怖くない。
だが、頼みの綱のスターサファイアの声はか細く、その状況が全く好転しない――あるいは悪化することを匂わせていた。
「姿どころか気配も……消えたんだけど……」
通常、気配が消えるなどと言うことは考えられない。相手が普通の人間ならば、たとえ姿を隠したところで気配は残る。博麗の巫女や、人ならざる強大な妖怪たちならば話も別だが、先ほどまで視界に居たのはただの人間のはずだ。
「ど……どういうこと？」
「ど、どうしよう？」
「と、とにかく確かめなきゃ！」
焦る。
相手はこちらを絶対に見つけることなど出来ない。その自負はあった。だが、スターサファイアの言う竹林の一件がここに来て響いてくる。
「確かめなきゃって……逃げなきゃじゃなくて？！」

ありえない。だが、言い切れない。脳裏を掠める言い知れぬ不安に駆られ、ついにサニーミルクは行動に打って出た。

「サニー！　ちょっとサニー！」

逃げるという安全な選択肢もあることは理解していた。しかし、能力が効かない相手ならばそれは不可能だ。

制止する声を振りきり、彼女は飛び出した――いや、逃げ出した。

三月精のいたずら　C

茂みから飛び出す。息は荒い。それは実感している。
焦っていた。自分でも分かるほどに、焦燥感が心を苛む。動作は機敏だが、一つ一つの動きは乱雑で大振りになってしまう――意図してやっている部分もあるが、それ以上に。
後ろから駆け寄る二人の仲間の気配を感じながら、サニーミルクは周囲を見回す。ここからの行動は全て未来に直結する。気が抜けない。
既に能力は解除してあった。光の屈折を操る能力。姿を消すことも、応用すれば光弾の類を反射することも可能となる。ルナチャイルドの音を消す能力と共に、いたずらには欠かすことの出来ないものだ。通常、いたずらの最中に姿を現すような真似はしない。ばれてしまえばおしまいだ。
妖精は力を持たない。頭もそれほど良くは無い。だが、悪知恵だけは働く。欠点と言えば、それが人間の子供レベルであるところだった。
「サニー！　ちょっと、待ちなさいよ！」
「そうよ！　自分から出て行ったりなんかして……見つかったらどうするの！？」
仲間達が口々に彼女の行動を非難する。無理も無いことだ――サニーミルクは黙ってそれを受け入れた。
いや、受け入れざるを得なかった。反論したところで、彼女達は納得してはくれないだろう。ならば全て聞き入れた上で、とりあえず黙っておくのが良い。
彼女の思惑通り、二人はそれ以上何も言ってこなかった。恐らくサニーの返答を待っているのだろうが、それはそれでいい。
「……静かに。私にいい考えがあるの」
人差し指を唇に当て、声を潜めるよう二人に促す。

「いい？　二人とも。あの人間がどこに消えたのか分からないのは問題じゃないのよ。私たちが犯人だとバレるのが怖いの。分かるわよね？」
「それは……まあ」
「そうね。確かにサニーの言う通りよ」
ルナチャイルドは渋るように、スターサファイアは納得したように。彼女達が頷くのを見てから、サニーミルクは話を続けた。
「ここまで言えば分かるわよね。さ、二人ともまずはあの男を捜すのよ！」
「ちょっと、分かんないよサニー！」
口を尖らせるルナチャイルドの抗弁は捨て置き、サニーミルクは捜索を再開する。
以後何も言わずに黙々と男の姿を探す彼女に続いて作業を渋々ではあるが手伝い始めた二人の姿を横目で見やり、サニーミルクはほくそ笑んだ。

空間転移を終えた私が見たのは、目の前をうろちょろする三人の子供――いや、妖精の姿だった。私を見るなり、彼らの顔に驚きの色がありありと浮かぶ。突如として人間が出現するのを目の当たりにすれば、驚かぬ道理など無いが。
空間転移は、ヨーガの中でも高度な技術である。瞬間的に空間を超越するそれは、理論的には一度別の空間へと移動するものらしい。師が言うには、一時的な解脱のような物だそうだ。
高位のヨーギーは連続での使用を可能とする。また、瞬間的に世界から消失するというその特性は、このように何かから一時的に逃れることにも応用出来る。数分が限度という時間的制約と、転移後の周囲の状況が分からない点を除けば極めて優秀な回避手段となる。
とまれ、視界に三人の妖精が居ることを考えると、私の試みは成功したと言える。
彼女達は草の根を掻き分け、また木々の隙間から様子を伺っている

ようだった。何かを探している、そんな仕草である。
いたずらの標的が消えれば、それを仕掛けていた者の取りそうな行動は二つだ。慌てて標的を探すか、諦めてその場を後にするか。現状からするに、彼らの取った行動は前者らしい。
場を支配する沈黙を破ったのは、白い服の彼女だった――三人全員白の要素を持っているが、その中でも白と赤の装束に身を包んでいる少女である。
「ああ！　良かった、無事だったんですね！」
想定外の一言に、私はしばし呆然としてしまう。主犯が誰なのかは分からないが、この三人はいたずらの犯人であると思っていたところに、気遣うような発言が飛び出してきたわけである。
それは同時に残る二人にとっても同じようで、発言主の後ろで青くなっていた。
短い髪に見えたが、良く見ればそうではない。髪の一部を頭の左右で束ねている――いわゆる二つ結いやツインテールの類であるため、髪を縛るリボンを解けばそれなりの長さになることだろう。
もしかすると、私は彼女らを見誤っていたのかもしれない。彼女らは悪人ではなく、いたずらにあって困っていた私を助けようとしていたのだろうか。先ほど何かを探していた様子だったのも、私を探していたのだとすれば話は合う。
「お主らは……？」
便宜上赤い服の少女は小さな体躯を大きく反らせ、胸を張って答えた。
「私たちは……魔法の森の救助隊、光の三妖精です！！」

三月精のいたずら　C（後書き）

まだ続きますすいません。

三月精のいたずら　D（前書き）

まさかのDです。

三月精のいたずら　D

聞き捨てならない単語が飛び出したことで、私はしばしの間化石してしまう。夏の森の中は草いきれに包まれているが、冷や汗をかくような錯覚すら覚える。

「光の……三妖精……？」

疑わしげに、それでも確認のため小声で復唱すると、赤い服の少女は二度も頷いてみせる。何故か勝ち誇ったようなその顔からは、反論の隙は無いことがうかがい知れた。

どんぴしゃだ――彼女の態度から確信する。目の前の三人こそ、森で人に道を惑わせるいたずら好きな妖精たちなのだ。

彼女達は私がそれに気づいていないと思っているのだろう。だからこそこうやって身分を偽り、私の前に現れた。大方いたずらがばれた際の常套手段と言ったところか。

「ちょ、ちょっと。何よ森の救助隊って……むぐぐ」

赤い服の少女の背後に居た、髪をくるくると巻いて縦にぶら下げた妖精が口を開きかけるも、その隣の黒髪の妖精が手で口を塞いで声を遮る。大方都合の悪いことを口走りかけたのだろう。

「え、ええ。まあそういうわけでして……見たところお困りのようですが、もしや道に迷っておいでですかい？」

何故か揉み手などしながら、いやに腰の低い口調で彼女が訊ねてくる。嘘をつくのは好きではない――よって、事実を答える。

「そうなるな。まあ……このあたりではいたずら好きな妖精が度々こうして人を迷わせて遊ぶと聞いていたが、まさかこうもあっさりひっかかってしまうとは」

「なるほどなるほど。するってぇとあなたは森を抜けて何処かへ？」

「うむ。いや、目的地はこの森の中にあると言う話だった。抜けたいわけではないな」

「なるほどなるほど。いやーそいつは丁度良かった。うん、まさに

絶好のタイミングって所ですねぇ」
腕を組みながら片手を顎に当てて目を瞑り、得心が行ったとばかりに仰々しく頷いたと思えば、彼女は急に沈黙した。
言葉の続きを待ってみるも、口を開く気配が無い。時折ちらちらと半眼を開けて流し目でこちらを見てくるのは、私に何かを求めているのだろうか。
しばしの気まずい空白。彼女の視線が発言を促すものだとようやく理解した私は、おもむろに彼女の要望に応えてみることにした。
「それで……何が好都合なのだ？」
言い終えるよりも早く――むしろ私が口を開くと同時に、彼女はくるりと私へ向き直る。その顔はきらきらと輝いていた。言うなれば、してやったりと言わんばかりに。
「良くぞ聞いてくれました。いやね、私ら森の捜索隊――」
「救助隊ではないのか？」
「そう救助隊。まあ救援隊でも遭難者発見隊でも何でもいいんですがね、私らは森で迷った人を目的地まで送り届けるのを生業としてるんですよ」
「それはまた感心なことだな」
彼女の後ろに立つ二人が、正確にはそのうち縦ロールの少女が胡乱な顔をして目を泳がせているのは気になったが、そんなことはお構い無しに目の前の少女はまくし立てる。
言ってやりたいことはあれど、のべつ幕なしに続く演説には割り込む隙が無かった。諦めて適当に相槌を打ってやるが、それがさらに彼女をヒートアップさせてしまうこととなる。何時の間にやら話は変わり、今は森で見つかる茸についてなど話していた。
聞いても無意味だろう。そう思って適当に聞き流していると、不意に後ろの二人のうち黒髪の少女と目が合った。彼女はそのまま目線を反らすと、何故か楽しそうな顔つきで話に聞き入っている。
「……それでですね、まあここの妖精には皆ほとほと困っているわけです。でもご安心下さい！　私らに任せていただければ、どんな

所であろうと妖精のいたずらにあわずにたどり着けますよ！」
「ほう……。ところで一つ質問があるのだが」
やっとのことで話が終わる。すかさず私はその隙に言葉を差し込んだ。
「はい？」
「お主たちは光の三妖精なのだろう？」
「ええ、まあ」
先ほど言ったことを何故改めて確認するのか分からないといった表情で、彼女は愛想笑いを浮かべて気の無い返事をする。
「……では、何故嘘をつくのだ？」
沈黙。
生ぬるい風が我々の間を吹き抜ける。
先ほどと変わらぬ笑みを顔に貼り付けたまま、しかし頬の辺りを引きつらせながら、聞き返してくる。
「え？　な、なにを……」
「お主達が光の三妖精なのだろう？　光の三妖精こそがこの手のいたずらの主犯と聞いたのだが……」
さらに長い沈黙。
彼女達はだらだらと汗を流しているが、それは夏のせいだけではないはずだ。
目論見が崩れた、下手を打った、大ポカをやらかした。選択と行動を誤った後悔を反芻している――そんな顔つきで、三人のいたずら妖精は長らくその場に硬直していた。

魔法使いの館へ

思っていたよりも長く、彼女達は冷や汗をかきながら黙りこくっていた。
覚悟を決めたのか、それともまだ覚悟を決められずに居るのか。少なくとも縦ロールの少女はかわいそうなほどにガタガタと震えていた。それでも、ようやく代表格らしい赤めの少女が声を発する。
「ど……」
「ど？」
特に意味は無いのだが、何とはなしに復唱する。
「どこでそれを……？」
先ほどまでの威勢はどこへやら、うめくようにか細い声を搾り出す。
その笑みは既に諦観へと変わっていた。
それは目の前の少女だけではなく、後ろの二名も同様である。いたずらがばれればどうなるのか、一番良く知っているのは彼女達に他ならない。
ある本には鬱憤を晴らせと書いてあった。流石にそこまでやる気は無いのだが、以前そのような目にあったことがあるとすればこの反応も然りといったところか。
「里で聞いたのだよ。お主たちは私のことを、ここらでは見かけぬ風貌だから里の民ではないだろうと踏んだのだろうが。ところで、今私は里に厄介になっている」
「あ、あはは……そ、そうでしたか……」
心なしか彼女の顔を流れる汗の量がさらに増えたようだ。乾いた笑い声と、相変わらず頬を引きつらせてた顔。表情も変わらなければ、顔色も変わらない――怯えがそれを阻んでいるのだろう。
「そ、それで……」
「む？」
声を上げたのは後ろの縦ロールの少女だった。祈るように両手を胸

に当て、顔色を伺うような目線を私に飛ばしてくる。私が心持ち表情を緩めると、彼女はその小さな栗のような口を開いた。
「その、あなたは……一体何者なんですか？」
「そ、そう！　それね！　消えたり出てきたり、それに私たちのいたずらを見破るなんて、さぞ強力な力を持つ妖怪かとお見受けしますが……」
赤い服の少女が便乗して私を持ち上げてくる。機嫌を取ろうとしているのは目に見えて分かった。この状況ならば逃げる以外の選択肢としては最高の物だろう――私が人間であるという点を除けば。
「私は……人間だ……」
「……え？」
嘆息する。会話は再びそこで途切れた。
先ほどよりも長いそれは、三妖精が身を寄せ合って震え上がる音すら聞こえてきそうなほどの静寂。
三人の妖精たちがついに私に許しを請い始めたところで、私はようやく彼女らの名前を知ることとなる。

「うう……久しぶりに森に来てみればなんでまたこんな……」
「あら、良かったじゃない。案外良い人そうよ？」
「そりゃそうだけど……でもまさかあんな人間なんて規格外よ……」
「二人ともちょっと静かにしてよ！」
ぶつぶつと怨嗟にも似た愚痴が後ろから聞こえてくる。赤い服の少女――サニーミルクは振り返って一喝し、彼女らの会話を途切れさせた。
サニーミルクはこちらに向き直り、闊達で奔放な笑みを浮かべる。妖精とは本当に良く表情を変えるものだ。名も無き妖精の時も思ったが、彼女達の変化速度には目を見張るものがある。
「それで、あなたはその魔女の家ってのを探してるのよね？」
先刻までのあの怯えようはどこへやら、サニーミルクはまるで旧知の友人と話すかのような態度で私に訊ねる。既に言葉から敬語は消

え去っていた。
「うむ。出来ればなるべく早く着きたかったのだが……」
「そそ、それはもう謝ったじゃない……。こうしてお詫びに案内してるんだから、言いっこなしよ」
そうよそうよ、と外野が騒ぎ立てる。別に当てこすりを言うつもりは無かったのだが、どうにも舌禍は己の意思では止められないらしい。彼女達も本気ではなかったようで、それはすぐに収まったが。
「ところで、その魔法使いとお主たちはどういった関係なのだ？」
サニーミルクの話しぶりから察するに、どうやら面識が無いわけではないらしい。が、それほど踏み入った関係でも無さそうだ。
人を迷わせる妖怪と、迷った人間を泊めてやる魔法使い。どう考えても友好的な関係になれるとは思えなかった。
「前にちょっと色々あって、まあそこから仲良くしてるのよ」
「あの時も怖かったわね。力の強い魔法使い相手じゃ、妖精は太刀打ちなんか出来ないし……」
やや後ろを歩いていた栗のような口の少女――ルナチャイルドが続いた。両腕を抱えているのは、その恐怖を思い出したせいか。
「確かあの時もサニーがしくじったのよね。光の三妖怪の四人目とか言い出して」
「そ、そうだっけ？　はは、覚えてないわねぇ……」
さらに黒髪のスターサファイアが続く。視線を道端にそらしながら、ばつが悪そうにサニーミルクは頭を掻いていた。
とまれ、そこからの旅路は順調だった。特に困難にぶつかることも無く、特にいたずらをされることも無かった――当然だが――。
三妖精の助力を得た私は、夕暮れよりも大分前に、しかし予定していた時刻よりはやや遅れて、目的地である魔法使いの白い屋敷の前までやってくることが出来たのである。

魔法使いの館へ（後書き）

着きました。

「じゃ、私たちはこれで」
「む？　お主達、もう帰るのか？」
「目的地に着いたんだし、私たちにはもう目的が無いもの」
魔法使いの家が見えるなり、三妖精はそろってくるりと踵を返した。
適当に別れを告げてそそくさとその場を去ろうとするところを、伸ばした腕で肩を掴み引き止める――とりあえず、一番近くに居たルナチャイルドを。
「何もそう急ぐことも無かろう。知人なのならば挨拶くらいしたらどうだ」
彼女達の行動を訝りながら、近くに来たのだから顔くらい見せるべきだと諭す。だが、彼女達は頑なにそれを拒んだ。
「い、いや……私たちはその、ちょっと、忙しくて……」
答えてきたのはサニーミルクだった。何故か目が泳いでいる。
「ふむ……」
明らかに嘘をついている。それは一目で分かった。違和感を感じた時点で既にそうだったのかもしれない。
しかし、何故こうまで顔を合わせたくないのだろうか。顔見知りでありながら面会を拒む理由。
あるいは――と私は考えをめぐらせる。あるいは、すぐに帰ることのほうが重要だとも考えられる。
「こうしていると何か都合の悪いことでもあるのか？」
「い、いや……そうじゃ……」
「……会いたくないのであればそれはそれで仕方が無い。帰りたいのであってもだ。だが、嘘はいかんな」
「……いいわサニー。話したほうが早く済みそうよ」
「そうね。私もそう思う」
いつの間にかサニーミルクの後ろに陣取っているスターサファイア

とルナチャイルドが、観念したように呟いた。
「やはり何か理由があるというのか」
「うん……まあ、話せば長く――もないんだけど」
咳払いを一つし、サニーミルクが説明を開始する。
「騙したお詫びにここまでは案内したけど、あんまり森には居たくないのよ」
「ここに来た目的だって、本当はちょっと偵察して帰ろうって話だったしね」
と、これはスターサファイア。割って入られたのが気に入らなかったのか、少々むっとした様子でサニーミルクは声をやや大きくした。
「そうなのよ。でも……」
声のトーンが暗くなる。渋っているような、迷うような仕草。彼女が説明を躊躇う理由を知っているのか、残る二人は何も喋らなかった。ただ黙り、サニーミルクが口を開くのを待っている。
「でも？」
「この前会った時、アリスさんが私たちに言ったのよ。森へは当分近寄るな、近寄ると痛い目にあう……って。だからアリスさんと会っちゃうと、その……」
「警告に従わなかったことがばれちゃうのよ。アリスさんは普段は優しいけど、一度凄く怖い目にあわされてるから……」
サニーミルクと肩を寄せ合うようにしていたルナチャイルドが後を続けた。彼女達の態度から察するに、よほどアリスとやらを恐れているようだ。
アリスさんと言うのが恐らくこの家に住む魔法使いの名なのだろう――考えてみれば、私は訪ねる相手の名前すら知らなかったのか。なんとも間の抜けた話に、表には出さず苦笑する。
力のある魔法使い。こちらに来て一月が経つが、未だお目にかかったことは無い。強大な妖怪ならば何度か会ったことはあるが、一体どこが違うのだろうか。取り留めの無いことを考えていると、私が何も喋らないことを納得と取ったのか、その場から逃げるような姿

勢を取りつつ聞いてくる。質問者はサニーミルクだ。
「それで、私たちはそろそろ帰りたいんだけど……」
「ああ――」
「ちょっとあんた達！！　この森には近づくなって言ったでしょ！？」
高い声。
慧音の説教にも似た、金切り声が響き渡る。あまりの声の大きさに、その直前に聞こえてきた何かが堅い物に思い切りぶつかるような音は既に記憶の外にある。
聞こえてきたのは背後からだった。振り返るよりも前に、三人の妖精は目の前から忽然と姿を消している。音に驚いたわけではなく、単に私よりも先に音の――声の主を見たのだろう。
首をひねり、背後を見やる。
彼女達の行動から、その予想はついていた。無数の何か小さな物に囲まれながら、仁王立ちでこちらを見据える姿。
この白い家の主、強力な魔法使い。彼女こそ、話に出ていたアリスに違いない。

魔法使いの問答（前書き）

いいサブタイが浮かびませんでした。

魔法使いの問答

否定することも無いだろう。その予想が外れていることなど、最早考えられないことである。
外見は慧音の言っていた――何故彼女は名前だけは教えてくれなかったのだろう――とおりだった。青いワンピースのような物。白いシャツのような物。ところどころに赤いリボンのような物があり、黄金色の髪には赤いカチューシャのような物が乗っている。
のような物と曖昧な表現なのは、彼女の姿をしっかりと見たわけではないからだ――まだ振り返ってはいない。横目で認識出来たのは、精々がその程度だった。それでも、彼女の身なりを理解するには十分だろう。
「まったく……あの三人は人の話を何だと思ってるのかしら……」
ぶつくさと愚痴りながら、魔女は渋い顔のまま頭を掻いていた。ため息混じりのその声からは、苛立ちが良く伝わってくる――怒りと言うよりは不安そうな語調ではあったが。
何にせよ、彼女は一目で分かるほどに不機嫌だった。
小言を漏らしている彼女をよそに、私はひとまず魔女に向かってきちんと向き直る――
「……あら？」
目が合った。私が居たことに――三妖精以外の者がその場に居ることに気づいていなかったようで、彼女はぽかんと口を開けたまま目を丸くしている。
私の存在に驚いたのか、外見に驚いたのかは分からないが。
「む、むう」
不測の事態に面食らったのは、何も彼女だけではない。急に背後から声が聞こえてくれば、驚かぬ者など居ないだろう。感情は制御せねばならないヨーギーとしては失格だが。
突然の出来事に出くわした者にありがちな、感情を含まない純粋な

驚き。硬直する彼女に釣られて、何故か私も振り返りかけの姿勢で固まってしまう。
「えーと……誰？」
私の姿をはっきりと認識したのだろう。片方の眉を吊り上げ、顔をしかめて訝しげに訊ねる。
「うむ。私は怪しいものではない――」
「あなた、鏡で自分の姿見てから言った方が良いわよ。それ」
「いや、それはだな――」
「大体、何で半裸なのよ。いくら夏だからってあんまり脱ぎすぎると他の人に迷惑がかかるじゃない」
「……うう」
「あ、ちょ、ちょっと何も泣くことないじゃない！」
辛辣な言葉の応酬に、頬を熱いものが伝うのを感じた。鏡は無いので確認は出来ないが、これはきっと汗だ――そうに違いない。
彼女は慌てたように私に近寄った。ポケットから白いハンカチを取り出すと、私に差し出してくる。
「悪かったわ。ほら、使って」
「うむ……すまんな……」
彼女の手からハンカチを受け取ると、濡れた頬の水分をふき取る。と、そこでようやく気づいた。彼女の周りに浮かんでいた何か、それは人形だった――掌ほどか、それより少し大きいくらいの小さな人形。さらに注視してみれば、表情が若干変化していることが分かる。
私の視線を察し、彼女は人形を手にとって説明してくる。
「ああこれ？　人形よ、私の可愛い人形。ちなみに全部手作り。良く出来てるでしょ？」
「そうではなくてだな……何故動いているかの方が気になるのだが」
「私が動かしてるのよ……これでも魔法使いなの」
彼女は急にげんなりとした顔つきとなって、ひどくやっつけ気味に答える。過去に幾度と無く質問され、また幾度となく説明してきた

のだろう。
「それで？　あなたは何をしにここに来たの？　今この森はあんまり安全じゃないし、用が無いなら早く帰った方が良いわよ」
そう言い放って家に戻ろうとする彼女を呼び止めるようにして、早急に用件だけを伝える。そうでもしなければ本気で追い返されそうだった。
「用事ならばある。それもお主にな」
「……私に？」
彼女は眉をひそめ、露骨に警戒心をあらわにする。見知らぬ人間が用があると言ってくれれば、用心しない理由も無いだろうが。
とまれ、立ち止まってくれたことは救いだった。彼女には私の話を聞く余地があるということだ。
「里の上白沢慧音の紹介でな。まずはこの森に住む魔法使いの元を尋ねろと言われたのだよ。重ねて言うが、私は怪しい者ではない。勿論危害を加えるつもりも毛頭無い――こればかりは証明することは出来ないが」
「……それで？　あなたが本当に慧音の紹介で来てるって事は証明出来るのよね？」
距離を保ったまま、魔女は注意深く訊ねてくる。人形を自在に操る、慧音お墨付きの強大な魔法使いだ。下手に動けば手痛い攻撃を受けるだろう。
私は最小限の動作で封筒を取り出すと、彼女に向かってそれに記された名を示す。筒状の紙を糊止めして平たく伸した物ではなく、紙を折って作る古めかしいタイプの封筒には、差出人の名前が――上白沢慧音と彼女お得意の達筆で認められている。
魔法使いは無言で手元の人形の一体をこちらに飛ばすと、私の手から封筒を受け取らせた。人形の運んできた封筒を眺め、筆跡を確認する。
「……本物みたいね」
中身をあらためることはしなかった。彼女は封筒を傍らに浮いてい

た人形に手渡すと、先ほどまで見せていたような張り詰めた表情を和らげ、言った。
「あなた、名前は？」
「垂石だ。垂石無と言うヨーギー……人間だよ」
人間だと名乗った途端彼女は「ええ！？」と今迄で一番大きな声を上げていたが、もう慣れたことだ。頬を伝ってきた汗を拭い、彼女が落ち着きを取り戻すのを待つ。
「そうよね。妖怪としては不甲斐無いと思ったのよ……。でもまさか、人間が迷う以外の理由で私の家まで来るなんて……」
「そんなに珍しいことなのか？」
「珍しいも何も、記憶にあるうちじゃ初――いや、まああいつは別として、ほぼ初めてのことよ。それはともかく、とりあえず入ったら？　立ち話もなんでしょ？」
彼女に促されるままに、私は家の中へと足を踏み入れた。

魔法使いの問答（後書き）

アリスってこんな性格じゃなかった気が……。

魔法の森の魔法使い　B（前書き）

前回のタイトルはミスですが問題なく続けます。

魔法の森の魔法使い　B

「なるほどねえ……」
魔法使い、アリス・マーガトロイドの屋敷。その一室、客間のような部屋で、私は彼女の淹れてくれた紅茶を飲みながら事のあらましを伝えた。
部屋の中心には小奇麗なテーブルとソファがあり、それを囲むように造りの良い調度が並んでいる。四方の壁のうちの一面、その上半分を大きな窓が占めているため、室内にあっては十分な明るさを得られる造りとなっていた。
隅には暖炉が据えられており、この家が洋館であることを決定付けていた――慧音たちの住む人間の里ではほとんどお目にかからない建築様式。規模の違いはあれど、雰囲気は紅魔館に似ていると言えなくも無い。
ソファに腰掛けながら、私はテーブル越しに向かい合って座るアリスの背後にある棚を眺めていた。雑多な小物が詰め込まれているが、あれらは魔法に必要な道具なのかもしれない。
テーブルに置かれたクッキーをかじる。まだ温かいそれは、彼女の手作りか。
「それで、慧音は私のことをどう言ってた？」
「親切な変わり者の、強力な魔法使いと評していた。頼めば力になってくれるはずだと」
「ふーん……」
声色こそ大人しいが、口元がややにやけている。頼られたのが嬉しいのか、満更でもない様子だった。
「大体の話は分かったわ。そうね、私も調べようとは思ってたし……あなた達に協力してあげる」
「ありがたい。慧音に代わって礼を言うぞ」
いつの間にか空になっていたティーカップに紅茶を注ぎいれ、彼女

は角砂糖を二つ投じた。くるくるとスプーンでかき回す。
「お礼なんて別に良いわよ。それよりも、あなたこれからどうするの？　何かあてがあるんでしょ？」
「……そのあたりの事情は全部手紙に書いてあるはずだが」
「う、うるさいわね。慧音の手紙は達筆すぎて読みにくいのよ」
言われて、納得する。慧音は黒板に記す際は生徒を意識して読みやすくあっさりと、しかしいざ私用となると難解な筆跡となるきらいがあった。文面を解読する必要がなければ、それに越したことは無い。
「わかった。ではまず事の発端から説明しよう」
とまれ、私は口の中のクッキーを紅茶で流し込むと、手紙に記されているであろう内容について彼女に話し始めた。

説明を終えると、既に森は紫色の帳に包まれていた。木々の緑が夕日の鮮やかな橙を受け、里では見ることのないような色合いとなっている。
夕暮れ時の森は、存外に静かだった――獣は人の気配を察知する。人家に近寄らなければ、鳴き声が聞こえることも無いわけだが。
「なるほどねえ……」
この言葉を聞いたのは二度目だが、アリスの顔つきは前回とは全く違っていた。険しい、渋面。回避できない災厄が、大切にしていた何かを破壊してしまったような表情。口調も重々しく、彼女の思考が手に取るように分かる。
「そのうちの一人が森に居る……」
「居るかも知れぬ、と言うのが正確だろう。まだ確認したわけではない――私はそれをしに来たわけだからな」
ため息を一つつくと、アリスは後ろを向いて指示を飛ばす。
恐らく台所があるのだろう。後ろの扉を開けて出てきたのは、数体の人形だった――自身の身の丈よりも大きな器を抱えている。湯気が立っているところを見るに、人形達は他の部屋で作った夕飯を運

んできたようだ。
「お腹すいたでしょ？　どうせ泊まってくつもりなんでしょうし、とりあえずご飯にしましょ」
運んで来いと命令しなければ人形達は動かなかった。それは、先ほどの様子から容易に想像が出来る。
だが、人形達に命令を下して台所へ向かわせる場面を私は目撃していない。
つまるところ彼女は、私の話を聞く前――あるいは聞いている間――に、既に人形達へと指令を出していた。私の知らぬところでひっそりと夕餉の支度を開始させていたことになる。
名前を知ってから数時間しか経っていない人間が、既に一泊することを視野に入れて行動していた。
――なるほどな。
目の前の魔法使い――アリスは確かに変わり者だ。人間にこれほど優しい妖怪など、そう多くはあるまい。ましてや彼女は強大な力を持っているにも拘らず、である。
私は苦笑した。

魔法の森の魔法使い　C

「私もね、私なりに少しは調査してたのよ」
手製の――正しくは人形手製の――グラタンをつつきながら、アリスはぼやいた。空になったグラスに、背後から飛んできた人形が水を注ぐ。
「最近は減ってるんだけど、まだ月に一人や二人は迷って訪ねてくる人間が居るのよ。それで、なんか森がこう……凄い感じで破壊されてたのを見たって話を聞くようになって。気になったから少し回って調べてみたの」
久々の洋食――夏にグラタンというのはいかがなものかと思ったが、味は良い。森の中は里よりも涼しく、暑い時に熱い物を食べていても苦痛にならなかった。
「それでね、確かにおかしな所が見つかったわ。不自然に折れた木の幹とか、無意味に抉られた地面とかが数箇所。それ以外にも細かなのが色々あったんだけど、規模的に言ったら今言った奴ほどじゃなかったわね」
「良くあるのか？　そういったことは」
水を胃に流し込み、アリスは頭を振った。
「こんなこと初めてよ。森に住んで長いけど……だってそうじゃない？　木を折ったり、地面掘ったり……意味が無いもの」
「それもそうだな……では一体何故そのようなことをしたのだ？　それも誰が？」
言っていて、詮無いことだと気づく。それを調べるために私はここへ来たのだから。
取り消すよりも早く、アリスが答えた――それも不機嫌そうに。
「知らないわよ。でも、誰かがやったのは間違いないわ。そんな得体の知れない何かが森の中をうろついてるって事ね。だから今の森は危険だって言ったのに、あの妖精たちは……」

彼女の言葉にはやや棘があった。だが、アリスの複雑そうな渋面は怒りと言うよりはむしろ――
「話は変わるのだが……ちょっと良いかな？」
「何？　もうちょっと話したいこともあるし、なるべく早く済ませてもらえると嬉しいわね」
既に中身を平らげた皿を人形に片付けさせながら、アリスは食後の紅茶を用意しようとしている。
「うむ。先ほど私と共に居た三妖精にお主がかけた言葉について聞きたいのだが」
「……あれは警告よ。あの妖精たち、全然危機感が無いのよ。意味の分からない何かがうろついてるなんて嫌な感じがするし、何かあったら力の弱い妖精じゃどうしようもないって言うのに……」
ぶつぶつと怨嗟のような声を上げる。喋ることに夢中になるあまり、彼女は出そうとしていたティーポットを持ったままの姿勢で停止していた。
何故お茶の用意は人形にやらせないのか気になったが、アリスの行動からその理由にも見当が付いた。
彼女の顔は心なしか赤くなっている。私の想像は当たらずとも遠からずだろう。
「それは警告ではない。忠告だ。お主のそれは怒りではない。不安だ。思いやりから来る……不安なのだよ」
「そ、そんなわけ……！　なんで私があんな妖精なんかを心配しなきゃならないのよ！」
先ほどよりも顔を真っ赤にしながら、アリスは身振り手振りを交えて激しく抗議してきた。しかし、明らかに分かるほど動揺している――照れ隠しのつもりが、かえってそれを証明してしまっていた。
「大体、妖精なんて死んでもすぐ蘇るのよ？！　そんな奴らの心配なんて意味無いじゃない！」
「だが痛みは感じるのだろう？　あの怒鳴り声は怒りではなく、危険から遠ざからずにいた彼らへの憂慮から出たものなのだ」

妖精は憂さ晴らしの標的と言う人間の居る一方、妖精を気遣う妖怪が居るのはなんとも言いがたい感情を覚える。あるいは人にあらぬ者としてのよしみなのかもしれないが。

「……そ、それは今関係ないでしょ？　ほら、早く例の森を破壊する奴について話しましょうよ」

露骨に話題を変えてきた。その意図はありありと伝わってくるが、これ以上つつくのは止めておこう。彼女は強い魔法使いだ。

魔法の森の魔法使い　C（後書き）

アリスは良い人。

森の異変　A（前書き）

現地調査は基本。

森の異変　A

翌日。アリスと私――ついでに彼女の人形――は一路森の中を歩いていた。
昨夜からあまり機嫌の良くないアリスに連れられ、私は件の破壊跡へと向かっている。とにかく実物を見てみるのが手っ取り早いと、彼女が提案してくれたのだ。いや、提案と言うほど柔らかで選択権のある物ではなかったが。
アリスの足取りには、迷いが感じられない。森に住む者は、やはり森がどうなっているのか熟知しているのだろう。あるいは、何か魔法を使っているのかもしれない。
本来ならば世間話の一つくらいするべきなのだろう。会話は潤滑油である。特にそれほど親しくない間柄の人間と一緒に居る場合、沈黙は空間を締め付ける。
結局夕食の後に彼女が話に応じてくれることは無く、口を開いてくれたのは今朝になってからのことだった。
それも、「見たほうが早いから着いてきて」の一言だけ。簡単な朝食は準備してくれたが、あとは完全に無言だった。
気まずい沈黙。数箇所ある破壊跡全てを巡る間、ずっとこの空気が続くのだと思うと、流石にいささか気が滅入る。
「……アリスよ」
「……」
少し先を行くアリスに恐る恐る声をかけるも、私の言葉に彼女は全く反応を見せない――予想してはいたことだ。怖気づかずに、続ける。
「……昨日のことは詫びる。だからちょっとそのだな、私は人の話を聞くことはとても大事だと思うのだが」
「……」
果敢に話しかけてみるが、無視されているというよりはむしろ私と

いう存在を黙殺しているとしか思えないほどの潔い無関心が返ってきた。頬を引きつらせ、心に何か妙な痛みを感じながら、私は三度挑戦する。

「……落ち着いて考えてみよう。我々は一応曲がりなりにも協力関係にあるわけだ。いくら腹が立ったとはいえ、相手をここまで突き放すのは大人として問題があるとだな、私はこう考えているわけだがお主はこれについて――」

「このあたりよ」

唐突な言葉と共に、アリスは立ち止まった。一呼吸遅れて私も歩みを止めるも、危うく追突しそうになってしまう。

アリスはこちらへと振り返り、背後の一点を指差した。彼女の肩越しに、地面の色が変わっているのが見える――それが地表が削られた爪痕であることにはすぐ気がついた。

「これは……」

「これが一箇所目。見つけたのは確か……十日くらい前だったかしら」

何が行われたのか、皆目見当がつかない穴。だが何かが行われたのは確実だろう。目の前にある大きな傷跡に、私は息を呑んだ。

落とし穴と言うわけではない。蟻地獄のような、緩やかな円錐状の、すり鉢のような穴だ。規模こそ3メートル幅くらいのものだが、深さはそこそこにある。

「一体……なんなのだ？　これは……」

「分かってたら何の苦労もしないわよ。考えてみても、全く何なのか分からない。だってそうよね？　こんな大穴何のために掘ったのか、知ってる人が居れば聞いてみたいわ。……お手上げって奴ね」

そう言うと、彼女は私の顔を見て肩をすくめてみせた。彼女の動きを真似、周りに浮かぶ人形も同じように両腕を肩の高さまで上げる。

掘り捨てられた穴には意味も無かったが――土もなかった。誰かが今空いている空間分地面を掘り起こしたのならば、そこにあった土は何処かに積まざるを得ない。しかし、そのような土山はどこにも

見当たらない。
持ち帰ったのならば話は別だが、この大きさの穴である。何時間かけて大地を穿ち、何時間かけてその土を移動したというのか。考えるだけ無駄だろう。
「人間には掘れそうにないな。たとえ掘ったとしても、これだけの土砂を隠せるとあれば、それは最早人間技ではない。地面には轍があるわけでもなし……人の手だけで運ぶのならば、文字通り人手が足りぬ」
「なら妖怪がやったって言うの？」
「それは――」
「まさかあなた、私を疑ってるんじゃないでしょうね？」
分からないと言おうとしたのだが、アリスに横槍を入れられ、咄嗟に黙ってしまう。それが悪かったのだろう。言葉を濁したと見た彼女は、敵意にも似た視線を投げつけてくる。
「では聞くが、お主なら何のためにこのような穴を掘るというのだ？」
「……いや、特に思いつかないって言ってるじゃないのよ」
先ほどと同じように、お手上げの動作で彼女は嘆息する。私は諭すように告げた。
「だろう。だからお主のことなど疑ってはおらぬよ」
少し間を置いて、アリスが上げていた両腕を音も無く下ろした。既に先ほどまでの鋼線にも似た眼光は消えている。彼女の不信感、買ってしまった反感は無事潰すことが出来たようだ。
「……なんか言葉遊びで誤魔化された気がするわ」
「それは誤解と言うものだよ」
矛を収めてくれた彼女は、いつものように――とはいえ昨日会ったばかりだが――小難しげな顔つきで腕を組んでいた。せめてもう少し表情を和らげてくれると嬉しいのだが、今はこれで十分だろう。
観察を再開するため大穴へ向かうと、先ほどから立ち尽くしていた彼女が背後から声をかけてきた。

「誤解ついでに言っておくと、私は別に怒ってるわけじゃないわ。ちょっと考え事をしてただけ。熱中すると周りが見えなくなる性質なのよ私。……何？　何よその顔は」
無意味な気苦労と思い過ごし。重くのしかかっていた肩の荷が下り、思わず振り返ってしまった私の顔は、どうやら彼女のお気に召さない表情だったらしい。
今度は私が肩をすくめる番だった。

森の異変　B（前書き）

ルビを多めに傍点のように使ってみました。
ＩＥしか対応してないみたいな話でした。
使ってみましたが使ってみただけなので、表示に失敗したとしても
多分読めると思いますのでご了承下さい。

森の異変　B

数分、あるいは数十分は観察しただろうか。隅から隅まで眺め回して見たものの、結局その穴の謎を解くことは出来ず、私たちはその場を後にした。これ以上ここに留まっていても、更なる収穫はないだろう。

それは次の目的地でも同じことだった。土の状態から見るに、掘られたのはそう昔ではないことくらいは理解できたが、それだけではどうすることも出来ない。

同じような大穴を三箇所回ると、次は幹の中ほどから砕けた大木が私を待っていた。

「これは……」

「何かさっきも聞いた気がするわ、その反応」

大木――巨木である。地を這う木の根だけとって見ても、それは一目瞭然だった。

小さな子供はおろか、大人の男が手を回しても抱きつけないほどの幹。その樹幹は見るも無残に粉砕され、本来ならば一つであった根と枝を赤の他人へと変貌させられてしまっている。

天を衝く怒髪のように、不揃いに尖った木部を晒す切り株――折れた木の場合は折れ株か――の横は、砕かれた際に飛び散ったのだろう。大小様々な木片が散乱しており、事態の物々しさを示していた。まだ朽ちる様子のないことから、これも大穴と同様比較的最近に砕けた物であることが分かる。

「これほどの幹を破壊するなど……そう考えられたものではないな」

まるで信じがたい怪力によって、上下真っ二つに引きちぎられたかのような、あるいは枝をそうするが如き容易さで手折られたような幹。砕かれた大木の切り株に残る、剣山のようないびつな断面を見下ろしながら、アリスは呟いた。

「そうね……それは私も同感よ。でも……」

私もまた同じように、歪んで見える年輪をじっと眺める。と、その年輪がところどころ潰れていることに気づいた。槍のように鋭い木片も、そのいくらかが途中で折れていることが分かる。
雷の直撃、あるいは何か巨大な質量を持った物が激突すれば木はたちまちにひび割れ、そして倒れるだろう。だが――
「この木はおかしいのよ」
その疑問に呼応するかのように、アリスは切り株を指し示す。
「木こりって知ってる？　斧で木を伐採すると、断たれたほうの木はそのまま横に倒れるわよね。まあ、倒す人間がそう計算して倒すわけだけど」
「……続けてくれ」
「自然にせよ人為的にせよ、幹が折れたらそのままどちらかへ倒れるじゃない。なら、こういう妙な断面にはならない――なるはずがないのよ。こんな、こんな……」
言葉が震える。およそ考えられないが、そう考えねば納得できない結論にアリスは既に到達している。だからこそ、彼女はその現実におののいている。
「こんな――折れた幹がすぐに倒れなくて、まるで垂直に落下したような……！」
アリスの口から飛び出たのは、まさにそのありえない事象だった。だるま落としを思い浮かべるとよく分かるだろう。
通常、伐採された樹木はだるま落としでいう失敗のような倒れ方をする。即ち何らかの力によって支えを失い、バランスを崩して枝葉のある側が横転する。倒れる原因は幹の欠損によって自立が不可能になること。よって支えの欠けた側に倒れることはあれど、垂直に落下することはありえない。
だが、目の前で起きている――起こったのはその理屈では到底説明のつかないものだった。落下によって折れた部分同士が、一度ぶつかりあったことで断面がひしゃげている。だるま落としに成功した時のように、支柱の一部を一瞬で失い――幹の一部が一瞬で消し飛

んだ――、消滅した空間の分を幹が落下したとしか考えられない。
「これをやったのは……誰、いや何者なのだ？」
不意に口からこぼれた小声だったが、アリスは耳ざとくそれを聞いていたらしい。しばしの時を経て平常心を取り戻した彼女が、的確に突っ込んでくる。
「人間に出来るわけないってあなたさっき言ってたじゃない」
確かにそう言った事を思い出し、説明に付け加える。
「いや、それはそうなのだが……どうも腑に落ちぬのだよ」
「……それは私も同じなんだけど」
半眼で嘆息するアリスに向き直り、私は己の憶測を打ち明けた。確信があるわけではなく、ただ疑問点をまとめただけの物に過ぎなかったが、伝えておけば彼女が答えを導くかもしれない。
「大穴にせよこの木にせよ、とにかく理由が無い。これだけのことをやったのだ、何か目的があるはずなのだが……人間がやるにしては無理な話であるし、妖怪ならばそもそもこのようなことを行う意味が無い」
「だとしたら誰がやったって言うのよ？　人間に出来ない、それで妖怪でもないなんて。あなたが追ってるのは外から来た人間なんでしょ？　なら――」
言葉はそこで途切れた。見れば、彼女は何かを悟ったように目を軽く見開いて絶句している。アリスに代わって続けようとすると、小さくぽつりと声が漏れる。
「やったのは……人間？」
腕を組み、向かい合ってもなお聞き取りにくいほどの小声でぶつぶつと呟く。思考をまとめているのだろう。
「この行為自体、何か特別な目的があってやったわけじゃない。人間でも妖怪でもない。でもそれは、この幻想郷の、ってことよね。じゃあ、外の人間――外来人なら……」
彼女の思索は留まらず、こぼれたかけらは濁流のようにあふれる言葉として、やがて森の静寂を支配していた。私は黙り、固唾を呑ん

で彼女の声を聞き逃さぬよう集中する。
「……例えば、例えばの話よ。その外来人が、何か力を手に入れたのだとするじゃない。魔法でも妖術でも、武器でも道具でも、この際あなたのそのヨーガとか言う力でも構わないわ。幻想郷は非常識の世界、外ではありえなかった能力に、こっちで開眼したとすれば――」
森に新しく出来た小屋の話。妖怪を次々と襲う謎の襲撃者の話。それらを総合して出した推論。打ち合わせを行ったわけでもないが、私とアリスは示し合わせたように、同じ一つの結論へとほぼ同時に至った。
「……人はそれを試してみたくなる生き物だ。示威行為にしては場所的に無意味。だとすれば、これはその外来人が手に入れた力を試しただけ……そう考えれば、ひとまずは合点がいくというわけか」
「そうね。そうとしか考えられない……いや、それが一番可能性が高い、と言っておこうかしら」
結論へと至ることは出来たが、この謎を解いたのは彼女だ。疑問を空想で膨らませ、過去を類推しおよそ限りなく真実に近い解を導き出す。想像力と洞察力、そして閃き。本当に彼女は優れた魔法使いである。
私はそれを改めて感心させられることとなった。

迷惑来訪者

アリスは地図を持っていた。
人が歩ける道や川、それと幾許かの目印のみが記された大まかなものではあるが、元々森の住人ではない私にとっては、点在する大穴と砕かれた木の位置関係を把握するにはこの上なく便利な代物となる。
外来人のやったと思しき破壊の痕跡、その全容を把握すれば、未だ発見するに至っていない小屋を捜し出すことが出来るかもしれない。
ところでその地図が出されたのは、歩き回っている途中――ではなく、アリスの家に戻ってからのことだった。
つまるところ、彼女は地図を家に置き忘れていたのである。

「こんな有用な物があるのならば、先に一言言ってくれても良かったではないか」
東側を私に向け、西側をアリスに向けて、地図がテーブルの上に広げられている。数箇所に印の書き足されたそれを眺め、あるいは印を指差しながら、私とアリスは今後の展開について考えていた。
朝から一日森の中を歩き倒し、結局彼女の家に我々が戻ったのは昼下がりのことだった。昼食も取らずに歩いていた私たちは、ひとまず遅めのランチタイムを経、空腹を満たした後に話し合いを開始したのである。
慧音宅では緑茶だったが、アリス邸では食後に紅茶が出るのが決まりなのだろうか。あるいは私が客人として迎えられているからなのかもしれない。何にせよ、彼女の紅茶は疲れを和らげてくれる。
話の途中でおよそもっともな疑問を思いついた私は、会話が途切れたのを見計らって彼女にそれを投げかけてみた。
「仕方ないでしょ。忘れてたんだから」
「しかし……地図があることすら教えてくれなかったではないか」

「そ、それも忘れてたのよ。悪かったとは思ってるわ」
腕を組み、人差し指で頬をかきながらアリスは目線を反らした。どうにも分の悪いことを知ってか、話を変えてくる。
「それで……何か分かったの？　見てきたところは全部地図に書き込んだけど」
「小屋の位置が分からぬ以上、ここで何らかの手がかりを掴みたいところだが……」
地図上で破壊された物のある場所を見ても、何の脈絡も見当たらない。道沿いに印のつけられたところもあれば、川沿いや、全くの森の中といった箇所もある。しかし、破壊のされ方はどれもが似たり寄ったりなのである。
こうなると、いよいよ私は頭を抱える他無かった。人の考えていることを察するのは得意だが、探偵のような素質の無い私は、むしろ推理やパズルはそう得意ではないのである。
「あなた外の世界の人間なんだし、何か無いの？　ほら、どんな謎でも解ける方程式とか」
「それはむしろこちらの世界にあるべき物だろう。そんな物、あちらの世界ではいんちきや妄言の類だ」
「うう……それじゃホントにお手上げじゃないの……」
焦点の定まらない目でボーっと地図を眺めながら、彼女は肘をつく。嘆息する彼女に向かい、私は口を開いた。
「お主が推理してくれても良いのだぞ。先ほどのあれは名推理だったと思うのだが」
「勘弁してよ。私だってやりたくてやったわけじゃないのよ。それに、出来ればとっくにやってるわ」
空いている方の掌を上に向ける。肩をすくめる気力も無いのか、単に面倒なだけか。どちらにせよ、アリスは思考を放棄しかけていることは、その無気力そうな表情から伺えた。
「せめて場所に意味があってくれれば良かったのに。まったく、何を考えているのかしら。この外来人は」

行為自体に意味が無いというのに、場所に意味を求めるのは的外れと言う物だろう。
しばらく沈黙が続いた。黙考しているわけではなく、ただ両者とも言葉を発さずに座り、うなだれ続ける。信じがたい事実へと直面したことによる精神的疲労は、我々を徐々に蝕んでいたのである。

動きがあったのは、鬱蒼とした木々が生み出す静かで非日常の空間、ある種の恐怖である森が、その役目を暗がりへと譲ってからのことだった。
夕暮れ、今日もまたアリスの人形達は台所に立っている。実際は浮いているわけだが、この際言葉の問題は置いておく。
気だるい午後の延長線として夜を迎えようとするアリスは、先ほどから空になったティーカップをじっと眺めている。私は私で、シャーロック・ホームズ気取りで地図とにらめっこをしていた。無論ホームズであれば、今までかけた時間の五分の一もかからずに謎をするりと解き明かして居るに違いない。
と、突如戸を叩く音が響き渡った。室内に居るものは二人ともこの部屋に居ることから、それは玄関のドアを叩く音であることがわかる。
「はぁ〜い……」
気の抜けた声を上げながら、アリスがパタパタと玄関へ駆けて行く。突然の来客に思い当たる節が無いのだろう。その顔は訝しげな色に染まっていた。
「どちら様で……げ」
ドアの開く音の直後に彼女は上げたのは、訪問客を歓迎するとは全く思えない奇妙な悲鳴だった。

迷惑来訪者（後書き）

なんとあの人が！

迷惑来訪者の助言

「か……」
ただ事ならぬ気配にその場から玄関を見やると、アリスが体を戦慄かせて後ずさりしている所だった。か細い声で目の前の存在の名を呼ぶと同時に、彼女を震え上がらせる――それは恐怖ではなく、拒絶に近いようだが――化け物がその姿を現す。
「風見幽香……」
「何よ、随分じゃない。私があなたの家に来ちゃ悪いの？」
いつか聞いたことのある声。そして、薄暗い夜にも鮮やかさの主張を忘れることの無い緑の髪。
アリスの声をかき消すと、幽香は当惑する家主の反応に気後れすることなく、室内へ足を踏み入れる。我が物顔と言うよりは、ただ無遠慮なだけだろう。
「ちょ、ちょっと！　勝手に入って……」
「あら、あなたも居たのね」
ちらりと室内を見渡した際に、丁度彼女の方を見ていた私と目が合った。と、幽香は自慢の日傘を小脇に抱え、記憶を呼び起こそうとしているのだろう。眉間にしわを寄せて唸った。
「えーと……妖怪っぽいけど妖怪じゃない、ターキーとかルーキーとか、何かそんな感じの」
「私は七面鳥でも新人でもなくてヨーギーだ！　が、妖怪ではないことは覚えていてくれたのだな」
「ええ、まあね」
私と幽香、人間が友好度最悪の妖怪を恐れるでもなく、ごく普通に世間話をしている。その光景が信じられなかったのか、アリスはぽかんと口をあけて戸口に突っ立っていた。
「何、あんたたち知り合いなの？」
「そうなるわね。一度会ったら友達で、なんて言うらしいじゃない」

「慧音の所で会って以来、その後も何度か顔を合わせてな。それで、何故ここに？」
促されるわけでもなく、幽香は空いている椅子に腰を下ろした。小走りで駆け寄ってきたアリスは、少し離れたところにあるソファに腰掛け、不機嫌そうに頬杖をついている。
「ちょっと。お茶はまだかしら？」
幽香はテーブルを指でトントンと叩き、客としての扱いを要求する。襲い掛かる災厄には、立ち向かうよりも巻き込まれたほうが有効だと知っているのだろう。アリスはむくれ顔になりながらも、人形を飛ばしてティーカップを幽香の手元に届ける。
「ありがと。そうよ、折角情報を持ってきてあげたんだし、これくらいはしてもらわないとね」
「情報？　あんたが？　何でまた私たちなんかに」
幽香の背後でアリスが毒づく。が、幽香は特に気にすることなく続けた。
「知りたいんでしょ？　その小屋がどこにあるのか……外来人がどこに居るのか、と言いかえてもいいわね」
「それは本当か？　なら是非――」
「妙ね」
手に入れたい情報が目の前に転がっている。私がそれに触れるよりも速く、アリスが割って入った。疑わしげな目をして、幽香を軽く睨みつける。
「何で自分で行かないのよ。
「それは――」
「今回の件、妖怪の手出しが禁じられてるのよ。博麗の巫女も異変として認定してない。どういうことかわかる？」
八雲紫が一月前のあの夜に言っていたことを彼女に伝えようと、口を開いた途端にまたも発言を遮られた。しかし、内容自体は幽香が全て代弁してくれたので問題は無かろう。
その表情は納得したように見えるが、本心がどうかは分からない。

ただ、アリスはそっと幽香から目線を逸らした。
「私が暴れると大変なことになるからって、大妖怪さんに釘を刺されてね。私が加減も出来ない炸薬か何かだと思ってるのかしら、あの賢者さんは」
「それで、私達――いえ、話からするとこのヨーギーさんにそれを任せよう、ってこと？」
「ええ。砕けた木。見たでしょう？」
突然話題を変えられて反応が遅れるも、返事をする。彼女の真意を読み取ることは容易だった――肩が小さく震えている。語勢こそ穏やかだが、強者が怒りをあらわにすることなど無い。
アリスも気づいたのだろう。目つきが変わり、今この場で何が起きようともすぐ動けるような、そんな様子で身構えている。無論、座ったままだが。
「あ、ああ。見たが……それが何かしたのか？」
「あの木はね。いえ、あのうち一つはね……そろそろ花が咲く頃だったのよ。それをあんな風にした奴、私が許す道理なんて無いでしょう？」
八雲紫が彼女に直接関与を禁じた理由が分かったような気がした。彼女は加減するだろう。だが、その加減された力だけでも十分パワーバランスに影響を与えかねない――他の妖怪たちが、同等の力を振るっても良いのだと思ってしまうほどに。
「それはそれとして、規則は守らなきゃならないわ。だからこうして――って、どうしたのよ？　そんなおっかない顔しちゃって」
「い、いや。特に何があるというわけでも無いのだ。気にしないでくれ」
苦しい言い訳かと思ったが、幽香はあっさりとそれを受け入れた。別にどうでも良かったのだろう。
「そう？　……それで、まあちょちょいと調べてみたのよ。花を操る力は便利よ？　全てが目撃者になるんだもの――」
言いながら、テーブルに広げられた地図に目を下ろす。テーブルの

面積の半分以上を占めるというのに、彼女はまだ一度もその地図を見ていなかった。
「あら？　この地図……丁度印で囲まれた中心よ、その小屋」
そう言って、幽香は最強の一角と噂される妖怪のものとは思えないほど透き通った白い指を、地図の一点にピタリと突き立てた。

迷惑来訪者の助言（後書き）

全然迷惑じゃなかった！

狂乱と無気力（前書き）

更新ペースを完全に勘違いしてました。申し訳ありません。

狂乱と無気力

「な……」
ガタッと音を立て、跳ね上がるようにして立ち上がったアリスは、体を小刻みに震わせていた。心なしか、周囲を漂う人形達が不安げに彼女を見守っているようにも見える。
「何それ……」
「そんな……ことが……」
まるで明日世界が滅ぶと知ったかのような絶望的な表情を浮かべて絶句する彼女に続き、私も立ち上がって後ずさりする――同じく絶望に顔を歪めて。
立ち上がる際に跳ね除けた椅子が床に倒れて硬質の音を立てるのは、終末の言葉を呟き終えた直後であった。耳障りな、それで居て何処か心地の良い音が響き、壁に反射して家中に浸透してゆく。
「ちょ、ちょっと。どうしたのよ。ねえ、二人して何をそんなに……」
これほどまでに慌てた風見幽香の姿を見たことのある者など、世に二人として――いや、私とアリスがいるので三人として居ないだろう。目の前の二人が取った、己の知る理に全く適わない行動。その真意が全く見えないことに、幽香は狼狽し震撼すらしていた。
まるでタイミングを合わせたかのように、ほぼ同じ瞬間に私とアリスは強張らせていた全身の力を抜き、倒れるように椅子へ身をゆだねる。その動きもまた奇妙に映ったようで、幽香が小さく防御の姿勢を取ろうとした。だが、我々はそのまま背もたれに体を預けたまま脱力する。
「我々の一日は……なんだったのだろうか……」
「私たちの努力は……一体……」
一拍置いて大きく息を吸い、一呼吸置いて長く深いため息を吐く。
私とアリスの行動は完全に一致していた。息が合っているのか、単

に虚無感を味わった者は寸分違わず同じ動きをするものなのか。どちらでも良かった。
部屋を沈黙が襲った。
異常な状況が終わったことで我を取り戻したのだろう。幽香は顔を上げ、両手でテーブルを叩く。
「と、とにかくアレよ！」
我々の反応を待っていたのか、しばしの間があった。だが、私もアリスもそれに応じるそぶりを見せない。
「私は伝えたからね。頑張りなさい！！」
やや苛立ちの混じった声で、無気力コンビに発破をかける。流石に返答をしようと、私は声を絞り出した――
「……うぅ」
「もうちょっとちゃんと喋りなさいよ！！」
うめき声しか上げられないふがいなさを感じる暇も無く、幽香の怒号が私に突き刺さる。
これ以上ここに居てもストレスしかたまらないと理解したらしく、彼女は乗り出すようにして体重をかけていたテーブルから手を離し、傘を拾って踵を返す。付き合いきれないといった具合だ。
「……本当に頑張りなさいよ！？」
家を出る直前で振り返る。まるで捨て台詞のような激励を残し、風見幽香は夜の森へと消えていった。
残されたのは、語らず、動かず、魂を持たない人形達よりも死に近い気すら感じさせる、生ける屍のような二人だった。

「……気を取り直しましょう」
提案は前向きだが、口調は後ろ向きだった。諦めをつけたのだろう。過去を嘆くよりも、未来を見るのは得策だ――概ね彼女の意図はこんなところか。
「そうだな」
肝心要の場所が分からず困窮していたところに、その位置情報を持

った幽香が現れ、無償でそれを提供してくれた。渡りに船、棚からぼた餅、禍福は糾える縄の如し。喜ぶ道理こそあれど、それを嘆き哀しみ嘆息するのはお門違いだ。
「幽香が協力してくれるなんて予想外だったわ」
先ほどの幽香に対する彼女の態度から見ても、その言葉が嘘ではないことははっきりと分かった。
「でも、一応感謝すべきなのよね……これはきっと」
「場所がわかったのだから、もう今すぐにでも向かえるというわけだな」
「そうなるわね。こういうことは早い方がいいんだけど……」
同意はするが気乗りはしない様子で、アリスは語尾を濁す。今すぐにと言うのは言葉の綾だったのだが、
「今日はその、何か凄く疲れ果てたし……明日でいいんじゃないかしら？」
「うむ。私も同じ事を考えていたところだ。休息は大事だからな」
早々に話を切り上げ、アリスは寝室へ、私は客間へそそくさと向かった。とにかく、今日は何をやる気力も無かったのだ。

狂乱と無気力（後書き）

凄く……進みません……。

小屋

森を歩く。
森にも慣れたもので、初めて足を踏み入れた時のような恐怖にも似た高揚感も、三日も経てば既に感じなくなっていた。森は息が詰まりそうなほどの湿気には、相変わらず参ってしまいそうだったが。
「昨日は散々だったわ……」
前を行くアリスがしみじみと呟く。その顔は見えなかったが、恐らくげんなりとしていることだろう。
かく言う私も昨夜よりはやる気を取り戻しつつあれど、一日の努力をふいにされたことから来る理不尽な無気力感は、未だ私の中に根深く突き刺さっている。
「本当に合ってるんでしょうね？　幽香の持ってきた情報は」
何処か捨て鉢な態度で、彼女は顔を扇ぐようにして掌を振る。夏の森は流石に暑いのか、それとも特に意味は無いのかもしれない。
「地図を貸してくれ……ありがとう。そうだな、そろそろ件の位置に着いてもよさそうなのだが……」
アリスから地図を貰いうけ、ざっと現在地を概算して図に重ね合わせる。赤インクでばつ印をつけた場所が目的の小屋であり、我々は丁度巻き添えでインクに染められたあたりまで来ていることになる。地図上は既に小屋の位置に居ることになる。だが、肝心の小屋は全く視界に姿を現さない。
「私達、あいつに一杯食わされたんじゃないでしょうね……」
「疑うのはまだ早い。もう少し先へ行ってみようではないか」
「いや、疑ってるって言うか……そもそも信じる要素が無いことに気づいたんだけど」
幻想郷に暮らす妖怪や妖精などの人外の者たちは、多くは自分本位で利己的な、よく言えば一匹狼な気質である。人間から魔法使いになったアリスや、人妖として生きる慧音など一部例外はあるものの、

基本的には自分の都合しか考えないと言う。
「大体あいつが私たちを手伝うなんて博愛的な真似をするのがそもそもおかしいのよ。そうよ。きっと何か疲れから来る悪い幻覚だったに違いないわ」
「……幽香は恐らく自分の都合しか考えておらぬよ」
口を尖らせる――顔は見えないので想像だが――アリスをなだめるように、私は地図を丸めて彼女に差し出しながら言う。
「彼女の目的はあくまで花を傷つけた者への報復だ。そう考えれば、我々に情報をくれたことにも説明がつくとは思わないか？」
「何？　それはつまり、幽香が制裁のために私たちを利用してるってこと？　……そうね。それならしっくり来る……小屋の情報も本当みたいだし、まず間違いないようね」
「うむ。だから小屋もそろそろ――小屋？　どこにある？」
相槌を打つ途中で、聞き捨てならない言葉が耳に入ったことを脳が認識した。ようやくたどり着いたという興奮を抑えながら、彼女に問う。
「……目悪いの？　ほら、あそこに見えるじゃない」
目の前では、振り返ったアリスがその背後を指している。人差し指の先に肩越しに見えたのは、薄暗い木陰にぽつねんと建つ掘っ立て小屋であった。

「こんにちわー……」
ドアを数度ノックしても返事が無く、人気も感じられない。私が止めるのも聞かず、アリスは鍵のかかっていない簡素な造りのドアを押し開けた。軋むような音を立て、ドアはゆっくりと開く。
素人が建てたにしては出来が良く、かといって玄人が造ったとすればその腕を疑わずには居られない。森の中に佇む小屋は、台風でも来れば倒れてしまいそうなデリケートさを存分に主張していた。
「誰も居ないみたいね……」
「それはまあそうだろう。だから勝手に入るのは……」

「お邪魔しまーす」
「いや待てと言って」
既に小屋の中へ入ったアリスには届かず、私の声はむなしく森に散った。
外で待つよりも、まずは室内を物色しようとしている彼女を止めるほうが先決だろう。意を決し、多少後ろ暗さを覚えながらも、彼女に続いて小屋へと上がりこむ。
「全く……家主が来たらどうするのだ」
「誰も居ないんだし、待っててても埒が明かないわよ」
室内には物がほとんど置かれていなかった。むしろのような簡素な布団、そして小さなちゃぶ台。窓はあるが、ただ壁に穴が開けられているだけの申し訳程度な物に過ぎない。全体的に使い込まれた様子も無く、生活感が全く感じられなかった。
「でも妙ね。てっきりここが外来人のねぐらかと思ったのに……また木でも砕きに行ってるのかしら？」
彼女は室内を一周した後、数少ない家具を弄り回し始めた。とはいえ、何かを隠せるような場所は見当たらない。戸口に立つ私が諌めるよりも早く、彼女のお部屋チェックは終了してしまう。
「うーん……何も無いじゃない」
「大人しく待っていればいいだろう。ここで暮らしているのならば、いずれは戻ってくるのだからな」
「それはここで暮らしてるなら、の話でしょう？」
彼女の声から浮ついた気配が消える。見やれば彼女はあの時と同じ、情報を吟味し、答えを導くような瞳になっていた。やや目線を下に落とし、熟考する。
「生活感が無さ過ぎる……そもそもこんなところに住む意味が感じられないわ。何か見落としてるとしか思えない……」
そこまで呟くと、彼女は顔を上げて私の元へ歩み寄ってきた。そのまま脇で立ち止まると、開けっ放しになったドアに注目する。しばし眺めた後、私にそこを退くよう命じ、建物の内側に押し込まれた

ドアを引っ張り出して入り口を封鎖する。と――
「なんだ？　その……それは」
ドアの一部が白く変色していた。が、それは私の錯覚であると気づく。長方形の白い紙が、釘か何かでドアの内側に打ち付けられていたのだ。
「これは……手紙ね」
白い紙を剥ぎ取り、アリスは中をあらためる。どうやらそれは封筒のようで、中からは何か文字の記された紙が出てきた。
「……これ」
ざっと目を通し終えたのだろう。抑揚の無い声で小さく呟くと、彼女は何も言わずに私へその手紙を差し出してきた。

疾駆

遠ざかる森を振り返る事も無く、私は空を飛んでいた。
テレポートは強力な移動手段だが、如何せん移動できる距離が短い――連続で使うことも出来ないので、ある程度の距離を移動するには飛行するのが一番速い。
すぐ横にはアリスが居る。ひどく焦れたような顔つきだったが、その瞳には怒りではなく恐れが見える。
「もっと速度出せないの！？」
「すまぬ……これが限界なのだ」
アリスの語気は荒く、そのことは彼女の苛立ちを雄弁に物語っていた。彼女と同じか、あるいはそれ以上の焦りが私にもある。かと言って、飛行速度を上げることは出来ない。この状況で手を抜く道理も無いことを知っている彼女は、それ以上何も言ってこなかった。
口惜しげに唇の端を噛んでいるが、速度を上げることは無かった。最悪のケースを視野に入れているのだろう――アリスは激情に駆られて冷静な判断を下せなくなるような愚者ではない。
まだ日は暮れていない。時間はまだある――それがどれくらい残されているのか、あるいは本当に残っているのかは分からない。しかし、あると信じなければならなかった。
「間に合わせる……なんとしても間に合わねばならぬ」
「当たり前でしょ？　大丈夫……煙も何も上がっていないわ」
我らの向かう方角には、いつもと変わらぬ里の町並みが広がっている。視界に入っているとはいえ、距離はまだそれなりにあった。もどかしさを抑えつけ、アリスと二人しゃにむに里を目指す。
手紙を受け取る際、渡された手紙が小刻みに震えていることに気づいた。震えているのは手紙だけ、特に周りが揺れているわけではない。

それがアリスの身震いによる物で、手紙を伝って私に届いたと気づくのに要した時間は、我ながら長すぎる。
彼女が何故体を戦慄かせているのかは分からないが、手紙を読めばそれが理解できることは容易に予想がついた。
「これは……」
「どうやら予告状らしいわ。置き手紙だけど」
大雑把な内容はアリスの言うとおりで、要約すればそれは予告状のようなものだった。のようなものと曖昧なのは、読み方によってはそれが脅迫状とも読めるからである。
簡略にまとめればこうだ。自分のことを嗅ぎ回っている人間が居る。人間と言うことは里の手の者に違いない。だから私は里でお前を待っている――どう好意的に解釈しても、それがラブレターの類でないのは明白だ。
「この嗅ぎ回っている人間……というのは私のことだろうな」
里で待つ。文面はこうでも、本当に待っているだけとは考えにくい。何せ相手は森を破壊することを厭わぬ性格で、更に言えば妖怪殺しの容疑者でもある。
「迂闊だったわ……。そうよ、そいつがずっとここに留まってるなんて、そんな確証どこにも無かったのに……」
握り締めた拳が揺れる。ほぞを噛んだのは何も彼女だけではないが、しかし何時までも悔しがっているわけにはいかない。
「とにかく……急ぐしかなかろう。こうなってしまった以上、奴よりも速く里へ向かうしかあるまい」
負の感情に震えるアリスの肩に手を置き、落ち着きを取り戻させる。嘆くよりも先にやるべきことがあると気づいたのだろう。彼女は拳をほどき、顔を上げた。
「そうね……一刻も早く里へ着かなきゃ……」
その後の行動は速かった。くるりと踵を返したかと思うと、彼女は無言のまま小屋を後にする。少し開けたところまで早足で歩き、ピタリと立ち止まって森の切れ目から空を見上げる。私に軽く合図を

――振り返らずに手を小さく振ってみる程度の物を合図と呼ぶのならば――――したかと思えば、地面を蹴って飛翔した。
アリスの切り替えの早さ、そして迷いの無さに若干面食らったものの、私も彼女の後に続いて飛び立つ。
目標は一つ。里を守ることである。

里は無事だった。いつもと変わらぬ光景、変わらぬ里の営みが徐々に鮮明となって視界に入る。
煙も上がっておらず、炎も見えない。どうやら最悪の事態は避けられたらしい――あるいは、まだ始まっていないだけか。
「大丈夫みたいね……まだ」
アリスも同じ考えのようだ。里が襲撃されていないのを認めた上で、小さく加える。
「ああ。とりあえずは、な……」
森を出た時には空の一番高いところにあった太陽も、今や少し傾きかけている。移動にかかった時間は、思ったよりも長かったらしい。
この里の近くに、件の外来人が居る。湧き上がってくるその感情は、ヨーギーの身にあってはならない物だった。

疾駆（後書き）

久方ぶりのバトルの予感。

人形遣いの本領　A（前書き）

タイトルの割りにそうでもないです。

人形遣いの本領　A

里と外の間に、明確な区切りは存在しない。中心部は栄え、そこを基点とした同心円状に徐々に集落の密度が下がってゆき、やがて田畑へと至る。日本の流れを汲むとあって、城壁の類は存在していない。

つまるところ、往来は自由である。里に住む者も住まざる者も、皆一様に好きに入ることが出来、また出てゆくことが出来る。妖怪だろうと人間だろうと、門番に証を提出する必要も無い。そもそも門が無いのだ。

里は妖怪たちには見つからないよう隠されていると言うが、私はそれを公然の秘密のような物だと考えている。事実里では幾度と無く妖怪の出歩く姿を目撃しているし、酒場などは妖怪相手にも商売をする。

秘密はつまり妖怪たちに対する警告のようなものだろう――その中にあっては自分達は特異な存在であることを自覚し、謹んで行動せよ。

「……で、どうするの？　これから」

そう呟き、眉間に当てていた指を離すと、アリスは半眼となって目線をこちらに向けた。彼女の言いたいことは分かるが、かといって私が責められる筋合いの話ではない。

「うむ……考えてもみなかったな……」

とにかく、最悪の事態は免れた。免れたのだ。

我らが着く前に奴が里を襲撃するという未来は訪れず、里を包む空気は平穏そのものである。喜ぶことはあっても、それに不満を持つことはない。しかし。

「あんな文章まで残して我らを里に呼び立てておいて、まさか本人影も形も無いとはな……」

「おまけに名前も分からない。まったく、署名くらい入れておきな

さいよね」
「せめて待ち合わせ場所くらいは欲しいところだったな」
「それだと本格的にラブレターじゃないの。……まあ、確かに私もそう思うけど」
襲撃者探しは終わってなどいなかった――始まってすらいないのかもしれない。
疑い出せばきりが無い。アリスが外来人が動かない確証など無かったと言ったように、あの手紙が本物である確証もまた存在しなかったのだ。
里に向かっている、あるいはもう到着したかもしれない外来人を捜し出さなければならない。里に門番は居ないため、誰が何時入ってきたか分からない。かといって、見慣れぬ人物が来なかったかと里の住人に聞いて回るのでは手間がかかりすぎる。
手がかりはほぼ皆無、手詰まりと言っても良いだろう。嘆息したい気持ちを抑え――アリスは先ほどから何度も嘆息していたが――、今後についての話を切り出す。
「探すにせよ待つにせよ、でたらめに当たるわけにもいかんな……」
「森に一番近い場所を張ってみるのはどう？　私たちより遅れてるなら、待ってればそのうち来るでしょ？」
「しかし、分散するのはあまり賛同できぬな。たとえお主が見つけたとしても、彼奴と戦うのは私の役目だ。どうやってお互いに情報をやりとりするのだ？」
「ふっふっふ……」
不敵な声に驚き、慌てて彼女に向き直る。見れば、アリスはやや前傾姿勢になりながら肩を小さく上下に揺らしていた。下を向いた顔は髪の毛でうかがうことは出来ないが、声の通りならば彼女は笑っていることだろう。
芝居がかった大仰な動きで、彼女は首の動きで前髪を跳ね上げるように顔を上げた。汗ばんでいたためだろう。額に張り付いた幾本かの髪を左の手櫛で払いのけ、そのまま肩の高さに掌を上にして留め

たまま、何故か勝ち誇ったような笑みを浮かべている。
「私が何者か知らないようね？　これだから――」
「魔法使いだろう。七色の人形遣いと称される、人形のエキスパートで――」
「これだから！」
言葉を遮って反論すると、更にそれを大声で遮られる。周囲に人影は少なかったが、そのうちの何名かがこちらを振り向いた。目線に気づいたのだろう、彼女はばつが悪そうに咳払いをする。
「おほん。これだから無知な奴は困るわ。……この人形は何で操ってるのか知ってる？」
「魔法の糸だろう。この前お主が話してたではないか」
「あ、あれ？　そうだったかしら。それはともかく、糸電話は知ってるわよね？」
問いながら、アリスはなにやらしゃがみながらごそごそとやっていた。私が肯定の言葉を放つよりも早く立ち上がると、スッと右手を――人形を一つ差し出す。先ほどの動作はこれを取り出すためのものだったのだろう。ポケットや鞄があるわけでもなく、彼女がどこから取り出したのかは分からないが。
「じゃ、これ渡しておくから。何かあったらこの子に話しかけて頂戴ね。収穫無しなら収穫無しで、日が落ちたらここで落ち合いましょう」
人通りの多い里で、一人人形に向かって話しかける男の図を思い描いてもらいたい。あまりぞっとしない想像になった私は、彼女に意見することにした。他の手段を考えよう、と。
「……人形を糸電話に？　と、ま、待て！　まだ話は終わって――」
「とりあえず私は空から見てみるわ！　あなたは地上から探してみて！」
既に彼女は目の前から消えていた。ものの数秒で空高く飛び上がり、声も届かぬ何処かへと飛び去ってゆく。
残された私には、ただ黙って捜索を開始することしか出来なかった

――人形を片手に携えて。

里の拳法家

「いやー見てないねえ。何かやったのかい、その男ってのは」
「まあ……ごく個人的な用でな。ありがとう」
軽く礼を述べ、年配の男性と別れる。
何人目だろうか。数えていたわけではないが、恐らく二桁と少しと言ったところだろう。道行く人から話を聞くも、特にこれといった内容は未だ耳にしていない。
私のやっていることは本当に意味があるのだろうか。取り留めない事を考えながら、徐々に里の中心部へと向かう。中心部に近づくに従い、目に付く人の数も増えてきた。
とある角を曲がった途端、視界の端に何か小さく動く物が映った。一拍置いて、その場を取り巻く妙な雰囲気に気づく。すれ違う人は皆何故か足早に去ってゆく。
「あれは……」
小さな何かが飛んでいた。大きくは無いが、速度がそれほどでもないため、少し離れていても容易に判別できる。色は青。人々の合間を縫うように漂っているのは、無数の小さな人形達だった。
人々はしばし足を止め、奇異な目で人形達を眺めている。が、特に人里に害を与えるでもないと分かると、元の通り歩みを再開させる
――無害とはいえ関わらない方が良いと考えたのか、元よりもやや早足で。無理も無いことだ。
アリスは上空から、人形達に地上を探させているのだろう。圧倒的な人海戦術を前に、深々とため息を吐く。
「私の出番は無さそうだな……」
この調子で人形達が虱潰しに探していけば、外来人が見つかるのも時間の問題だ。一気に全身から力が抜け、丁度良いところにあった長椅子に座り込む。
気づけば、私は里の中心に近い広場に来ていた。物売りの露店や屋

台が並び、多くは無いが大道芸人の類も居る。それほど人口の多くない里で大道芸で食っていけるわけもないので、素人が小遣い稼ぎにやっているのだろう。
あたりは喧騒で溢れかえっている。活気付いた商人達や、それを冷やかす客達。品物で勝負をする店とは違い、より目を引くために変り種を行う大道芸人も居り、必然的にその周りには円状の人だかりが出来ていた。
人垣を掻き分けるのは手間なので、無礼と知りながらも上空から人の輪の真ん中に立つ男を眺める。一際賑わっている見世物は、どうも拳法の腕試しのようだった。挑むには金を賭ける必要があるが、挑戦者が勝てばそれを上回る賞金が出る。
――拳法、か。
私の師はヨーガを使って各国の拳法家と戦っていた時期があると言っていた。その教えを受けた私もまた、ある程度戦い方を習ってはいる。有名な拳法の構えや定石など、師の経験に基づく知識だ。
戦いに定石は数あれど、拳法の場合は守りこそが肝要である。技量が互角の場合、よりダメージを軽減した方が勝者となる。拳での攻めには隙が生じ、守る側はそこを狙うことができる。だからこそ守る隙を与えぬ神速が尊ばれ、また守りを物ともしない致命打が求められるのだ。
しかし、その男の構えは特異だった――あまりにも特異すぎた。
両腕をだらりと垂らしたまま、全身の力を抜いている。拳すら握らず、また猫の手のように指を曲げて打撃力を高める様子も無くとも、貫手や柔術の使い手の可能性があるため特に不自然ではない。問題は底ではない。
柔道家は一般に、両腕を前に伸ばして攻めと守りの起点を兼ねた構えを取る。基本となる構えは大抵攻守一体となっているものだ。だが、その男からは守ろうとする意思が全く伝わってこない。フットワークで軽く攻撃をいなすスタイルでも無いことは、その不動の足つきから想像ができる。だとすれば――

――初手をあえて差し出し、カウンターをとるスタイルか。
防ぐ前提ならば分かるが、ノーガードとなれば相手の技量に大きく左右される。ハイリスクハイリターンかもしれないが、的確に一撃を打ち込んだところでそれを補って余りあるリスキーさだ。
「うおおー！！　やれやれー！」
「次でこのにーちゃん五人抜きだぞ！！」
「里の意地見せてやれー！！」
両者は向かい合ったまま動かない。挑戦者側が警戒しているのだろう。飛び交う野次のいくつかが、騒音と化す前の声のまま耳に届く。その中に一つ、聞き逃せない物が混ざっていた。
――里の意地？
里の住人の出し物ならば、そんな概念が登場することは無い。となれば、あの拳法家は里の外の者――外来人の可能性がある。我らの探す外来人か、そうでないかはともかくとして。
と、歓声が――喚声かもしれない――起こった。囃し立てる声に混じり、期待外れのブーイングまで様々だが、決着の瞬間を見逃した私でもどちらが勝ったかはすぐに理解できた。
倒れているのは、挑戦者だった。

枝垂れ鋼の男

手合わせが終わると、遠巻きに眺めていた客達が次々とその場を離れ始めた。挑む者も居ないところを見れば、本日はここまでといったところか。

ゆっくりと降下する途中、拳法家がふとこちらに気づいたようだった。彼は空を飛ぶ人間を見ても驚かず、ごく自然にそれを受け入れて私を目線で追い続ける。私が着地するのにあわせ、彼は口を開いた。

「あなたも腕試し希望ですか？　いやーごめんなさい、もう今日はお開きなんですよ」

広げていた稽古道具や手書きの看板などを片付けながら、彼は申し訳無さそうに告げた。手を止めないところを見るに、本当に仕舞いなのだろう。

「いや、私はそのようなアレではない。通りすがりに盛況なのが見えてな、ふと立ち寄っただけだよ」

周りに置かれた小道具を見やる。「枝垂れ鋼」と毛筆でしたためられた、身の丈よりも大きな横断幕がいやでも目に入る。が、気にする間もなく彼が答えた。

「そうでしたか。しかし珍しいですね、空を飛ぶ人間なんて……」

「その割には驚いていなかなかったようだが？」

よくよく見れば、奇妙な男だった。拳法の青空道場を開いているかと思えば、特に引き締まった肉体をしているわけでもない。的確な一撃を叩き込むような目つきの鋭さも、気配を読むような機敏さも感じられない、極めて温厚そうな好青年然とした顔つきである。

そんな疑問を抱いているとは知らない彼は、作業の手を止め、軽く肩をすくめて答える。

「ええ、まあ。珍しいとはいえ、ここには居ないわけじゃないですし」

探りを入れてみるも、期待通りの内容ではなかった。ごくありふれた、恐らくここに暮らす人間の抱く感想として最も適した物である。苦笑する彼に向け、私は更に続ける。
「それにしても、良く私が人間と分かったものだな。最初にこの里へ来た時は大変だったが、お主のような者が居てくれればそれも避けられたかもしれぬ」
「見分ける方法は簡単ですよ。ここの妖怪たちは皆人間の姿をしているんです……」
そう言って、彼は語尾を濁した。直接口には出さなかったが、何を言いたいのかは伝わった――つまり、明らかに怪しい格好の私は、逆に人間でしかない。
「なるほどな。確かにその通りだ……ところで、一つ訊ねたいことがあるのだが」
「なんでしょう？」
近場にあったものは片付け終わったのか、彼は横断幕に手を伸ばしていた。数本の支柱から、横断幕をくくっていた紐を解いてゆく。
「外来人を探している。見慣れぬ者を見かけたなど、何か心当たりは無いだろうか？」
再び作業の手を止め、彼は腕を組んで少し考え込むような仕草を見せた。
「外来人……？　ああ、この間似顔絵を配ってた奴ですか？　それでしたら生憎……」
「そうか……邪魔して悪かったな。では――」
「……こ……ス。こち……アリ……」
これ以上得られる情報は無い。別れを告げて別の場所を当たろうとした刹那、どこからか声が聞こえた。
私のものでもなければ、目の前の彼の物でもない。声は女性のものだった。辺りを見回してみても、声の主は見当たらない。
「……ちらアリス。こちらアリス。聞こえてる？　返事をして！」
「おや？」

「む？　いや、ちょっと失礼」
怪訝そうな声を上げる彼に右手で断りを入れ、左の手に握っていた人形へ声をかける。見ている者は彼しか居ないが、やはり人前で人形と話すのはいささか辛かった。
「聞こえている。どうしたのだ？」
「どうしたもこうしたも……見つかったのよ！　じゃなきゃ連絡なんかしないわ！」
人形の向こうのアリスの剣幕が思い浮かべられるほどの大声で、彼女は糸越しにがなり立てる。思わず眉をひそめながら、左腕を少し伸ばし、人形をやや遠くへと離した。これで音量は若干小さくなる。
「見つけたの！　今すぐ来て！　場所は――」
彼女の告げた場所を耳にした途端、体中の神経に冷たい、暗いものが走るのを感じた――錯覚ではない。ヨーギーは体内のクンダリニーを燃やして炎を作り出す。それが力となり、全身を肉体として纏め上げている。それとまるで逆のことが起こったとなれば、明らかに何処かに異常をきたしている証拠である。
しかし――
「ああ。わかった。……すまんが、少々厄介なことになった。すぐに行かねばならん」
「はあ。良く分かりませんが、頑張ってくださいね」
事情が分からない彼は、困惑したような笑みを浮かべながらも適当な相槌を打ってよこした。
「ありがとう。では、邪魔したな……」
「活躍……期待してますよ。ヨーガ使いの垂石さん」
ぽつり、と彼は呟いた。
声の調子は酷く淡白になり、トーンも低くなっている。意味深な、意味ありげな発言である。
「活躍……？　何故それを――」
今すぐに問い質したい。そんな衝動に駆られるような言葉を放った彼の顔は、背負う夕陽の逆光が包み隠している。

無論、そんな暇は無かった。急がねばならない。己の身に何か得体の知れない事が起きていようとも――私は、向かわなければならない。

慧音宅へ。

合流

急ぐ。飛翔するのに必要な、結跏趺坐を組むことすらもどかしいほどに。
枝垂れ鋼の男を問い詰めたいと言う欲求を引き剥がし、私は無心に飛んだ。
重力の支配を一時的に中和することで意のままに振舞うことの出来る開放感の中、狂おしく歪むような感覚は何時しか高揚感へと変調しつつある。
心はどこまでも澄み切っていた。精神は絶頂に等しく冴え渡り、息を吐くタイミングの微妙なずれ、体内を巡る血の流れすら感じ取ることが出来た。
その冷静な脳がはじき出すのは、この感情が怒りと呼ばれるものであるという事実。ヨーギーにあってはならない感情の最たるものだ。冷静と激情の間にあり、双方を客観的に意識することが出来ているのはヨーギーとしての修行の成果か――単に既に制御し切れていない自分を眺めることしか出来ていないに過ぎないのか。
里はいつもの柔和な空気のままだが、私にとっては広漠たる暗闇に思われた。日が暮れるまではまだ時間があるが、沈まぬ太陽は無い。肌を滑る風の涼しさは頭を冷やせと無言で囁き、近づく夜を予感させる。しかし、今は闇の訪れを歓迎したくは無かった。

慧音宅へ近づくにつれ、私は動悸が速まるのを感じた。
想定したくは無い。最悪の事態を、私が駆けつけた時には既に外来人は慧音たちを襲っていたという未来を、私は考えたくなかった。
しかしそれを――逃げることを決して許さない『何か』が、私の中に存在する。
ヨーギーの本質は、精神と肉体の制御による調和を目標とし、自戒と自律によって己の存在を高めることにある。制御が失われれば調

和もまた失われ、精神に異常があれば肉体をも変容させてしまう。思考を停止することは、己の精神の制御に失敗することに他ならない。行き着く先は肉体の破滅である。故に、己の奥にある『何か』――上位自我、無意識などと呼ばれるが、私にも良く分かってはいない――は私の意思を超え極めて理性的な選択をとったのだ。望みを絶つ予測と、それでもなお望みに縋りたい自分の二律背反は心拍数を更に上昇させる。とめどなく汗が溢れ、風が体温を奪ってゆく。

目の前に宙に浮くアリスの姿を確認する時まで、その苦痛は続いた。彼女が目に入った途端、驚くほどあっけなく熱が引いてゆくのを感じた。本当の意味での冷静さを取り戻した時、体中を駆け巡っていた異常な衝動は影を潜めていた。

私の葛藤を知ってか知らずか、アリスはいつもの調子を崩さずに嘆息する。

「ああ、やっと来た。この下に――」

「外来人は……慧音たちは無事なのか！？」

「ちょっと落ち着きなさいよ。無事よ無事。だから話くらい聞きなさい」

詰問するように訊ねるも、アリスは軽くそれをいなした。声色一つ変えずに続ける。

「この下に外来人が居るわ。あの態度からして、あれは私たちが探していた外来人よ。だけど……」

「けど？」

頭を振り、下を――慧音宅と寺子屋を指しながら、ぼやくように呟く。

「特に何をするわけでもないのよ。慧音とか、あの妖精なんかを人質にするわけでもない……なんであいつがここに居るのか全くわからないわ」

聞きながら、アリスの指差す方向を見やる。寺子屋の周りには人気は無く、特に荒らされたような跡も無い。しばらく見渡していると、

井戸のそばに人影を一つ発見した。恐らくは、それが件の外来人なのだろう。
今までの会話の中で、彼女は外来人の行動を推測でなく断定で語っている。怪訝に思った私は、彼女にそれを問いただした。
「待て。と言うことは、お主は奴と会ったのか？」
「まあ、会ったといえば会ったことになるかしらね。飛んでるところを呼び止められて、あなたを呼んでくれって頼まれたわけだし」
「呼ぶ……？　それでは、慧音たちが無事と言うのも本当なのか？」
「本当よ！　この目で見たんだもの。だから分からないのよ。あいつがここであなたを待つ理由が」
彼女が嘘をついていないのはすぐに分かった――瞳が真剣そのものであることも理由として挙げられるが、他にもう一つ重要な根拠がある。即ち、彼女が嘘をつく必要が無い。
「確かに疑問はあるが……話していても仕方なさそうだな」
「……下りるの？」
「下りると言うのは縁起が良くないな。こだわっても詮無いことだが」
「こういうのは気持ちの問題よ。悪いより良いほうが良いわ。じゃ、行きましょうか」

合流（後書き）

次から当分バトルです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3507v/

東方瑜伽焔

2011年12月12日23時47分発行